

靈界物語 第五七卷 眞善美愛 申の巻

出口王仁三郎

## 凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第五七卷』愛善世界社

2006(平成18)年11月05日 第一刷發行

『靈界物語 第五十七卷』天聲社

1970(昭和45)年12月08日 第二刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。  
図表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜変更した。  
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）

## 目次

序文 じよぶん

總説歌 そうせつか

第一篇

照門山嵐 てるもんざんおろし

第一章 大山だいせん〔一四五一〕

第二章 煽動せんどう〔一四五二〕

第三章 野探やさがし〔一四五三〕

第四章 妖子えうし〔一四五四〕

第五章 糞闘ふんとう〔一四五五〕

第六章 強印がういん〔一四五六〕

第七章 暗闇くらがり〔一四五七〕

第八章 愚摺ぐすり〔一四五八〕

第二篇 顯幽兩通けんいうりやうつう

第九章 婆娑ばしや〔一四五九〕

第一〇章 轉香てんこう〔一四六〇〕

第十一章 鳥逃とりにがし〔一四六一〕

第一二章 三狂さんきやう〔一四六二〕

第一三章 惡醉怪あくすゐくわい〔一四六三〕

第一四章 人畜にんちく〔一四六四〕

第一五章 絲瓜へちま〔一四六五〕

第一六章 犬勞けんらう〔一四六六〕

第三篇 天上天下てんじやうてんか

第一七章 涼窓りやうさう〔一四六七〕

第一八章 翼琴よくきん〔一四六八〕

第一九章 抱月だきつき〔一四六九〕

第二〇章 犬鬪けんとう〔一四七〇〕

第二一章 言觸ことぶれ〔一四七一〕

第二二章 天葬てんさう〔一四七二〕

第二三章	藥罐 (一四七三)
第二四章	空縛 (一四七四)
第二五章	天聲 (一四七五)

~~~~~

序文 じよぶん

伯耆國皆生温泉濱屋旅館の見晴し佳き二階の廣間を當がはれ、朝日の光と大山の雄姿を眺め乍ら、大正十二年如月八日より十日迄三日間にていよいよ第五十七巻を口述し了りぬ。

スーラヤ (日天子) チヤンドラ・デーワブトラ (月天子) サマンタガン (普光天子) ラトナブラバ (寶光天子) アワバーサブラ (光耀天子) の守護の下に、漸く印度の國波斯の國境テルモン山の昔物語を大要述べ了りました。顧みれば瑞月が神の大道に入りしより滿二十五年に相當する今日、富士の神使に導かれ神教を

傳へられたる今日、出雲富士とて名も高き大山の雄姿を拜し、三保の松原に等し  
き夜見ヶ濱の白砂青松の磯邊を筆録者と共に逍遙し乍ら、今昔の感に打たれ、思  
はず歎息せざるを得ない。隱岐の島は遠く波間に浮び、幽かに山の頂を顯はし、  
三保ヶ關の靈地は眼前に横はり日本海の波に漂へるが如く見えて居る。八大龍王  
ナランダナーガラーシャ（歡喜龍王）、ウバナ ندا（善歡喜龍王）、サーガラ（海  
龍王）、ワーシユキ（多頭龍王）、タクシヤカ（視毒龍王）、マナスオン（大身  
大力龍王）、ウツパラカ（青蓮華色龍王）、アナワタブタ（無惱清涼龍王）、は  
鼓を打つて吾等一行を迎へ給ふ。北村隆光、加藤明子、藤田、松田、紙本の諸氏  
を始め谷川常清氏、湯淺清高竝に米子支部信者、及び近國の信者諸氏の日々の訪  
問を歡喜し乍ら、神の恵みのまにまに五七の巻を演べ了る。時しも綾の聖地より  
三代直澄教主は大本瑞祥會會長井上留五郎氏及び前會長湯川貫一氏と俱に來らる。  
瑞月は感極まつて言ふ所を知らず。茲に序文に代へ一言を記すことと致しました。

大正十二年舊二月十日

於伯州皆生温泉

總説歌

神かみが表おもてに現あらはれて

善ぜんと悪あくとを立たて別わける

善ぜんの中なかにも悪あくがあり

悪あくの中なかにも善ぜんがある

善ぜん悪あく正せい邪じやはオー二一の

知ち識しきの程ていど度どで判わからない

唯ただ何なに事ごとも惟かむ神ながら

神かみの御み旨ねに任まかすのみ

此この世よを造つくりし神かむ直な日ほひ

心こころも廣ひろき大おほ直な日ほひ

只ただ何なに事ごとも人ひとの世よは

直な日ほひに見み直なし聞き直なし

世よの過あやまは宣のり直なせ

人ひとは神かみの子こ神かみの宮みや

天あま津つ使つかひのエンゼルの

その精せい靈れいに神しん格かくを

充みたされ肉にく體たい人じんに容いり

天てん地ち經けい綸りんの神しん業げふに

奉ほう仕しせむため生うま

ア、惟かむ神ながら々ながら

御み靈たま幸さちはへましまして

此この世よの終はりに日に地ち月げつ



誠まことの神かみが降くだりまし

瑞みづの御靈みたまに神業しんげふを

任よさし玉たまひし尊たふとさよ

世よは常暗とこやみとなり果はてて

黑白あやめも判わかぬ時ときなれど

光ひかりの神かみは御空みそらより

鳩はとの如ごとくに降くだりまし

空前くうぜん絶後ぜつごの神業しんげふを

經綸けいりんさるるぞ有あり難がたき

國くにの御祖みおやの大御神おほみかみ

嚴いづの精靈みたまに神格しんかくを

充みたし豫言者よげんしゃの體たいに依より

出口いっきの守かみと現あらは

この世よを照てらし玉たまふ世よは

漸やうやく近ちかづき來きたりけり

仰あふぎ敬みやまへ四方よもの國くに

青人草あをひとぐさの末すえまでも

三五あななひけう教みをしへの御教みしへは

最後さいごの光明くわうみやうご良よめなり

眼まなこを醒さませ耳みみ開ひらき

神かみの生宮いきみや豫言者よげんしゃの

貴つうの言靈ことたま守まもるべし

ア、惟かむながら神かむながら々々

御靈みたま幸さちはへましませよ

朝日あさひは照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも

地震つちゆり海うみは淺あするとも

誠まこと一つは世よを救すくふ

エスペラントやバハイ教けう 紅卍字教こうまんじけう や普化教ふけけう も  
 残のこらず元津大神もとつおほかみの 仕組しぐみ給たまひし御經綸ごけいりん  
 その外ほか諸々もろもろの神教しんけうは 此この世よの末すゑに現あらはれて  
 世よを立たて直なほす爲ためぞかし 國會こくわい開ひらきが始はじまりて  
 十二じふにの流ながれ一いつ時ときに 清きよく流ながる和わ田だの原はら  
 底井そこみも知しれぬ海潮かいてうの 深ふかき思おもひぞ計はかれかし  
 いよいよ五み六ろく七しちの世よとなれば 山さん河か草さう木もく言いふも更さら  
 禽獸きんじう蟲魚ちうぎよも押お竝しなべて 神かみの仁じん慈じの露つゆにぬれ  
 一ひと人しほ清きよき靈光れいくわうを 照てらし榮さかふる世よとならむ  
 仰あふぎ敬めやまへ神かみの德とく 慶よろこび奉まつれ神かみの愛あい。

大正十二年舊二月十日

皆生温泉にて

第一篇 照門山嵐てるもんざんあらし

第一章 大山だいせん（一四五）

金輪こんりん奈落ならくの地底ちていから  
風輪ふうりん、水輪すいりん、地輪ちりんをば

貫つらぬき出いでたる大高峰だいかうほう  
伯耆はつぎの國くにの大山だいせんは

日本にほん大地だいちの要かなめなり  
白扇はくせん空そらに逆さかさま

懸かかりて沈しづむ日本にほん海かい  
八岐やまた大蛇をろちの憑ひよう依いせる

大黒主おほくろぬしの曲津まがつ見みが  
簸ひの川かは上かみに割據かつきよして

風雨ふううを起おこし洪水みづおこし  
狭田さだや長田ながたに生おひ立たちし

稲田いなだの姫ひめを年々としとしに  
惱なやませ人ひとの命いのちをば

取とらむとせしぞ歎うたてけれ  
大正たいしやう十二じふに癸みづのとの

亥年の春や如月の

日光輝く夜見ヶ濱

小松林の中央に

堅磐常磐に築きたる

神の恵みの温泉場

濱屋旅館の二階の間

いつもの通り横に臥し

眞善美愛第九卷

波斯と月の國境

朝日もきらきらテルモンの

山の館に住まひたる

小國別が物語

三千年の未迄も

その功を残したる

三五教の三千彦が

難行苦行の經緯を

いよいよカータルブラバーサ マハーダルマ・タダアガタ

唯一言も漏らさじと 東の窓に向ひつつ

萬年筆を走らせる 夜見の濱風颯々と

吹き來る度にカーテンが バタリバタリと拍子取り

言靈車押し來る ア、惟神々々

五十と七つの物語

御靈幸倍ましまして

御靈幸倍ましまして

完全つまらに委曲つばらに述のべ終をへて

綾あやの聖地せいちの家苞いへづとに

なさしめ給たまへと大神おほかみの

御前みまへに謹つつしみ願ねぎまつる

朝日あさひは照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも

假令たとへ大地だいちは沈しづむとも

誠まこと一つの三五あななひの

教をしへの主意しゆいを一ひと通り

寫うつさにやならぬ神かみの法のり

湯ゆにあてられて瑞月ずゐげつが

腹はらをガラガラ下くだらせつ

下くだらぬ理窟りくつを交こせて

濱邊はまべで取とれた法螺貝ほらがひの

止とめど度もなしに吹ふき立たてる

三あななひ五けつ教は大神おほかみの直ちよく接せつ内流ないりうを受うけ、愛あいの善ぜんと、信しんの眞しんをもつて唯ゆゑ一の教理けうりとなし、

智ち愛あい勇親ゆうしんの四魂しこんを活くわつ用ようさせ、善ぜんの爲ために善ぜんを行おこなひ、用ようの爲ために用ようを勤つとめ、眞しんの爲ために眞しん

を勵はげむ。故ゆゑに其その言げん行かう心しんは常つねに神かみに向むかひ、神かみと共ともにあり、所いはゆる謂かみ神かみの生宮いきみやにして天地てんち

經綸いりんの主宰しゆさい者しやたるの實じつを擧あげ、生いき乍ながら天國てんごくに籍せきを置おき、恰あたかも黄金時代わうごんじだいの天人てんにんの

如く、神の意志其儘を地上の蒼生に宣傳し實行し、以て衆生一切を濟度するをもつて唯一の務めとして居たのである。故にバラモン教ウラル教其他數多の教派の如く、自愛又は世間愛に墮して知らず識らずに神に背き、虚偽を眞理と信じ、惡を善と誤解するが如き行動は取らなかつたのである。神より來れる愛及び善竝に信眞の光に浴し、惟神の儘に其實を示すが故に、麻柱の教と神から稱へられたのである。自愛及び世間愛に墮落せる教は所謂外道である。外道とは天地惟神の大道に外れたる教を云ふ。これ皆邪神界に精靈を蹂躪され、知らず知らずに地獄界及び兇黨界に墮落したものである。外道には九十五の種類があつて、其重なるものは、カビラ・マハールシといふ。このカビラ・マハールシは、即ち大黒主の事であり、三五教の眞善美の言靈に追ひ捲られて自轉倒島の要と湧出したる伯耆の國のマハールシ（大山）に八岐大蛇の靈と共に割據し、六師外道と云つて外道の中にても最も勝れたる惡魔を引き率れ天下を攪亂し、遂に素盞鳴尊のために言向け和されたのである。六師外道とは、ブランナーカーシャバ、マスカリー・ガールシャリーブトラ、サンジャイーヴィ・ラチャーブトラ、アザタケー・シャカムバ

ラ、カクダカー・トヤーヤナ、ニルケラントー・チニヤー・チブトラの六大外道である。此外道は古今東西の區別なく今日と雖も尚天下を横行闊歩し、暴威を逞しうして居るのである。

ブランナーカーシャバとは君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友等の道を輕んじ、現界の一切を無視し、生存競争、優勝劣敗をもつて人生の本義となし、輕死重生の主義を盛に主張し、宇宙一切は總て空なり、無なり、人間の肉體は死滅するや否や煙の如く消え果て、死後の靈魂等は決して残るものでない。果して死後に靈魂ありとすれば、例へば唐辛子を焼いて灰となし、尚ほ其後にも唐辛子の辛味存するや、決して存在せざるべし。是を思へば人間死後の生活を論ずるは迂愚の骨頂なり、迷妄の極みなりと斷案を下す唯物論者の如きものである。次に、

マスカリ・ガーシャリーブトラは、一切衆生の苦惱も歡樂も歡樂も決して人間の行因に依るものではない。何れも自然に苦樂が來るものである。例へば茲に一つの種子を蒔くに、其種子は肥えた土の日當りよき所に蒔かれたのは、他に勝れて發達し、枚葉繁茂し、麗しき花を咲かせ、麗しき實を結び、人に愛せらるるに引き

替へ、同じ種子でありながら、瘦せた土地に蒔かれ、或は陰裏に蒔かれた時は十分の光線を受くる事能はず其發育も悪しく花も小さく、満足な實も結ばないやうなものである。然るに其種子に善悪は決してない。同じ木から取つた同じ種である。又其種には決して善の行ひも惡の行ひもない。唯蒔かれた所の場所即ち境遇によつて、或は歡喜に浴し、或は苦惱に浸るのである。故に人間は、蒔かれた所が悪ければ、何程氣張つてもよき場所に蒔かれた種に勝つ事は出来ない。故に人間の苦樂には決して行因はないものだ、と主張する無因外道である。又是を自然外道とも云ふ。次に、

サンジヤイーヴィ・ラチャートラと云ふのは、人間は決して修業なんかする必要がない。天地の草木を見ても春が來れば自然に花が咲き、秋が來れば自然に實が生り、冬が來れば自然に葉が散る如く、八萬劫が來れば自然に人間の苦は盡きて道を得るとなすものである。要するに自暴自棄、惟神中毒の外道であつて、是を無因外道の一種となすのである。二十世紀の三五教には此の種の人が随分混入して居るやうである。次に、



アザタケー・シャカムバラ、此外道は現世に於て、何でも構はぬ、苦しみさへして置けば、きつと他生に於て、天國に生れ、無限の歡樂に浴し、百味の飲食を與へられ、榮耀榮華に平和の生活を永遠無限に送られるものとなし、人間として營むべき事業も爲さず深山幽谷に身を潛め、火物斷をしたり、穀食を避け、松葉を噛み、芋などを掘り、空氣を吸ひ、寒中眞裸、眞裸足となりて寒さを耐へ、夏は蚊に刺されて所有苦しみをなし、其苦の報いを來世に得むとする所謂苦行外道である。此外道も亦今日は随分彼方此方に現はれて居る。さうして眞理に暗き現在の人間はかかる苦行外道を指して眞人となし、聖人と尊び神佛の如く尊敬するものである。斯かる苦行外道を尊敬する人間も亦、同氣相求むるの理によつて知らず識らずに地獄道に籍を置いて居る小外道である。次に、カクダカー・トヤーヤナ、この外道はバンロギズム（汎理論）、スピリチュアリズム・バンセイズム（唯心的汎神論）だとか、バンフシギズム（汎心論）だとか、アーセイズム（無神論）だとか、ブルラリズム（多元論）だとか、モニズム（一元論）だとか或はソシアリズム（社會主義）アナーキズム（無政府主義）

だとか、ニヒリズム（虚無主義）だとか、コンミニズム（共産主義）だとか、種々雑多の利己的、形體的、自然的、世界的愛に對して意見を盛に主張し、無形の靈界に對して一瞥も呉れず、且靈界や神佛を無視しながらも、現界に於ても徹底する能はず、靈界に於ては等閑ながらも、或時は些しく靈界の存在を認めて見たり、或時は現界計りに執着したり、精神の歸着點を失ふたり、二途不攝の異見外道である。次に、

ニルケラントー・ヂニヤー・ヂブトラ、此外道は、人間の苦樂と云ふものは素から因縁が定つて居るものだ。例へば三碧の星はどうだとか、九紫の星はどうだとか、子の年に生れたからどうの、丑の年に生れたからどうだとか、身魂の因縁が好いとか悪いとか、宿命説に墮落した宿命外道である。斯る宿命外道は如何程神佛を信仰すると、自分の定まつた運命を轉換する事は出来ない。何事も運命と諦めて其道に殉ずるより外はない。オタマ杓子は鯰に似てゐるが、少し大きくなると手足が生へて蛙になつて了ふ。どうしても鯰になる事は出来ない。それ故因縁の悪いものが神を信じた所で誠を盡した所で決して立派なものになれさうな

事はない。何も前世の因縁性来だと断定をくだす無明暗黒なる常見外道であるが、斯の如き外道は、何れも神或は佛以外の所見にして、各一派の學説を立て、科學に立脚したる靈魂研究でなければ駄目だとか、或は神佛の名を標榜する事を忌み嫌ひ、太靈道だとか、二燈園だとか、或は何々會だとか、勝手な名を附して靈界を研究せむとする所謂常見外道である。現代は此外道最も蔓延し神佛の名を稱ふるよりも靈智學とか、神靈研究だとか、靈學研究會だとか云ふ科學的名稱に隠るを以て文明人の態度らしく装ひ、蟻の甘きに集ふが如く集まり來つて、雲の彼方の星を探らふとする如き外道である。斯の如きニルケラントー・チニヤー・チブトラは三五教の中からも折々發生したものである。何れも自尊主義の慢心から、斯る外道に知らず識らず墮落するのである。

序に十二因縁を略解して置く、人間には、

一、無明、アエドヤー

二、行、サンスカーラ

三、識しき、ボチニヤーナ

四、名色みやうしき、ナーマルーバ

五、六入ろくにふ、サダーヤタナ

六、觸しよく、スバルシヤ

七、愛え、エータナー

八、愛あい、ツルシユーナ

九、取しゆ、ウバーダーナ

十、有う、バワ

十一、生しやう、チャーチ

十二、老死らうし、チャラー・マラナ

の十二因縁じふにいんねんがある。

無明むみやうとは、過去一切くわこいつさいの煩惱ぼんなうを云いひ、母ははの體中たいちゆうに托たくする陰妄いんぼうの意識いしきを云いふ。

行ぎやうとは過去煩惱くわこぼんなうの造作ざうさを云いひ、名色みやうしきの名みやうとは心こころの四蘊しいうんであり、

識しきとは現世げんせ色しきとは形質けいしつ

の一蘊である。六入とは、母の體中にある中に於て六根を成ずるを云ふ。觸とは三四才迄に外的の塵埃の根元に觸るるを覺ゆる状態を云ふ。愛とは生れて五六才より十二三才迄の間に強く外部の塵埃を受けて、好惡の識別を起すを云ふ。愛とは十四五才より十八九才までの間に外塵を貪り愛する念慮を起すを云ふ。取とは二十才以後一層強く、外塵に執着の念を生ずるを云ふ。有とは、未來三有の果を招くべき種々の業因を造作し、積集するを云ふ。生とは未來六道又は八衢の中に生ずるを云ふ。老死とは未來愛生の身體、又遂に朽壞するを云ふ。この十二因縁はどうしても人間として避くべからざる事である。併し乍ら、此十二因縁の關門を通過して初めて人間は神の生涯に入り、永遠無窮の眞の生命に入つて、天人的生治を送るべきものである。然るに總ての多くの人間は九十五種外道のために身心を曇らされ忽ち地獄道に進み入り、宇宙の大元靈たる神に背き、無限の苦を嘗むるに至るものが多い。故に神は、嚴瑞二靈を地上に下し天國の福音を普く宣傳せしめ、一人も残らず天國の住民たらしめむと、聖靈を充して豫言者に來らせ給ふたのである。如何に現世に於て聖人賢人、有徳者と稱へらるる共、靈界の消息

に通ぜず、神の恩恵を無みするものは、其心既に神に背けるが故に、到底天國の生涯を送る事は出来難いものである。約束なき救ひは決して求められないものである。故に神は前にシヤキヤムニ・タダーガタを下して靈界の消息を世人に示し給ひ、又ハリストスやマホメツト其他の眞人を豫言者として地上に下し、萬民を天國に救ふ約束を垂れさせられた。されど九十五種外道の跋扈甚だしく、神の約束を信ずるもの殆ど無きに至つた。それ故世は益々暗黒となり、餓鬼、畜生、修羅の巷となつて仕舞つた。茲に至仁至愛なる皇大神は、この慘状を救はむが爲に、嚴瑞二靈を地上に下し、萬民に神約を垂れ給ふたのである。ああされど無明暗黒の中に沈める一切の衆生は救世の慈音に耳を傾くる者は少い。實に思うて見れば悲惨の極みである。ああ惟神靈幸倍坐世。

（大正一二・三・二四 舊二・八 於伯耆國皆生温泉濱屋 加藤明子録）

テルモン山の神館の奥の間には、小國別の病益々重く、命旦夕に迫つて来た。館の内は上を下へと騒ぎ廻り、小國姫、三千彦及び家令のオールスチンは、二人の看護婦と共に病床につききり、死に行く人の身の上を案じ、胸を躍らせつつあった。三千彦は最早是非なしと神に向つて天國へ救ひ玉はむ事を祈願した。小國別は顯幽辨別のつかざる精神状態となつた。小國別は嬉しさうな顔して空を眺め、  
「アア貴方はチャンドラ・デーワブトラ様（月天子）、貴方はスーラヤ様（日天子）ようマア……只今参ります。併し乍らモウ一目吾二人の娘に會ふまで御猶豫を下さいませ。アア何と云ふマノーヂニヤスワッラ（樂音）だらう。女房にもあの聲が聞かしてやり度い。これ小國姫、お前はあのマノーヂニヤスワッラ（樂音）が聞えて居るか。あの綺麗なエンゼルが目につくか。もしもしエンゼル様、暫らく御猶豫を願ひます。これが此世の別れでムいますから」  
と頻りに掌を合して居る。  
小國姫「モシ旦那様、確りして下さいませ。貴方は病氣のために左様な幻覺を感じて居られるのでせう。マノーヂニヤガンダルワ（樂）の聲も聞えては居ない

ぢやありませんか。そしてエンゼルのお姿も決して見えませぬよ。確りなさいませ。躑やがて姉妹二人が歸かへつて参りますから」

小國別は女房の聲が耳に這入らぬと見えて、尚も言葉をにつづけ、

「何とマア美しい花だこと、もしエンゼル様、之はダリヤの花でムいますか。エ、

桃の花、こんな大きな桃の花が、どうして又咲いたのでせう。何と仰有います、

第一天國の桃林の桃の花、へー、美しいものでムいますなア。私、それへ参るの

ですか。いや有難うムいます」

小國姫「もし三千彦の先生様、どうでムいますか。到底主人の生命は駄目でム

いませうな。せめてデビスやケリナの歸つて來る迄、何とかして命をとり止めて

頂き度いものです」

三千彦「お喜びなさいませ。決して幻覺でも何でもありません。貴方の目には分

らぬか知りませぬが、あの通りチャンドラデーワブトラ様やスーラ様がエンゼ

ルとなつて天國に救ふべくお見えになつて居ます。今お願を致しますから、親娘

對面が濟む迄、天國行の猶豫を願ひませう」



と三千彦は拍手をうち、天の數歌を歌ひ祈願を籠めた。月天子、日天子の兩エンゼルは三千彦の乞を容れ、四邊に芳香を投げ、微妙の音樂につれて一先づ天上に歸り玉うた。殆ど歸幽して居た小國別は再び正氣になり、目を靜かに開ひて四邊を打眺め、

「ア、女房、そこに居たか。貴方は三千彦様、ア、大變な美しいエンゼル様に結構な處へ導かれて行く所だつた。娘は未だ歸つて來ぬかな」

小國姫「ハイ、未だ歸りませぬが、臆て神様のお蔭で無事な顔を見せるでういませう。御安心下さいませ」

と自分も二人の姉妹の事を案じ乍ら故意とに氣樂さうに云つてゐる。小國別は

「會ひたいものだな」と頻りに憧れ乍らスヤスヤと眠りに就いた。此時館の周圍に當つて老若男女の叫び聲が聞えて來た。小國姫は夫の看護に手が放されないの  
で、ソファアの側らに看護婦と共に附きつて居る。オールスチンは三千彦と共に  
玄關口に現はれ見れば赤鉢巻に赤襷の荒くれ男酒に酔ひ潰れてヒヨロヒヨロし乍  
ら雪崩の如く押かけ來り、矢場にオールスチンを突飛ばし、其上をドカドカと踏

みにじり、三千彦を寄つて集つて手を取り、足をとり、凱歌を擧げてドンドンドンとテルモン山の山奥指して、數十人の荒男がワツシヨワツシヨと掛け聲諸共運び行く。オールスチンの悴ワツクスは、驢馬に跨り群衆を指揮し乍ら采配を振つて居る。目的物の三千彦は漸く攫はれた。ワツクスは先づ一安心と玄關口に進入し見れば、父のオールスチンが人事不省になつて倒れてゐる。矢場に兩眼に目隠しを施こし、水を吹かけ氣つけを飲ませ、漸くにして蘇生せしめた。兩眼を布で括つて置いたのは父にワツクスの姿を覺られぬための用意であつた。流石悪人のワツクスも父の危難を見ては救はずには居られなかつたからである。ワツクスは三千彦を悪友のエキス、ヘルマンに命じ山奥に拉し去らしめ、冷たい岩窟の中に押込めて置いた。

ワツクス「サア、之からデビス姫を生捕せねばならぬ。さりとして何とか群衆を誑さねば此目的は達し得ない」  
と再び驢馬を引返し十字街頭に立ち、豆太鼓を叩き乍ら、又もや辻説法を始め出した。

ワックス「宮町の老若男女諸君よ、諸君の盡力によつてテルモン山の神館に禍する三五教の悪宣傳使三千彦を漸くの事に生捕りました。彼奴は館の嬢様デビス姫と密かに牒し合せ此神館を横領し、あらゆる魔法を使つて町民諸氏を苦しめる準備を致して居りましたぞ。此度の小國別様の御病氣も全く三千彦がなす業、大恩ある生神様の御恩を報ずるは今この時でゐる。何程デビス姫が大切なお嬢さまとは云へ、バラモン教の教敵なる三五教の悪宣傳使と情を通じ、父のお館を占領し、町民を苦めむと致さるる以上は、一時改心が出来るまでは吾々の手に預つて、お館に歸さないやうにせなくてはなりません。今の心で館へ歸られては大變でゐるぞ。如意寶珠のお館の寶も三千彦と兩人牒し合せ奪ひ取つたに相違ないませぬ。それで皆さまの力をかつて、デビス姫が今ここに歸り來らば、有無を云はせず、テルモン山の岩窟に連れ行く事に致しませう。之は決してワックスの私言ではいませぬ。館の小國姫の御命令でゐますぞ。皆さま、宜しく頼みます」

と唸鳴りつけた。熱しきつたる群衆は馬鹿息子のワックスが言葉を、さまで信用するものはないが、群衆心理と云ふものは不思議なもので、三千彦を捕虜とした

勢いきほひに乗じやうじ、一いちも二にも無なくワツクスのことばの言こと葉はを鵜う呑のみにし、第二だいにの計けい畫かくとしてデビス  
姫ひめを捕ほ縛ばくせむと宮みや町まちを後あとに郊かう外ぐわいまで驅かけ出だした。  
折をりから大だい原げん野やの中央まんなを宣せん傳でん歌かを歌うたひ乍ながら、男なん女にょ四よ人にん連づれ此こ方なたに向むかつて進すすみ來く  
ものがあつた。

エミシカ神かみが表おもてに現あらはれて 善ぜん神しん邪じゃ神しんを立たて分わける

此この世よを造つくりし神かみ直なほ日ひ 心こころも廣ひろき大おほ直なほ日ひ

只ただ何なに事ことも人ひとの世よは 直なほ日ひに見み直なほせ聞きき直なほせ

身みの過あやまは宣のり直なほせ 三あな五な教ひけうの宣せん傳でん使し

治はる國くに別に助たすけられ バラモン教けうのカーネルと

仕つかへ侍はべりし此このエミシ 現げん實じつ界かいの欲よくを棄すて

一い切っ萬まい事じ神しん界かいに 身みも魂たまも任まかせつつ

比び丘くの姿すがたと相あひ成なりて 山やま川かは渡わたり野の路ぢを越こえ

神かみの教をしへを遠をち近こちに 宣のり傳つたへ行ゆく折をりもあれ

エルシナ川の激流に

落ち込み漂ふ人々を

命を的に救ひ上げ

検め見ればこは如何に

バラモン教に仕へたる

ベル、ヘル、シャルの軍人

ケリナの姫の四人連れ

やうやう三人の命をば

取り返しつつ川岸を

傳うて來たる草野原

ベルとヘルとの兩人は

俄に惡心萌芽して

吾等二人の命をば

奪らむとしたる淺間しさ

月照彦の神力に

照らされ惡魔は忽ちに

雲を霞と逃げて行く

後に二人は勇み立ち

月の光を身に浴びて

露野を涉り進む折

道の傍の方岩に

俄に唸く人の聲

はて訝かしと窺へば

デビスの姫やベル、ヘルの

三人の男女と知るよりも

二度ビツクリの二人連れ

種々雑多と介抱して

三人の命を相救ひ

喜ぶ間もなくベルの奴 デビスの姫の身につけし

七寶悉く掠奪し 草野に姿を隠しける

アア如何にせむ曲神に 呪はれきつた盗人の

如何に誠を説くとても 悟る術なき憐れさよ

手負ひ玉ひしデビス姫 ヘルの背中に負はせつつ

テルモン山の神館 目當に進む野路の上

守らせ玉へ惟神 神の御前に願ぎ奉る

此世を造りし神直日 心も廣き大直日

只何事も人の世は 直日に見直せ聞き直せ

身の過は宣り直せ 神は吾等と俱にあり

如何なる曲の攻め來とも 誠一つの大道に

さやる術なき曲津神 一日も早く魂を

洗ひ清めて大神の 誠の道に歸れかし

アア惟神々々 御靈幸はひましませよ

ヘルはデビス姫を背に負ひ乍ら息も苦しげに一歩々々拍子をとつて歌ひ出した。

ウントコドツコイ ドツコイシヨ 悪の酬いは目のあたり

バラモン軍の解散と 同時に心佞け出し

忽ち魔道に逆轉し 覆面頭巾の怪装で

旅人を掠め懐の 寶を奪ふ追剥と

一度はなりし果敢なさよ ベルとシャルとの悪友に

唆かされて忽ちに 思ひもよらぬ泥坊の

仲間となりて行く人の 衣を脱がせ金を奪り

擧句の果は命まで 奪りて露命を繋ぎつつ

エルシナ川の袂まで 忍び忍びに來て見れば

ザンブと立ちし水煙 如何なる人の投身ぞや

命を助けにやなるまいと 身を躍らして深淵に

跳び込み二人を救ひ出し 又もやベルの悪人と

つまらぬ事を争ひつ

再び淵に轉落し

魂は中空に跳び出して

八衢街道の旅をなし

闇に迷へる時もあれ

忽ち聞ゆる法螺の聲

高姫館の危難をば

求道居士に救はれて

再び此世の人となり

神の恵みを喜びつ

居士の御後に従ひて

エルシナ谷の山口に

來かかる折しも一萬兩

所持し玉ふと聞くよりも

心の鬼は忽ちに

角振り立てて狂ひ出し

ベルと二人が牒し合ひ

如何にもなしてこの金を

奪はむものと四苦八苦

遂には神に嚇され

命からがら山を越え

不動の瀧に逃げ行きて

怪しき姿に驚きつ

慄ひ戦く折もあれ

怪しの姿は灌壺を

上りてトボトボ山坂を

木の間を潜り歸り行く

木の間を洩るる月影に



光眩ひかまばゆき寶石ほうせきは星ほしの如ごとくにピカピカと

輝かがやきわたる人の顔かほこれ見逃みのがしてなるものか

俺おれにつづけと云いひ乍ながらベルは一步前ひとあしさきに立たち

暗くらき谷間たにまを潜くぐり抜ぬけ月つきの白しらみし山口やまぐちの

草くさ茫茫ぼうぼうと生はえ茂しげる中なかに目立めだちていと廣ひろき

巖いはほの側そばに來きて見みれば以前いぜんの女をんなは方岩はこいはの

上うへに安坐あんざし月光げつくわうに向むかつて何なにか祈いのり居ある

隙すきを覗つかがひベルの奴やつ猿臂えんぴを伸のばして寶玉ほうぎよくの

光ひかりを狙ねらつて【ムシ】らむと飛とびかかりたる一刹那いつせつな

ズドンと許ばかり二三間にさんげん投なげ出だされたる淺間あさましさ

之これを見るみよりウントコシヨ四邊あたりに白しろく光ひかりたる

枯木かれぼく杭くひを拾ひろひ上げ無性むしやう矢鱈やたらにウントコシヨ

骨ほねも挫くだけと女をんなをば目めあてにウンと打下うちおろす

キヤツと一聲ひとこゑ斷だん末まつ魔まやれ安心あんしんと胸むねを撫なで

ベルに水をば與へつつ 種々雑多と介抱して

漸く息を吹き返し 又もや寶の奪合ひに

一悶錯をおツ初め 二人は息も絶々に

露おく草に倒れけり かかる處へ三五の

教の道の求道居士 ケリナの姫と諸共に

現はれまして吾々の 命を救ひ玉ひてゆ

ここに心をと直し 罪亡ぼしの其爲めに

デビスの姫を背に負ひ 重たき足を引摺りつ

テルモン山の神館 小國別の御前に

お詫旁進み行く 吾身の上ぞ果敢なけれ

アア惟神々々 御靈幸はひましまして

ヘルが犯せし罪科を 一日も早く赦しまし

生きては神の御用に立ち 死しては尊き天國の

清き生涯送るべく 守らせ玉へ惟神

天地を統ぶる大神の

御前に畏み祈ぎまつる

と歌ひ乍らテルモン山の中腹、宮町を指して爪先上りの原野を歸り來る。種々雜多の旗を立てた宮町の老若男女はワックスを隊長とし、デビス姫を兔も角生捕らむものと、町内隈なく探し、遂に郊外にまで現はれて來た。求道居士一行は、そんな變事が起つてゐるとは夢にも知らず、悠々として宣傳歌を歌ひながら、道の傍のパインの森に少時息を休めて居た。群衆の喊聲は時々刻々に高まり來る。

(大正一二・三・二四 舊二・八 於皆生温泉濱屋 北村隆光録)

### 第三章 野探(一四五三)

求道居士はデビス、ケリナをパインの森迄送り來り、ヘルと共に少時息を休めて居た。忽ち老若男女の鬨の聲、鉦や太鼓を鳴らしながら、

群衆ぐんしゅう 返せかへ戻せもど、三五教あななひけうの悪神あくがみよ ドンドコドンドコ ドコドコドン

チヤンチキチヤンチキ チヤンチキチン 大事だいじの大事だいじのお姫ひめさま

テルモン館やかたのお姫ひめさま ドンドコドンドコ ドコドコドン

チヤンチキチヤンチキ チヤンチキチン 不動ふどうの瀧たきへ引きひ込んで

悪逆あくぎやく無道ぶだうの三千彦みちひこを お先さきへ館やかたへ忍しのばせつ

金剛こんがう不壊ぶゑの如意にょい寶珠ほつしゆ 大事だいじの大事だいじのお寶たからを

隠かくした奴やつは三千彦みちひこだ 返せかへ 戻せもど 如意にょい寶珠ほつしゆ

ドンドコドンドコ ドコドコドン チヤンチキチヤンチキ チヤンチキチン

如意にょいの寶珠ほつしゆはバラモンの神かみのお蔭かげで返かへつたが

肝腎かんじん要かなめのお姫ひめさま 返せかへ戻せもどやサア早はやう

三五教あななひけうの宣傳せんでん使し 如何いかなる魔法まはふを使つかふとも

此方こちらにや此方こちらの魔法まはふがある 返せかへ戻せもどサア早はやく

大事だいじの大事だいじのお姫ひめさま も一つひと大事だいじなケリナ姫ひめ

三年前さんねんに館やかたをば お出でましなさつたそれ限かぎり

根ねつから歸かへつてムこまらない      ドンドコドンドコ      ドコドコドン  
 チヤンチキチヤンチキ      チヤンチキチン      これも矢張やっぱり三五あなひの  
 惡神わるがみども共とものなす業わざと      ワツクス司つかさの御託ごたく宣せん  
 よもや間違まちがひムこまるまい      ドンドコドンドコ      ドコドコドン  
 チヤンチキチヤンチキ      チヤンチキチン      エーエーエ  
 さても此度このたびテルモン館やかた      俄にはかに惡魔あくまが到來たうらいし  
 肝腎かんじん要かなめの如意寶珠にょいほつしゆ      盜ぬすんで次つぎにお姫ひめさま  
 銜くわへて歸いなうと企たくみつ      まづ手初てはじめに教主けうしゆさま  
 小國をくに別のの命いのちをば      所在あらゆる魔法まはふを使つかひ      つつ  
 命いのちを取とらうと企たくみ居ある      斯かうなりや館やかたの損そんでない  
 宮町みやまち中ちゆうの大損おほぞんだ      テルモン山さんの中腹ちゆうぶくに  
 泰平たいへいの夢ゆめを貪むさぼりし      天下てんか唯一ゆめいのパラダイス  
 三五あなひ教けうの鬼おにが來きて      水みづも漏もらさぬ惡企わるたくみ  
 根本こんぽん的に看破かんぱした      ワツクスさまは偉えらいもの

テルモン館の救世主

宮町中の救け神

悪いお方と聞いてたに

古今無雙の神力を

現はしなさつた偉い人

讚めよ稱へよ崇めよ拜め

讚めよ稱へよ崇めよ拜め

ドンドコドンドコドコドコドコ

チャンチキチャンチキ

チャンチキチン

パインの森には何となく

怪しい人の影がある

これも矢張三五の

悪神共の襲來か

デビス、ケリナの姫さまの

吾々町人一同は

一度もお顔は拜まねど

御容色の勝れた人ぢやげな

皆さま確りなされませ

三五教を守護する

高倉、旭の明神が

女に化けてテルモンの

館へ侵入すると云ふ

大國彦の神様の

さしも厳しき御託宣

ワックスさまに降りしと

聞いて吾等はうかうかと

無事泰平の夢を見て

これが暮して居られうか

何程姫に見えたとして 決して信じちやなりません

ワツクスさまの云ふ通り 一旦女を見つけたら

とつ捉まへてワツクスの お目にかけて上でなくば

決して館に送るなよ ドンドコドンドコ ドコドコドン

チャンチキチャンチキ チャンチキチン

と、赤禪赤鉢巻に白い旗に文字をムシヤムシヤと書いたのを立て乍ら、黒い顔し

た老若男女が坂道を下つて来る。斯の如く町民一同が脱線の蠢動を初めたのは、

ワツクスがいつも使役して居る悪狐の所爲である。この悪狐は妖幻坊の部下であ

つて三九坊と稱ふる數千年の劫を経た古狐で、時々テルモン山に夜中數千の火を

點し、或は文字をもつて大の字を現はしなどして、町民を誤魔化して居たのであ

る。此三九坊はワツクスの體内に入出して何時も好からぬ事を計劃して居た。其

處へ三五教の三千彦が突然やつて来たので、自分の正體の現はれむ事を恐れ、三

千彦を排斥し、三五教の宣傳使を一人も窺はしめざるやう爲すは今此時と、有ら

む限りの力を盡し、先づ第一に町民の精心を攪亂すべく、ワツクスの口を藉つて辻演説を初めたものである。百戸許りの町民は、ワツクスの妖言を一も二もなく信じて仕舞ひ、家を空にして姫の搜索に出掛けたのである。どの家もどの家も家を空にして外に飛び出し、猫の子一匹留守をして居なかつた。其間にオークス、ビルマの兩人はワツクスの内命により、留守の家々を探つて目ぼしい物品を残らず盗み出し、テルモン山の或る岩窟へ運ばせて置いた。百戸が百戸とも最も大切なる物品を一つも盗まれない家は無かつた。ワツクスは數多の人々を引き連れ乍ら、四人の休息せるパインの森に押し寄せ來り大音聲、ワツクス「ヤアヤアそれなる、圓頂緋衣の比丘共、汝は三五教の魔法を使ひ、二人の姫様をいづくにか、奪い取り隠し置き、旭、高倉の白狐を使ひ、デビス姫、ケリナ姫に化けさせ、再び如意寶珠の寶を手に入れむとして進み來りし大惡人奴、又一人は一ヶ月以前三人拔刀をもつて宮町を荒した大泥坊の中の片割、隠しても隠されまい。サアどうぞや、尋常に縛につけ」

と唼鳴り立てた。求道居士は言葉柔しく、



「拙者は決して悪神ではゐらぬ、元はバラモン教のカーネル、エミシと申すもの、大黒主様の命を奉じ、鬼春別、久米彦兩將軍に従ひ、齋苑の館へ進軍の途中、三五教の宣傳使迦葉尊者、治國別に出遇ひ誠の道を説き示され、比丘となつたものでゐる。さうして此御兩人はテルモン館のデビス姫様、ケリナ姫様でゐるぞ。危急の場合をお助け申し、此處迄お送り申たものでゐる。サア疑を晴らして吾々一同を御案内召され」

ワツクス「アハハハハ、吐したりな糞坊主奴、怪辨をもつて神力無雙の某を誤魔化さむと致すとも、左様な事に誑らるる如き某ではゐらぬぞ。デビス姫様は決してそのやうなお耳はしてゐらぬ。全く高倉と申す悪狐でゐらう、化損ねて犬に耳を噛まれた證據にはまだ血が滴つて居るぢやないか。もう一人のケリナ姫に化けた奴狐も首筋に創を致して居るぢやないか、其方も亦耳の邊りに創の跡がある。きつと犬に噛まれて、化けて此處まで來よつたに違ひない。サア皆の者猶豫はいらぬ、ワツクスの命だ、縛りあげて姫の住所を白状させる爲め、テルモン山の岩窟に送つたがよからう」

デビス「これお前は家令の悴、野呂作のワックスぢやないか、何と云ふ失禮な事を云ふのだ。妾の命を助けて下さつた御恩人、無禮の事を致すと量見は致しませぬぞ」

ケリナ「ヤア珍しやワックス殿、其方は相變らず脱線を續ける男だな。吾等妹姉は小國別の娘に間違ひない程に、サア早く其處を退いてお呉れ、お父上の御身の上が氣にかかるから一時も早く歸らねばなりません」

ワックス「ツベコベと吾々を誤魔化さむと致しても其手に乗るものではない。サア皆さま、あの耳を噛まれて居るのが四足の證據だ。早く縛りなさい」

と下知すれば、數十人の荒男は有無を言はず四人を雁字搦に縛り上げた。求道居士初め其外三人は名もなき小童共にムザムザ縛られるやうな者ではなかつたが、一層の事縛られて館へ歸り、ワックス其外を驚かしてやらうと、態とに縛に就いたのである。然るにワックスは胸に一物ある事とて、三九坊の副守の命ずる儘に三千彦を放り込んだ向かひ側の谷間の岩窟に一人宛分けて、大勢と共に送り込み錠を固く鎖して仕舞つたのである。

町民は勝鬨をあげて各家路に歸り見れば、バラモン神を祭る最も必要な金銀製の香爐や水壺が、一個も残らず紛失して居た。何れも周章狼狽街路に出て、互に盗難の次第を物語つて居る。其處へ意氣揚々として驢馬に跨りやつて來たのは、ワックス、オークス、ビルマの三人であつた。一同は三人の周圍に群がり來り、盗難の次第を訴へた。オークスは馬上より大音聲を發して云ふ。

「三五教の惡宣傳使、テルモン山の館へ忍び込み、デビス姫をチヨロまかし、如意寶珠を隠し、小國別を呪咀して命を取り尚是にては飽き足らず、宮町の家々の重寶、バラモン神を祭る重要な器具を一つも残さず奪ひ取りしは、全く彼等の魔法の致す所、決して油斷をするな。グツグツして居ると大切な娘を取られ、財産を奪はれ、遂には皆さまの命迄取られますよ。最早テルモンの神館は小國別様は九死一生の場合、とてもお命は難しい。加ふるに二人のお娘子は魔法使の爲に行方は分らず、到底安心して暮す事は出來すまい。又肝腎要の如意寶珠を失うた上はハルナの都に坐ます大黒主様の怒に觸れ村中追放に遇ふか、或は塵殺に遇はねばならぬ所を此ワックス様が、御神力によつて如意寶珠を手に入れて下さつた

爲め、宮町百戸の罪は逃れたと申すもの、されば今後はワツクス様を館の主と崇め奉り、本當のデビス姫が見つかった上で御夫婦にお成り下さるやう、御兩人に村中がお勧め申し、そして祖先より傳はつた家を守らうでは無いませぬか。ワツクス様は今日迄は故意とに馬鹿になり、放蕩息子と見せかけて、此國難をお救ひ下さつた誠の救世主でムいますぞや」

と嘘を甘く竝べ立て、説きつけた。集まり來りし老若男女は、何れも三五教の悪神の魔法にかかつて苦しむ事を恨み、且つワツクスの神力を賞揚し、「ワツクス萬歳」を三唱し乍ら各家路に急ぎ歸る。歸つて見れば先祖代々から傳はつた財物の祭具が無いので又もや憂に沈み、益々三五教の宣傳使を憎み、その反對にワツクスを神の如くに尊敬するに至りぬ。

（大正一二・三・二四 舊二・八 於伯耆國皆生温泉濱屋 加藤明子録）

#### 第四章 妖子（一四五四）

館の家令オールスチンは、老齡衰弱の身を大勢の荒男に所構はず踏み倒され、ワックスの介抱に依りて再び息は吹き返したものの、苦しみに堪えず、吾館に昇つぎ込まれ、發熱甚だしく、日夜苦悶を續けて居た。

一方館に於ては小國別は假死状態に陥り、囁言計り云うて居る。さうしてデビス、ケリナの兩女は行衛は容易に分らず、又力と頼む三千彦の行衛も分らなくなり、小國姫は悲痛の淵に沈み、身をワナワナと慄はせ乍ら、世を果敢なみ、生たる心地はせなかつた。されど如何にもして一時なりとも夫の病を長引せ二人の娘に會はせたまきものと、夫のみ力に日を送つて居た。館の中はオークス、ビルマの兩人が萬事切り廻して居る。受付のエルは牛に犖丸を潰されたきり、綿屋の奥の間で高枕をして苦しんで居る。小國姫はオークス、ビルマを居間に招き、種々と相談をかけた。二人は時節到來、ワックスの思惑を成就させ、甘い汁を吸はむもの胸を躍らせながら、素知らぬ顔して心配氣に俯向いて居る。

小國姫「オークス、お前に折り入つて相談したい事がある。旦那様はあの通り何時お歸幽なさるか知れぬ御容態、又家令のオールスチンは重病で苦しんで居るな

り、ワックスは旦那様や、オールスチンの病氣平癒のために荒行に行くと言つて  
出たきり顔を見せないし、二人の娘は未だ歸つて來ず、若も事があつたら、如  
何したら好からうか、お前も一つ考へて貰ひ度いものだがなア」  
オークス「實にお氣の毒な事が出來したものでムいますワイ。お館計の難儀では  
なく宮町一統の難儀でムいます。貴女はバラモン教の館を守護する役であり乍ら、  
素性の分らぬ三五教の魔法使を町民に内證で引き入れなさつたものですから、此  
様な惨い目に會はされたのです。これからは些と吾々の云ふ事も聞いて貰はなく  
てはなりません。町中の噂によれば、あの三千彦と云ふ奴は、三五教きつての魔  
法使で、お館に最も大切な如意寶珠の玉を忍術をもつて奪ひ取り、お館に有るに  
あられぬ心配をかけて置き、進退維谷まる場合を考へ澄まし、バラモン教の宣傳  
使に化けて這入つて來よつたのでムいます。夫故今迄家にムつたデビス姫様迄お  
行方は分らぬ様になり、此町中は大切な御神具を殘らず盗まれ、大變な大騒動で  
ムいます。こんな事が町民に分らうものなら、夫こそ貴女の御身の大事、大きな  
顔して此お館には居られますまい。そつと早馬でハルナの都に報告でもしようも

のなら、旦那様は病氣で亡くなられたとした所で、お前さまは逆磔刑にあはされるでせう。大變な事をして下さつた。私は貴女の境遇に御同情をすると共に、貴女の御處置を恨んで居ます。もし斯んな事が大黒主様のお耳に入らうものなら、吾々もどんな刑罰に會はされるかも知れませぬ。今後はちつとオークス云ふ事も聞いて貰ひ度いものです」

小國姫「あの三千彦さまに限つてそんな惡黨な方では有りませぬぞや、夫は何かの間違ひでせう。金剛不壞の如意寶珠を隠したのは決して三千彦さまぢやない、家令の悴のワックスに間違ひないのだ。あれが吾娘デビス姫を無理往生に娶らむとして種々とエクス、ヘルマンなどを使ひ企んだと云ふ事は明瞭り分つて居るのだよ。勿體ない、誠の宣傳使にそんな罪を被せるものぢやありません」

オークス「奥様、夫が第一貴女のお考へ違ひです。ワックスさまは何を云うても家令の悴、このお館が立ち行かねば自分の家も立ち行かないのですから、よう考へて御覽なさい、そんな不利益の事をなさいますか。そこが三五教の魔法使の甘い所で……ワックスさまは人がよいから、塗りつけられたのですよ。奥の奥を考

へて貰はねば實にワックスさまに氣の毒でムいますワ。よく考へて御覽なさいませ。三千彦と云ふ魔法使は、町民の鬨の聲に驚かされて雲を霞と逃げ失せ、旦那様はどう鬮目に見ても御養生は叶ひますまい。そして家令のオールスチンさまも御本復は難いこの場合、此お館のお力になる者は誰だと思召す。ワックスさまより外無いぢやありませんか。貴女はワックスさまをお疑ひなされると、これ程人氣の有るワックスさまの爲に町民が承知致しませぬぞや。よく胸に手を當ててお考へにならないと、お館の一大事でムいます」

小國姫「ハテ合點のゆかぬ事だなア、ビルマ其方は何と思ふか」

ビルマ「ハイ私は町内の噂を調べて見ましたが、ワックスさまは本當に偉い人ですよ。三五教の魔法使が隠して置いた如意寶珠をも、甘く自分が罪を負ふと云うて吐き出させなされたのでムいます。眞實の忠臣義士と云ふのは、あのワックスさまでムいます。あの寶が無かつたらお館は勿論、宮町一同が大黒主様から所刑に遇はねばならぬ所を助けて下さったのだから、テルモン國の救世主だと云つて居ます。どうしてもデビス姫様の御養子になさつて此國を治めねば町民が承知し



ませぬ。私は別にワックスさまがお世繼にならうとなるまいと利害關係はないのですから、ワックスさまの爲に辨護は致しませぬ。中立地帯に身を置いて、自分の所信を包まず隠さず申上げます」

小國姫「町民迄がさう信じて居る以上は、どうも仕方がない。兔も角今日の場合、養子にするせぬは後の事として、一度ワックスさまに来て貰ひ度いものだなア」

オークス「それは結構でムいですが、ワックスさまは神様の爲め、お館の爲め、町民の爲め、命がけの業をすると云うて出かけられましたから、お行衛が分らず、何時歸らるるとも見當が付きませぬ。就ては家事萬端を處理する役員が無ければ不都合でムいませう。家令はあの通り胸板を踏まれ、恢復の見込みは立ちませぬ、二人の姫様は行方が分らず、旦那様は御重病、誰か家令を新にお命じなさらなくては、一日も館の事務が執れますまい。私も門番位勤めて居つては大奥の御用は出来ませぬしなア」

小國姫「アアそんなら、順々に拔擢してお世話にならう。受付のエルを臨時家令となし、お前は受付になつて貰はう、さうすれば萬事萬端都合よく運ぶであらう」

オークス「成程それは順當で至極結構でせう。併し乍ら、エルさまの慌者、旦那様が、まだ命のある中から御歸幽になつたと云うて町中を觸れ歩き、大勢を騒がし、お負に牛の尻に突き當り鞆丸を踏み潰され、綿屋の離室に有らむ限りの苦しみをして居ります。さうして道端に繋いであるあれ程大きな牛が目につかないやうな事では門番も出来ないと云うて、町中の笑はれ者になつて居りますよ。あんな慌者が家令にでもならうものなら、お館の威勢は申すに及ばず、神様の御威勢迄も落ちると云つて、町中の大反對でムいます。夫はおよしになつた方がお爲でムいませう」

小國姫「ハテ困つた事だなア。そんならワツクスが歸つて來たら、暫し親父の代理を勤めさす事に致しませう。夫迄お前は臨時家令の役をやつて貰ひ度い」

オークス「私のやうな不都合な者は、到底臨時家令のやうな事は出来ませぬ。平にお斷り申します、却てお館の不都合な事を仕出かすといけませぬから。總て臨時と云ふものは水臭い文字で、本氣にお館の爲に盡すと云ふ氣が出て來ませぬワ」  
ビルマ「一層の事、ドツと張り込んで、オークスさまを家令に任命なさつたらど

うでせう、屹度それ丈の腕前はムいますよ。貴女は奥にばかりムるから外の事情は分りますまいが、私が證明致します。町民一同の希望はワックス様を御養子となし、オークスさまを家令と遊ばし、さうしてを家扶にお命じになれば、お嬢様も歸られ、お妹御のケリナさまも無事歸られると云ふ噂でムいます。世間の噂と云ふものは餘り馬鹿にはならぬものでムいますよ。神様の爲め、お館の爲め、それが最善の方法と私は考へます」

小國姫「を家扶にせいとは誰の事だい、もつと明瞭りと云うて貰はなくては分らぬぢやないか」

ビルマ「へい、到底申し上げた所で門番位が家扶には成れますまい。云はぬが花でムいませう」

小國姫「ホホホホ、ビルマ、自分を推薦して居るのだらう。お前も拔目の無い男だなア」

ビルマ「此頃の世の中は盲人計りでムいますから、自分から自分の技能を發表しなくては、何時になつても金槌の川流れ、榮達の道はつきませぬ。正真正銘のネツ

トプライスの技量を放り出して、それをお認めになる御器量があればよし、無ければ時節到らぬと覺悟するより外はムいませぬ。私を御採用なければオークスだつて決して家令の職に置きませぬ。此男も今度の事件については、ちと弱點……いや弱點は無いのです。貴女がそつと魔法使を引き入れなされたのが弱點ですから、吾々二人が揉み消し運動をやつたので、町内の騒ぎがやつと治まつたのでムいますからなア」

小國姫 「そんなら仕方がありません。お前を臨時家扶に命じませう」

ビルマ 「モシ奥様、臨時家扶と云ふのは釜焚きとは違ひますよ。家令の次の職、重職でムいますよ。念の爲め一寸申上げて置きます」

小國姫 「門番が家扶に出世したら結構ぢやないか。此館は大黒主様の命令で家令一人と定つて居るが、家扶を置く事は出来ないのだから、氣の毒乍らお前は門番頭で辛抱して下さい」

かかる所へ一人の看護婦が慌しく入り來り、

「奥様早く來て下さいませ、旦那様は御臨終と見えまして、大變御様子が変わつて

参りました』

と心配さうに云ふ。小國姫は胸を撫でながら慌しく主人の病室に駆けり行く。オー

クスはビルマと共に小國姫の後に従ひ病室に入る。小國別は俄にムクムクと起き

上り、瘦こけた顔の窪んだ目を光らせ乍ら、

小國別『女房お前は何處に行つて居た。最前から大變待ち兼ねて居たぞよ、さう

して二人の娘はまだ歸つて來ぬかノウ』

小國姫『ハイもう臆て歸るでムいませう。まだ何とも便りがムいませぬ』

小國別『ハテ困つた事だなア、此世ではもう娘に遇ふ事が出來んのかなア。エエ

残念ぢや』

小國姫『旦那様、何卒氣を落さないやうにして下さい、屹度神様のお蔭で會はし

て下さるでせう』

小國別『三千彦の宣傳使様や家令は何處へ行つたかなア、早く會ひたいものだ』

小國姫『三千彦様は俄にお行衛が分らぬやうになりました。屹度娘二人を迎ひに

行つて下さつたのでせう』

小國別「ウン夫れは御苦勞だなア。屹度會はして下さるだらう。家令のオールスチンはまだ來ぬか、何をして居るのだらう」

小國姫「ハイ、一寸用がムいますので、つひ遅れて居ます、やがて參るでムいませう」

オークス「モシ旦那様、家令のオールスチンは町民に胸板を踏み折られ、九死一生の苦しみを受け自館に歸つて居られます。そして町中は三五教の魔法使をお館へお入れなさつたと云うて、鼎の沸くやうな騒ぎでムいます。そこを私等二人が鎮定致し、今奥様と御相談の上、私がたつた今家令となりましたから、何分宜敷くお願い申します。今後は粉骨碎身、十二分の成績を擧げてお目にかけますから御安心下さいませ」

小國別「お前は門番のオークスぢやないか。何程人望があると云つても、さう一足飛びに門番が家令になると云ふ譯にはゆくまい。奥、お前はそんな事を許したのか」

小國姫「ハイ、……イイエ」

とモジモジして居る。

小國別「家令を任命するには何うしてもオールスチンの承諾を得、彼が辭表を出した上でハルナの都に伺ひを立て、其上でなくてはならぬ。さう勝手に定める譯にはいけぬ。この館は特別だから何事も大黒主様に伺はねばならぬ。よもや眞實ではあるまい。奥、お前は當座の冗談を云ふたのであらう」

小國姫はモジモジしながら幽かな聲で「ハイ」と一言、俯向いて居る。

オークス「苟くも館の主人の奥様とも在らう方が、冗談を仰有らう筈はありますまい。奥様のお言葉は金鐵よりも重いものと信じて居ります。何と仰有つてもオークスは當家の家令でムいます。萬事萬端館の事務を取調べ、ハルナの都に報告を致さねばなりません。何處迄も此オークスを排斥なさるならば、三五教の魔法使をお館へお入れなされた事を大黒主様に注進致しませうか、それでも苦しいはムいませぬか」

と命旦夕に迫つて居るのにつけ込んで無理やりに頑張つて居る極惡無道の曲者である。

小國別「これ奥、私はお前の見る通り、今度はどうも本復せないやうだ。何うか一時も早く三千彦さまを尋ね出し、此館のお力となつて頂け。あの御神力をもつて守つて頂けば、如何に大黒主の神、數萬の軍勢をもつて攻め寄せ來るとも恐る事は要らぬ、かやうな悪人を決して吾死後用ひてはならぬ。今日から門番を免職して呉れ。エ工穢らはしい」

と衰弱の身心に怒氣を含み、唝鳴り立てた。それつきり又もやグタリと弱り、忽ち昏睡状態に陥つた。

小國姫は、身も世もあらぬ悲しみに浸されながら、故意とに涙を隠し容を改め、兩人に向ひ、

「オークス、ビルマの兩人、其方は御主人様の命令だから、氣の毒乍ら只今限り此館を歸つて下さい。假令どうならうとも其方のやうな傲慢無禮な僕に厄介にならうとは思はないから、……モシ旦那様何卒御安心下さいませ」

と耳に口を寄せて聲を限りに涙交りに述べ立てた。小國別は幽かにこの聲が耳に入つたと見え、力無げにニタリと笑ふ。オークスは横柄面を曝し乍ら威猛高にな



り、

「モシ奥様、旦那様は大病に悩み耄けて居らつしやいます。決して仰有る事は眞ぢやありません。熱に浮されたお言葉、左様な事を本當になさるやうでは此お館は大騒動が起りますよ。今日此お館を雙肩に擔うて立つものは、ワックスや吾々二人の外に誰がありませんか。克くお考へなされませ。門番は家令になれないと仰有いましたが、何と云ふ階級的の考へに捉はれて居らつしやるのですか。昔常世城の門番は、直に拔擢されて右守の司になつたぢやありませんか。それも失敗の結果でせう。吾々はお館の危急を救つた殊勳者です。若しお氣に入らねば仕方ありません。吾々は吾々としての一つの考へがムいませ、後で後悔なさいませよ。町民一般が大切な寶を盗まれたのも、みんな三千彦の魔法使によつて大勢の者が難儀をして居るのでムいませ。云はば三千彦は町民の敵でムいませ。其敵を何時迄もお構ひなさるのならば、矢張貴方方御夫婦は國敵と認めませ。大黒主のお開きなされた此靈場を、みすみす三五教の奴に蹂躪せられるとは、町民一般の忍び難い所でせう。私を家令にお使ひなさらぬなら、たつては頼みませぬ。此

始末を町民に報告致します。さうすれば町民は、貴方方をバラモン教の仇、神様の敵として押し寄せて参ります。お覺悟なさいませ」  
と云ひ放ち、勢鋭く表へ駆け出す。鞆丸を牛に踏み潰され、綿屋の離室に養生して居たエルは漸う二三人の子供に送られて玄關に歸つて來た。オークス、ビルマの二人は玄關にてふと出會うた。エルは二人の相好の唯事ならぬに不審を起し、エル「オイ、兩人、血相變へて何處へ行くのだ。是には何か様子があるであらう、まづ俺に聞かして呉れ。何とか仲裁してやるから」  
オークス、ビルマの兩人は脅迫的に此處迄來たのだが、うつかり町民に妙な事を喋つて、後の取纏めに困つてはならぬと思つて居た矢先、エルに止められたので、これ幸と二人は受付にドツカと坐し、密々話に耽つて居る。

(大正一二・三・二四 舊二・八 於皆生温泉濱屋 加藤明子録)

館やかたの受付うけつけの溜たまりにはエル、オークス、ビルマの三人さんにん、机つくえを眞中まんなかに置いてお胡床あぐらをかき蟲むしのよい夢ゆめを見て、互たがひに泡沫ほうまつの如ごとき出世しゅつせ譚わなしを争あらしうて居ゐる。

エル「おい、オークス、貴様きさまは門番もんばんの癖くせにドカドカと受付うけつけの關所せきしよを突破とつぱして奥おくの閒まへ進入しんにふして行いつたと見みえるが、餘程よほど奥様おくさまからお目玉めだまを喰くつたと見みえ、隨分ずいぶん面つらを膨ふくらしてゐるぢやないか。俺おれは梟ふくろふの化物ばけものと思おもつたよ」

オークス「ヘン、門番もんばん門番もんばんて、偉相えらさうに云いふない。鞆丸きんたまつぶ潰つぶしの大將たいしやう奴め、俺おれは今迄いままでの門番もんばんオークスとはチト違ちがふのだ。これから此館ここの家令かれい職しよくとなり、奥住おくすまひとなつて

「オークス」勤づとめをするのだから、何事なにごとも此方このほうの吩咐いひつけに服従ふくじゆうするのだぞ。なあビルマ、お前まへがよく知しつてるだらう」

ビルマ「さうだな。ママア夢ゆめの中なかの家令かれい位くらゐなものだらうかい。こんな處ところで、「かれい」、これ云いうて居ゐると人に聞きかれて、サア今いまと云いふ時ときに總すべての計劃けいかくが畫ぐわ餅へいに歸きするかも知しれないぞ。成功せいこうする人は黙だまつて居ゐるよ。黙だまつてる人ひとが夜光やくわうの玉たまをとると云いつてな、何なんでもガラガラ云いふものぢやない。沈黙ちんもくが一いつ等とうだ」

オークス「馬鹿ばか云いふな。已すでに已すでに奥様おくさまから證言しやうげんを得えて居ゐるのだ。誰たれが何なんと云いつて

もワックスさまを此館の主人となし、デビス姫様と芽出たく合衾の式を擧げさせ、此オークスが家令職となり、妹のケリナ姫が臆て歸らると云ふ事だから、ケリナ姫の夫となり、教務、政務を刷新し、綱紀を振肅し堯舜の世を來たすのだ。今迄のやうな老耄や、狼狽者の鞆丸潰しの受付では駄目だからな。エツへへへへへエル「イツヒヒヒヒアイタタタタ餘りしようもない事を吐すので、可笑しうて鞆丸に響いて鞆丸が痛くて碌に笑ふことも出來やせないわ。貴様日が永いので、そんな夢でも見たのだらう。それよりも早く門番を神妙に勤めぬかい。旦那様が何時知れぬ様な御病氣が起つてるのに、ウカウカして居る時ぢやないぞ」

オークス「おい、エル、旦那様は已に御歸幽になつたと云つて觸れて歩いたぢやないか。随分いい狼狽者だな」

エル「定つた事だ。何でも手廻しよくして置かねば間尺に合ぬぢやないか。病人ぢやなくても年寄が先に死ぬのは當然だ。何時迄も旦那様が生きて居ると思へば何時アフォンとせなくぢやならぬか分らぬから、一寸町民の目を覺ますために布令を出し、豫行演習をやつたのだ。英雄の心事が門番に分つて堪るか。エヘン、

イヒン、アイタタタどうも鞆丸の奴、【もの】云ひやがつて仕方がないわ」  
オークス「おい、エル、ここは一つ眞面目になつて聞いて呉れ。本當に俺は今日  
から家令職だぞ。そしてワツクス様が當館の御世繼だ。それから此のビルマが受  
付に坐り、お前は暫く鞆丸が癒る迄お暇を賜つて休養するのだな。俺が家令にな  
つた上は、滅多に受付より下の役はささぬから、柔順しく控へたが宜からう」  
エル「俺は死んでも受付は止めぬのだ。何程貴様が家令になつた處で、俺の受付  
はハルナの都の大黒主様から、命令を受けてゐるのだから、俺の地位を到底動か  
すことは出来まい。そんな事云はずに門番でも神妙に勤めたが宜からうぞ」  
オークス「よし、そんなら俺が受付を免職させて見せよう。貴様は受付であり乍  
ら門外へ飛び出し、死んでもムらぬ旦那様をお逝れになつたと觸れ歩き、町内を  
騒がした大罪人だ。これを大黒主様に上申しようものなら、それこそ免職は宵の  
口、貴様の笠の臺が飛んで了ふのだ。どうだ、それでも苦しくないのか」  
エル「ママママ待つて呉れ。それやさうぢやけれど、實の所は夢を見て居つた  
のだ。夢でした事は仕方がないぢやないか」

オークス「何、夢を見たとき、貴様はさうすると怠慢の罪を免る事は出来ない。朝から晩まで平家蟹のやうに目の玉をツン出して、お役目大切に受付を守つて居ねばならぬ役目でありながら、晝の中からサボタージュをやつて晝寝をやつて居つたのだな。益々怪しからぬ。おいビルマ、貴様が證據人だ。ここで一つ上申書を書くから、お前證據人になつて呉れ」

ビルマ「そら、俺も證據人にならぬ事はないが、町に事勿れと云つてエルの事を上申すると、それが一つの引かかりとなり、終には貴様と俺との……それ……竊盗事件が發覺するぢやないか。ここはお互に辛抱したが宜からうぞ」

オークス「何、何時俺が竊盗した。馬鹿な事を云ふな」

ビルマ「セツトウと云ふのは盗人の事ぢやない。去年の冬、テルモン山の谷間で雪を固めて洞を穿ち、そこで遊んだ事があるだらう。それを『雪洞』と云ふのだ。それでも矢張サボになるからかう」

オークス「何、俺等は門番だから、立派な門を造らうと思つて、雪で雛型を作つて其下を通つたのだから、云はば職務に忠實になるのだ。そんな事が何、罪にな

らう」

と巧く二人寄つて竊盗事件を誤魔化して了つた。

エル「ヒヒヒヒ、アイタタタ何だか知らぬが、二人とも云ひ滑つた事を巧く塗りつけたやうな気分がしてならぬわ。此奴ア探つて見れば何かあるに相違ない。香爐や金銀の水壺を、あの騒ぎに皆盗んで了つたと云うてるからにやお前等が、

よもや……ではあるまいかの」

オークス「馬鹿云ふな。俺は旦那様の御病氣について、門番を休んで今の今まで奥で御用をして居つたのだから、そんな事は些とも知らないわ。大方三五教の魔法使が持つて去んだのだらう」

ビルマ「オイ兩人、こんな話は止めにして、兔も角旦那様が何時お國替へになるやら分らぬなり、家令も亦何時死ぬか知れぬ場合だ。ここで俺等三人同盟して一つ出世の門を開かうぢやないか。何時迄も門番や受付では面白くないからう。

幸ひ年も若し獨身者だから、家令の息子のワックスの馬鹿を此館の養子にするのは勿體ない。一層の事、俺等三人で、此館のお世繼と、家令と、受付兼内事頭の

三つの役を占領する事にしようぢやないか」

エル「ウン、そりや面白からう。然し乍ら奥さまが諾と云つて呉れるだらうかな」  
オックス「そこはそれ、弱味につけ込む風の神さまだ。此尊い靈地に三五教の魔法使をソツと引張り込んだと云ふ、奥さまに弱點があるのだから、屹度俺等の意見を採用するにきまつてる。若し採用せなけりや身の破滅だからな」

エル「成程、そりや妙案だ。そんなら俺が此館の養子になるから、貴様等兩人は家令並びに内事係兼受付としてやらう。門番の分際として異數の拔擢だらう」

オックス「馬鹿云ふな。俺はデビス姫さまの夫となり當家のお世繼だ。お前等二人は籤でもして家令と受付とをやつたが宜からう。家令職と受付とは大變な段階がある。若受付となつたものは、妹さまが歸られたら受付の女房にする。お世繼はどうしても姉さまの婿に限つてる。家令は役柄が上だから姫様を貰はずに辛抱するのだ。さうすりや不公平が無いだらう」

エル「時に綿屋の老爺の話に聞けば、高倉とか、旭とか云ふ三五教の化狐が、二人の姫様に化けて狸坊主と一緒にパインの森で捉まへられたと云ふ事だが、實際



そんな事があるだらうか。俺や不思議で堪らぬのだ。中にはコソコソ話をしてる奴があつて、あれは狐ぢやない本眞物の姫様と云つてるものもあるが、あれが本眞物ならばワツクスが匿しよつた岩窟に助けに行つて、姫さまの戀を獨占するの  
も一興だがな

オークス「馬鹿云ふな。彼奴は狐にきまつてる。犬に噛まれよつて首筋や耳を噛まれたり、狸坊主迄が首筋を噛まれたと云つて、紫になつてはれ上つて居つた、何ほ本眞物でも、あの御面相では御免だ

ビルマ「おい、エル、貴様は鞆丸を潰されて綿屋の離室にスツ込んで居り乍ら、どうしてそんな事が目に着いたのだ。チツト可笑しいぢやないか

エル「何、俺だつて女と聞いちやジツとして聞いて居れないので、「ワツシヨワツシヨ」と門前を擔いで行くのを、門口に飛び出し、トツクリ見た所が姫様に似て居るが、何となしに險相な顔して居るので、狐のお化けかと思つて居たのだ。どうも人間の目で眞偽は分らぬが、マア百人の者が七十人迄がお化けと云ふのだから、大勢の目の方が本當だらうかい

オークス「サア、無駄話はどうでも宜いが、手つ取り早く約束を定めて置かうぢやないか。俺は此館の御養子にきめて置いて、家令職と受付との、これから約束だ。どうぞや家令職になれば姫様はもらへぬなり、低い役の受付になればケリナ姫を女房に貰へるのだ。位をとるか、色をとるか、と云ふ處だ」

ビルマ「そんなら俺は受付になるわ」

エル「馬鹿云ふな。受付は俺の持前だ。天下御免の受付だ。受付は俺にきまつてる。ヘン濟みませぬな」

オークス「オイ、兩人、姫様は實際生きてゐるかムらぬか分らぬのだ。萬一此世に生きてゐらぬとすれば矢張家令になつた方が得だぞ」

エル「そんなら、思ひきつて俺は家令になるわ。ビルマ、お前、受付になつて呉れ」

ビルマ「馬鹿云ふな、誰が受付なんかするものかい。適材適所と云つて、此館の家令は貴様のやうな狼狽者では到底勤まりつこはない。ビルマに限つてるワイ」  
エル「然し、さうするとワツクスさまのやり場が無いぢやないか」

オークス「何、ワックスなんか、彼奴の悪事を素破抜いてやれば、文句なしに命を惜しさに逃ぐるにきまつてる。三人でさへも配置に困つてるのに、彼奴が出て来て堪らうかい。彼奴は勘定外だ。彼奴の老爺も近々に死んで了ふから、さうすりや門番の端にでも使つてやるのだな。エツへへへへへ」

斯く何時の間にか話に身が入つて大聲で囀つて居る。最前からワックスは壁に耳をあてて體を隠し、三人の話を聞いて居たが業が湧いて堪らぬので、ソツと大便所に入り長柄杓に汚いものを持つて来て、自分の顔を隠し乍ら三人の前に現はれ、バツと顔にふりかけ、逃げ出す途端に疊の破れに足を引っかけ、スツテンドウと倒れて了つた。倒れた拍子に間と間を隔てた鬮に高い鼻を打ち、ウンと息をつめ、ビクともせず苦しんで居る。

三人は不意に臭い物を顔一面にかけられ、顔をハンカチーフにて抑へ乍ら、炊事場の方へ洗ひに行かうと走つた途端に、ワックスの體に躓きバタリと倒れた。次から次から四人が糞まぶれになつて引つくり覆り、ウンウン唸いて居る。此物音に小國姫は此場に走り來り見れば、何とも云へぬ臭い香がプンプンと鼻をつく。

姫は鼻を掴み乍ら近寄り見れば、糞まぶれの長柄杓が一本と、四人の男が糞まぶれになつて、其處へ倒れ居たり。

小國姫をくにひめ「糞度胸据ゑた男が糞まぶれ

足躓あしつまずいて苦楚くそを嘗なめけり。

婆ばばの身みも糞くそにまぶれた糞奴くそやつこ

臭くさい奴やつには呆あきれ果はてたり。

物臭ものくさい企たくみ致いたした天罰てんばつで

男をとこが癩しかで倒たふれしならむ。

オークスの心こころ汚きたき門番もんばんが

今日けふは「大糞おほくそ」被かぶりけるかな。

鞆丸きんたまを牛うしに踏ふまれて又またここで

糞被くそかぶせられ吠ほ「エル」馬鹿ばか者もの。

ワックスか又は糞くそかは知らねども

どちらにしても臭い奴かな」

ワックス「糞奴三人揃ふ其中へ  
糞まぶしたり糞婆の家で」

小國姫「ワックスよ、吾に向つて糞婆と  
云つた言葉を忘れずに居よ。  
いろいろと臭い思案を廻らして  
糞を嘗めたる今の天罰」

オークス「テルモンの館の家令となる身には

糞くその苦勞くらうも何なんのものかは』

小國をくにひめ姫ひめ 『いろいろと臭くさい奴やつめが寄より合あうて

これの館やかたに糞くそまき散ちらす。

これよりはハルナの都みやこの神柱かむばしら

大黒おほくろぬし主に申まをしあ上げなむ。

何事なにことも皆みな三千彦みちひこの神司かむづかさ

諭さとし玉たまひぬ汝等なれらが企たくみを。

人ひとの家の惱なやみにつけ込み糞思案くそじあん

廻めぐらし吾身わがみを捨すつる馬鹿ばかも者もの』

オークス 『三千彦みちひこは三五教あななひけうの魔法使まはふつかひ

詳つぶさに告つげむ大黒主おほくろぬしへ。

大黒主おほくろぬし此この有あり様さまを聞ききまさは

小國姫をくにのひめの身みの終をはりぞや

かかるところへエクス、ヘルマンの兩人りやうにんは慌あわたしく走はり來きたり、プンプン嗅にほふ臭しう氣きに鼻はなを抓つまみ乍ながら、

エクス、モシ奥様おくさま、ワツクス其他そのたの連中れんぢうぢやムいませぬか。貴女あなたは四人よにんの者ものに陰謀いんぼう露ろ顯けんを恐おそれて糞くそを浴あびせ打うち倒たふし、命いのちをとらうとなさつたのですか、こりや怪けしからぬ。モウ斯かうなつては御主人様ごしゆじんさまだとて容赦ようしやは致いたしませぬぞ。さあワツクスさま確しかりなさいませ。之これからハルナの都みやこへ早馬使はやうまつかひを立て貴方等あなたがたの敵かたきを討うつて上げませう

と云いひ乍ながら尻しりひつからげ、エクス、ヘルマン兩人りやうにんは表門おもてもんさして雲くもを霞かすみと驅かけ出だしたり。四人よにんはヤツと起おき上あり、互たがひに體からだの洗濯せんたくを終をはり、一ひと間まに入いつて今迄いままでの喧嘩けんくわは暫しばく横よこに置おき、再ふたび野やしん心しんを充みすべく秘密相談會ひみつさうだんくわいを開ひらく事こととなつた。小國姫をくにのひめは夫をととの

病氣を氣遣ひ匆匆に此場を立つて奥の間に身を隠しけり。

(大正一二・三・二四 舊二・八 於皆生温泉濱屋 北村隆光録)

## 第六章 強印(一四五六)

テルモン山の館より十七八丁奥の谷間に大蛇の岩窟と云ふ深い穴がある。そこには三千彦を無理無體に押し込め、二人の門番が嚴重にワツクスの命令によつて守つて居た。

甲「オイ、何でも此中に突込んである魔法使は大それた事をしやがつたさうだな。如意寶珠の玉を盗み出し、そしてワツクス様が匿して居つた等と讒言をし、デビス姫様の夫となり、此館を占領しようとしたドテライ悪人だと云ふ事だが魔法使だから何時此鐵の門を破つて出るか分らぬ。出たが最後、どんな目に會はすか知れないぞ。何程日當を澤山貰つても斯んな劍呑な商賣は御免被りたいものだな」



乙「何、心配するな。魔法使と云ふものは或程度迄は法が利くだらうが、もう種が無くなつて皆に捉まへられ、斯んな處へ突込まれよつたのだから、もう大丈夫だ。滅多に出る氣遣ひはないわ。斯うして十日も二十日も番して居れば饑ゑて死んで了ふ、さうすりや大丈夫だよ。俺等は日給さへ貰へば宜いのだからな」

甲「然し、此奴が死んで化けて出やがったら、それこそ大變だぞ。何とかして斷り云ふ譯には行くまいかな」

乙「そんな事、いくものかい。何時もワツクスのだんなに難儀な時に無心を云つて助けて貰つてるのだから、斯んな時に御恩報じをするのだ。宮町中の難儀になる處を、ワツクスさまのお蔭で此奴の盗んで居つた如意寶珠の玉も分り、俺等の生命まで助けて貰つたのだから、此奴が斃る所迄俺等は根比べをやらねばならぬのだ。餘り心配するな。心配すると頭の毛が白うなるぞ」

斯く話して居る處へ遙か上の方の森林から頭の割れるやうな宣傳歌が聞えて來た。

三千彦みちひこ 神かみが表おもてに現あらはれて 善ぜんと悪あくとを立たて別わける

三五教あななひけうの宣傳使せんでんし 三千彦みちひこ司つかさが現あらはれて

三九坊さんきうぼうに魅みせられし 家令かれいの悴せがれワツクスが

神かみの館やかたの重寶ぢゆうほうを 密ひそかに匿かくし置おき乍なら

三千彦みちひこ司つかさに看破かんぱされ 吾身わがみ危あやふくなりしより

正反對せいはんたいに如意寶珠にょいほうしゆ 匿かくせしものは三千彦みちひこと

宮町みやまち一般觸いっばんふれ歩あるき 何なんにも知しらぬ人々ひとびとを

誑たばかりおほせし憎にくらしさ 如何いかにワツクス奸智かんちをば

振ふるひて一時いちじは世よの中なかを 欺あざむき渡わたる事ことあるも

天地てんちを造つくり玉たまひたる 此世このよの主あるじと現あれませる

誠まことの神かみは何時迄いつまでも 曲まがの猛たけびを許ゆるさむや

吾われは三千彦みちひこ神司かむつかさ 岩窟いはやの中なかに押おし込まれ

暫しばし思案しあんに暮くる折をり 月照彦つきてるひこの大神おほかみの

遣つかはし玉たまふエンゼルが 現あらはれ玉たまひ忽たちまちに

眞鋼の鎚を打揮ひ

容易く救ひ玉ひけり

神の變化のスマートが

守らせ給ふ上からは

軍を率ゐ攻め來とも

神の息吹の言靈に

愛と善との聖徳を

信と眞との光明を

これの館の禍を

アア面白や面白や

現はれ來る神館

悔い改めて吾前に

根底の國の苦みを

永遠無窮の樂みを

此岩窟に穴穿ち

初稚姫の遣はせし

今や吾身に附添ひて

假令ワツクス幾萬の

如何でか恐れむ惟神

一人残さず吹き散らし

此土の上に輝かし

天地の間に照らしつつ

拂はにやおかぬ神の道

神の力は目のあたり

汝等二人の番卒よ

來りて罪を謝すならば

神に祈りて救ひやり

味はひ暮す天國へ

導みちびきやらむ惟かむながら神

神かみに誓ちかひて宣のり傳つたふ

と歌うたひ乍ながら猛まうけん犬いぬを引ひきつ連れ悠いうい々と岩いはや窟くの上面じやうめんを下くだり來きたる。二人ふたりの番ばん卒そつは此この姿すがたを見みるより大地だいちに頭かしらをすりつけ、尻しりをつつ立てて一言いちごんも發はつし得えず、謝しやざい罪いの意いを表へうし乍ながら慄ふるうてゐる。太陽たいやうは漸やうやく西山せいざんに没ぼつし、四邊あたりはおひおひと暗くらくなつて來きた。三千彦みちひこは二人ふたりに案内あんないさせ密ひそかに拔ぬけ道みちより館やかたを指さして歸かへり行ゆく。

ワックス、オークス、ビルマ、エルの四人よにんは體からだを水みづにて洗あらひ、會くわい議ぎ室しつに入はいつてコソコソと、晝ひるの間うちから日ひの暮くれるのも知しらず野心やしんくわい會うちあの打うち合あせをやつて居ゐた。スマートは室内しつないの怪あやしき臭におひに鼻はなをびこつかせ、小聲ここゑで「ウーウー」と唸うなり乍ながら、三千彦みちひこに四人よにんの惡わる者ものが密談みつだんに耽ふけつてゐる事ことを知らした。小國姫こくにひめは悲痛ひつうの涙なみだにくれ、したまま裏口うらぐちよりソツと小國姫こくにひめの居間ゐまに進すすみ入いつた。小國姫こくにひめは悲痛ひつうの涙なみだにくれ、今後こんご如何いかになり行ゆくならむと青息吐息あをいきといきをつきゐたり。

小國姫こくにひめ「如何いかにせむ今日けふの惱なやみを切きり拔ぬけむ

三千彦司の俣しのばるるかな。

三千彦の道みちの司つかさは三五あななひの

誠まことの神かみの使つかひなるらむ。

下男しもをとこ僕しもべは數多あまたあり乍ながら

心こころ汚きたきものばかりなり。

吾身わがみのみ愛あいする輩やからあつ集まりて

主人あるじを思おもふ人ひとぞなきかな。

泣なき干ほして涙なみだの種たねもつきにけり

救すくはせ玉たまへ三五あななひの神かみ。

如何いかならむ惱なやみに會あふも神館かむやかた

守まもらむ爲ためには吾身わがみを惜をしまじ。

如意にょい寶珠ほつしゆ貴うづの寶たからは歸かへりぬれど

吾子わがこ寶たからは如何いかになりしぞ。

背せの君きみの病やま益ます々ます重かさなりて

早<sup>はや</sup>綻<sup>こといと</sup>絲<sup>いと</sup>の斷<sup>き</sup>れむとぞする。

世<sup>よ</sup>の中<sup>なか</sup>に憂<sup>うき</sup>に惱<sup>なや</sup>める人々<sup>ひとびと</sup>は

ありとし聞<sup>き</sup>けど吾<sup>われ</sup>に如<sup>し</sup>かめや。

如何<sup>いか</sup>ならむ昔<sup>むかし</sup>の罪<sup>つみ</sup>の廻<sup>めぐ</sup>り來<sup>き</sup>て

かか<sup>くる</sup>る苦<sup>くる</sup>しき日<sup>ひ</sup>を送<sup>おく</sup>るらむ。

待<sup>ま</sup>て暫<sup>しば</sup>し神<sup>かみ</sup>の惠<sup>めぐ</sup>みの深<sup>ふか</sup>ければ

やが<sup>みちひこ</sup>て三<sup>み</sup>千<sup>ち</sup>彦<sup>ひこ</sup>歸<sup>かへ</sup>り玉<sup>たま</sup>はむ。

三<sup>あななひ</sup>五<sup>を</sup>の教<sup>をしへ</sup>司<sup>つかさ</sup>と仕<sup>つか</sup>へます

誠<sup>まこと</sup>一<sup>ひと</sup>つ<sup>と</sup>の君<sup>きみ</sup>は益<sup>ます</sup>良<sup>す</sup>夫<sup>を</sup>」

と悲<sup>かな</sup>しげに述<sup>じゆつ</sup>懐<sup>くわい</sup>を宣<sup>の</sup>べて居<sup>ゐ</sup>る。そこへ三<sup>みちひこ</sup>千<sup>ち</sup>彦<sup>こ</sup>は忍<sup>しの</sup>び足<sup>あし</sup>にて歸<sup>かへ</sup>り來<sup>き</sup>たり。

「奥<sup>おく</sup>様<sup>さま</sup>奥<sup>おく</sup>様<sup>さま</sup>」

と小<sup>こ</sup>聲<sup>こゑ</sup>に呼<sup>よ</sup>ぶ。小<sup>を</sup>國<sup>くに</sup>姫<sup>ひめ</sup>は此<sup>この</sup>聲<sup>こゑ</sup>を微<sup>かすか</sup>に聞<sup>き</sup>いて夢<sup>ゆめ</sup>かと許<sup>ばか</sup>り打<sup>うち</sup>驚<sup>おどろ</sup>き乍<sup>なが</sup>ら、微<sup>ほの</sup>暗<sup>ぐら</sup>き行<sup>あん</sup>燈<sup>どん</sup>の光<sup>ひかり</sup>に透<sup>す</sup>かして見<sup>み</sup>れば擬<sup>まが</sup>ふ方<sup>かた</sup>なき三<sup>みちひこ</sup>千<sup>ち</sup>彦<sup>こ</sup>司<sup>つかさ</sup>であつた。

小國姫「ア、貴方は三千彦様、よう、マア歸つて来て下さいました。何處へお出でになつて居りましたか」

三千彦「ハイ、これには長いお話がムいます。然しこれ等兩人が聞いて居りますれば、暫く靈縛を加へて置きます」

と云ひ乍ら耳と口とに靈縛を加へ、次の間に忍ばせ置きスマートをして警護せしめた。スマートは二人の番卒の一擧一動にも眼を配り、二人が一寸でも動かうとすれば目を怒らし、噛みつかむとする勢に恐れをなして、慄ひ慄ひ次の間に控へて居た。

三千彦「サアもう、これで大丈夫、然し乍ら旦那様は如何でムいますか」

小國姫「ハイ、お蔭様で、まだ續いて居ります。一時も早く娘に會うて死にたいと申して居りますが、まだ娘の行衛は分りませぬので、今も今とて貴方の事を思ひ出し、泣いて居つた處でムいます」

三千彦「どうしてもお嬢さま二人とも、修驗者に送られ、已に此館へお歸りになつて居らねばならぬ筈でムいます。之には何か悪人輩の企みがあるのでムいませ

う。今あの會議室でワックス以下四人の連中が密々と相談を致して居りますれば、私が此館へ歸つた事を覺れば彼等は如何なる事を致すか分りませぬ。何卒誰も來る事の出來ない居間へ案内して頂き度いものでムいます。そこでトツクリとお話を申し上げませう」

小國姫「チツト窮屈でムいますが吾夫の病室の上に暗い居間がムいます。そこは誰も上る事は出來ませぬから、そこへお越しを願うて、何かの事を承はり度うムいます」

三千彦「それは好都合です。サア早く参りませう。何時悪者がやつて來るか知れませぬから」

と云ひ乍ら小國姫に導かれて二階の暗き一間に微な火を點じ、身を隠し密々話に耽つた。

三千彦「實の所は二人のお嬢様は私の察する所、テルモン山の岩窟に隠して居るやうに考へます。ワックスと云ふ奴、デビス姫様に戀着し、肱鐵砲を喰はされたのを、性懲りもなく、飽迄戀の欲望を遂げむとし、如意寶珠を隠してお館を困ら



せた上、往生づくめで押掛け婿にならうと企んで居た所へ、拙者が参つたもので  
すから陰謀露顯を恐れ、反對に拙者を魔法使と觸れ廻り、如意寶珠を隠したのも  
拙者だと主張致し何も知らぬ町民は彼が言葉を眞に受け、又修驗者が送つて來た  
御兩人様を化物だと吹聴し、岩窟に匿しおき、往生づくめに姫様に得心させた上、  
御主人の御死去後正々堂々と乗り込まうと云ふ悪い企みでムいませう。併し乍ら  
お嬢様は確りした女丈夫ですから、決して彼が毒手におかかり遊ばす案じは要り  
ませぬ。又決して彼等に身を任せ、操を破らるる事はありませんから御安心下さ  
いませ。併し乍ら今直に如何すると云ふ事も出来ませぬ。町内の人の心が鎮まつ  
た上、徐にワックスの陰謀が現はれた處へ拙者が首を出し、姫様をお助けする事  
に致しませう。ここ二三日は落着いて居らねばなりません。又御主人の御病氣に、  
さしひきがあつても此四五日は何ともありませんから御安心下さいませ」  
小國姫「それを承はりました。一寸安心致しました。娘は無事で居りませうかな。  
主人が聞きましたら何程喜ぶ事でせう。これを冥土の土産として潔く歸幽する事  
でムいませう。アア惟神靈幸倍坐世。然しワックスと云ふ奴は親にも似ぬ惡黨で

ムいますな。さうしてマンの悪い時には悪い事が重なるもので、家令のオールスチンは大怪我を致し吾主人よりも先に死ぬかも知れぬ様な重態でムいます。あれを助けてやる譯には行きませうまいかな」

三千彦「とても助かりますまい。肋骨を二本迄折つて居ますから」

小國姫「さても困つた事でムいます。これも何かの因縁でムいませう。あまり悴が悪黨を致しますので子の罪が親に酬うたのではムいますまいか」

三千彦「決して決して、子の罪が親に酬ふ等といふ道理がムいませぬ。神様は公平無私にゐらつしやいますから決して人を罰め、苦める様な事をなさる筈がムいませぬ。況して罪なき本人に子の罪迄おきせ遊ばす不合理な事がありませうか。

只此上はオールスチン様の冥福を祈つてやるより外に道はありません。そして一時も早く國替をなさつて病氣のお苦みをお助かり遊ばす様、祈るより外に道はムいませぬ」

斯く密々話をして居る處へ、ワックス、オークス、ビルマ、エルの四人は酒を矢鱈にあふり乍ら、ドヤドヤと病室に入り來り、

ワックス「これはこれは、小國別の御主人様、御病氣は如何でムいます。お訪ね  
致さねば濟まないのですが、何分私の父が大怪我を致しましたので、一人よりな  
い親、見逃す譯にもゆかず、夜の目も寝ず、孝行第一に看病致して居りました。  
だと申して大切な御主人様お訪ね致さぬも不忠の至りと、氣が氣でならず、宅に  
居つても心は御主人様の身の上に通つて居ります。アア忠ならむと欲すれば孝な  
らず、孝ならむと欲すれば忠ならず、どうも世の中は思ふやうには行きませぬ。  
どつちや……いえ、どつち道、私の爺は肋骨を折られて居ますから、死なねばな  
らぬ運命でムいます。それで早く死んで呉れますれば、御主人様のお世話が出來  
ます事と、心は焦りますれど、病氣計りは人間がどうする事も出來ませぬので、  
ツヒ失禮を致して居りました。何卒御無禮の罪お赦し下さいませ。モシ御主人様、  
家令の父が亡くなりましても此ワックスがビチビチして後に控へて居りますれば、  
決して御心配下さいませ。そしてデビス姫様とケリナ姫様とは間近い内にお歸  
りになりませうから、及ばず乍ら私がお世話をさして頂きます。これも御安心下  
さいませ。豫めワックスに娘二人を宜しく頼むと只一言仰有つて下さいませれば、

獅子奮迅の活動を致し、姫様を御目にかけるでムいませう。ここに貴方の遺言状を代書して來ましたから、一寸拇印を捺して下さいませう。何もワックス一人の爲ではムいませぬ。お館、町内一同の爲は申す迄もなく、テルモン國一國の爲でムいますから』

小國別はソファアの上にヤツと起き上り凹んだ目をクワツと瞠き、力なき聲にて、

「お前はワックスだつたか、何とか云つてる様だが病氣のせいか、耳がワンワンして何も聞えない。女房が其處邊に居るだらうから話があるならトツクリと女房として呉れ。私はもう體が弱つて耳さえ聞えなくなつたから」と故意と小國別は煩さを排除せむと耳に事寄せて取り合はぬ。

ワックス「モシ、御主人様、チト確りして下さいませ。此館には三千彦と云ふ魔法使が來ましてから怪事百出、貴方の御病氣も彼奴の魔法の爲でムいますよ。その三千彦をテルモン山の牢獄へ押込め、お館の禍を除いたのは此ワックスでムいますから、御安心下さいませ』

小國別をくにわけ何なに、あの三千彦様みちひこさまを岩窟いはやへ打ち込んだとは、そりや大變たいへんな事ことをして呉くれた。あのお方かたは生神様いきがみさまだ。左様さやうな事ことを致いたしたらお前等まへたちに神罰しんばつが當あたるぞ。早くお助たすけ申まをして吾前わがまへに送おくつて參まゐれ。怪けしからぬ事ことを致いたすでないかかと怒氣どきを帶おびて力無ちからなき聲こゑに呶鳴どなりつけた。

ワックスわハハハハハ、貴方あなたの聾つんぼは嘘うそでムごいましたか。何なんと都合つがふの好よい耳みみでムごいますな。御主人様ごしゆじんさま、よく考かんがへて御覽ごらんなさいませ。今日けふか明日あすか知しれぬ身みを以もつて、さう頑張ぐわんばるものぢやありません。此このお館やかたは此このワックスが居をらねば駄目だめでムごいます。バラモン教けうの聖場せいぢやうへ三五教あなひけうの宣傳使せんでんしを引張ひっぱり込こむ等などとは重大ぢゆうだいなる罪つみでムごいませう。こんな事ことが大黒主おほくろぬしの耳みみに這入はいつたら如何どう致いたします。お道みちの爲ためには此このワックスは御主人様ゆじんさまでも、何なんでもムごいませぬぬと呶鳴どなり立てた。

小國姫をくにひめ、三千彦みちひこは頭あたまの上うへの二階にかいにワックスの聲こゑを聞きいて居ゐたが下おりる譯わけにもゆかず、……マンの惡わるい處ところへ惡わるい奴やつがで來きたものだ……と顔かほを顰しかめ、一時いちじも早はやく歸かへりますやうにと、一生懸命いっしやうけんめいに三千彦みちひこは大神おほかみに祈願きぐわんを凝こらして居ゐた。

ワックスは益々大きな聲で主人より拇印をとらむと迫つて居る。看護婦のセー

ルは見るに見かねて、  
セー ル 「もし、ワックス様、旦那様は御大病のお身の上、お體に障りますから何  
卒お控へ下さいませ。奥様がお歸りになつた上、とつくりと御相談遊ばしたがり  
しからう」

ワックス 「エー、看護婦の分際として、家令の悴ワックスに向ひ、無禮の申し様、  
すつ込んで居れ。汝等如き卑女の容喙する處でない。もし御主人様、是非ともこ  
れに拇印を願ひます」

とつきつける。小國別は止むを得ず、

「アア私は目も眩み、耳も遠くなつて何にも分らないが、どんな事が書いてある  
のか大きな聲で讀んで呉れ。そしてワックスが讀んだのでは當にならぬ。セー ル、  
私に代つて、その遺言状を讀んで呉れ」

セー ル 「ハイ、承知致しました。ワックス様、サア此方へお渡し下さい。妾が旦那  
様の代りに讀まして貰ひますから」

ワックス「もし、御主人様、讀んだ以上は拇印を捺して下さいませぬか。捺して貰はなくては讀んで貰つても何にもなりません。それから前に定めて置かねば讀む譯には行きませぬ」  
小國別「讀んだ上で拇印を捺してやらう」

ワックス「イヤ有難い。おい、セール、そこは……それ……腹で讀むのだ。妙な讀みやうを致すと家令の悴ワックスが承知致さぬぞ」  
と睨みつける。セールは委細頓着なく病人の耳許に口を寄せて聲高らかに讀み初めた。

### 遺言状の事

一、吾れ歸幽せし後はテルモン山の館の事務一切を家令の悴ワックスに一任する  
こと。

一、小國姫は別に館を建て、比丘尼として一生を安樂に送らすこと。

一、デビス姫、ケリナ姫はワックスに一切身を任すこと。

一、ワックスを當館の養子となし、デビス姫を女房とすること。

一、ケリナ姫はワックスの意志により第二夫人となすもよし、都合によれば他家へ縁づかすもワックスの自由たるべきこと。

右の遺言状は小國別重病のため筆寫する事能はざるを以て、ワックスに代筆せしめ後日のため拇印押捺するもの也。

年月日 小國別神司

セール 〇ホホホ何とマア蟲のよい遺言状でムいますこと、モシ、旦那様、こんな事御承知遊ばしますか

小國別 〇以ての外の事だ。左様な遺言状には拇印は決して捺さない。引裂いて了へ

と怒りの聲諸共にワックスを睨めつけた。ワックスは手早くセールの手より遺言状を奪ひ取り、主人の指に印肉をつけ、無理に捺させ様とした。老衰の小國別は



抵抗する力もなく進退維谷まつた處へ、宙を飛んで馳來る一頭の猛犬、ウーウー  
ウー、ワツワツと叫び乍らワツクスに跳びかかり腰の帶をグツと銜へて、猫が鼠  
を銜へた様な調子で館の外へ運び行く。オークス、ビルマ、エルの三人は顔色を  
サツと變へ、スゴスゴと受付の間に走り込み、青い顔して慄うて居る。小國姫は  
ヤツと胸撫で下し四邊を窺ひ乍ら病床に下つて來た。

(大正一二・三・二四 舊二・八 於伯耆皆生温泉濱屋 北村隆光録)

## 第七章 暗闇(一四五七)

ワツクスは猛犬スマートに銜へられ、門の外に運び出され、暫くは氣も遠くな  
り、夏草の上に身を横たへて唸いて居た。斯る所へビルマは月を賞め鼻唄を歌ひ  
乍らやつて來た。忽ち一天掻き曇り、大空は墨を流した如く、サツと月光を包ん  
で仕舞つた。

ビルママ 暗闇くらがりの一滴いってきが

天てんと地ちとの間あひだに

ぼつたりと落ちると

暗黒あんこくと静寂せいじゃくが

うるたへてやつて來く

ふくれ上あがつた暗闇くらやみの中なかに

蕨いらかの波なみはどよみ

煙突えんとつの林はやしは黙立もくりつし

四方よもの山脈さんみやくは横臥わうくわし

萬物ばんぶつは

今いまし

暗灰色あんくわいしよくに溶とけて行ゆく

暗闇くらやみのひと一つの壁かべから  
煤すすけた  
赤あからんだ  
月つきが  
顔かほをしかめた

月つきはユララユララと  
ゆらめきながら  
険けはしい雲くもの坂路さかみちを  
昇のぼり初はじめた

しばし

やがて

悪魔あくまが翼つばさをひろげて

黒雲くろくもの臥床ふしどに

月つきを閉とぢ込こめて了しまふと

暗闇くらやみがぬけ落おちた齒はの間あひだから

ゲラゲラと笑わらうて

急いそいで地ちの中なかへ潜もぐり込こんだ

翌あくる朝あさ

生なまぬる温あめい雨あめが

しよぼしよぼと降ふつて居ゐた

月つきは恐おそろし雲くも間まに隠かくれ

黒くろい犬いぬ奴めが飛とんで來きて

ワックス司つかさは雲くもがくれ

ウウ、ワンワン吠ほへ猛たける

ワツと驚くワツクスが 帯を銜へてトントンと

門の外へと引ずり出した その怖ろしい権幕に

ビルマはビルビル慄ひ出し オークスさまは逃げ出す

鞆丸潰したエルの奴 雲を霞と隠れ行く

さはさり乍らデビスのお姫さま どの何處へ雲がくれ

月雪花にも擬うよな 綺麗な綺麗なお顔立

一寸見てさへ顫ひつく 雲がお月を隠すよに

いづこの曲津がやつて来て テルモン館の蓮華花

何處へ隠したか知らねども ワツクスさまは氣が揉める

あれ程惚れたお姫さま 三五教の魔法使

みちみち彦に攫はれて 指を銜へてアングリと

噀今頃は草の露 涙に濕る事だらう

とは云ふものの俺だとして 木石ならぬ人の身だ

男と生れて来たからには あんなナイスと一夜の枕を

交かはしてみたい氣きも起おこる

ああ惟かむながら神かむながら々々

月下氷人むすぶのかみの引ひき合あはせ

姫ひめの所在ありかを尋たづね出だし

第一番だいいちばんの功こう名みやう手て柄がら

やらねばならぬ羽目はめとなり

彌々館いよいよやかたを抜ぬけ出だして

月つきの光ひかりを頼たよりとし

此處迄ここまでやつて來きたもの

一寸先いっすんさきも見みえわかぬ

眞暗まつくらがりの馬場道ばんばみち

アイタタツタ何者なにものぢや

嫌いやらしいものが觸さはつたぞ

これやこれや其方そちは化物ばけものか

合點がてんのゆかぬ代物しろものぢや

三五教あななひけうの魔法使まはふつかひ

こんな所ところに化物ばけものを

現あらはし俺おれの肝玉きもたまを

取とらうとしても駄目だめだぞよ

ウンウンウンそれや何なんだ

狐きつねか狸たぬきか狼おほかみか

但ただしは天狗てんぐか古狸ふるたぬき

譯わけの分わからぬ唸うなり聲こゑ

逃にげようと云いつても足許あしもとが

ハツキリ分わからぬ此場合このばあひ

この怪物くわいぶつの正體しやうたいを

度胸どきょうを据すゑて調しらべよか

もしも姫ひめさまであつたなら

それこそ思はぬ儲けもの  
アア惟神々々  
御靈幸倍まませよ

と慄ひ慄ひ歌つて居る。俄に黒雲はパツと晴れて皎々たる夏の月は四邊を畫の如く照した。草に置く露の玉には月光宿り瑠璃の如くに光つて居る。ビルマは足許の黒い影を見て首を傾け窺へば正しく人間の唸り聲である。怖々ながら側に寄り「オーイオーイ」と二つ三つ揺つて見た。倒れた影はムクムクと起き上りビルマの顔を覗くやうにして凝視めて居る。ビルマは月を背に負うて居たのでハツキリ顔が分らなかつたが、一方の顔には月光を受けて顔の生地迄分つてゐる。ビルマ「ヤアお前はワックスぢやないか。随分甚い目に遇つたものだなア。どこともなしに山犬がやつて來やがつてお前を銜へて出た時の怖ろしさ、友達の難儀を見捨てる譯にもゆかず、オークス、エルの奴はビリビリ慄つて居るなり、剛膽不敵の此ビルマが助けようと思つてやつて來た所、お前に突き當り、どうも濟まぬ事をした。どうだ、どこも怪我は無かつたか」

ワックス「ウン有難う、よう来て呉れた。友達なればこそ来て呉れたのだなア。山犬が出て来て此處迄俺を銜へ込み、最後になつて三つ四つ振りやがつた時には目がマクマクして怖かつたよ。併し乍ら親友なればこそお前が来て呉れたのだ。この儘放つて置けば俺の命は無くなつたかも知れない。アア有難い、お禮申す、屹度俺が目的を達したならお前を家令にしてやるから楽しんで待つて居れ」

ビルマ「何と俄に雲行が變つたものですな。いつも私を門番門番と呼び付になさいました、今日に限つて親友だと云つて下さつた。アア有難い、幾久しう親友として御交際願ひますよ。いつもなら吾々を塵埃の如く振り向いても下さらぬのだが、矢張り叶はぬ時の神頼み、こんな時に來て貰うと嬉しいと見えますな。併し斯様の所に居ると誰に見つかるとも分りませぬ。サア一時も早く貴方のお館迄送つて上げませう」

ワックス「家へ歸る所か、お前は何と思ふかも知れぬが、又しても三五教の魔法使が館の中に潜り込んで居るやうだ。さうでなければあの犬が出て來る筈がない。サア是から、人氣の立つたを幸ひ、鉦や太鼓を叩いて辻説法を初め、あの三千彦



を門外に誘き出し、やつつけねば陰謀露見して吾等の笠の臺が飛ぶかも知れぬ。  
少し腰が痛くとも辛抱して今晚は大活動をやるのだな。アイタタツタ。山犬の奴、  
ひどくやつ付けやがった。おい、ビルマ、何處かで驢馬でも引つ張出して来て呉  
れ。そして鉦も太鼓も探して持つて来い。天へ登るか地獄へ墮ちるかと云ふ境目  
だからな」

ビルマ「三千彦の魔法使は岩窟の中へ閉ぢ込めて、二人の番卒がつけてある上は、  
滅多に館の中に歸つて来る筈がありますまい。お前さま山犬に振られて氣が狂う  
たのではありますまいか」

ワツクス「エ、馬鹿云ふな、その位な事に氣が狂ふものか、サア事遅れては一大  
事だ、早く早く」

と急ぎ立てる、ビルマは一目散に驅け出し、驢馬に跨り一頭を引き連れ來り、ワツ  
クスを助け乗せ、自分は豆太鼓や摺鉦を打ち鳴らしながら、宮町の四辻に向つて  
驅け出し、

トントンチンチン トンチンチン  
チントン チントン チントントン

と夜中に飴屋式に離し立てた。空平、八平、田吾作もこの聲に夢を破られて慌てて戸外に駆け出した。ワックスは馬上より大聲を張り上げ、  
「ヤアヤア宮町の連中殿、又もや三五教の魔法使がお館に現はれた。サア戸毎に叩き起し脛腰の立つものは拙者に従つて館の表門に押しかけられよ、時後れては一大事、魔法使が先度のやうに寶を奪ひ取り、終ひには命迄取つて仕舞ひますぞ。悪魔を滅ぼすは今此時」  
と唝鳴り立てた。次から次へと慌者が觸れ歩き、瞬く間に二三百の老若男女が四辻に集まつて来た。ビルマは馬上より、

ドンドコ ドンドコ ドコドコドン  
チヤンチキ チヤンチキ チヤンチキチン

と囃はやし立たて乍ながら先頭せんとうに立たつて進すすむ。ワックスは馬ば上じやうから進軍しんぐんの歌うたを歌うたひ初はじめた。

ワックス☐出でた出でた出でた出でた鬼おにが出でた  
テルモン山ざんの神館かむやかた

小國をくにわけ別の奥おくの間に打うてよ打うて打うて打うて今いま打うてよ

館やかたの大事だいじは云いふも更さら汝等なんぢら一同いちどうの難儀なんぎだぞ

ドンドコ ドンドコ ドコドコドン チヤンチキ チヤンチキ チヤンチキ

チン

各めいめい自家いへの重寶ぢゆうほうを戸毎こごとに盗ぬすんだ泥坊どろぼうも

三五あななひけう教まはの魔法ふつかひ使み三千彦みちひ司こつかさと云いふ鬼おにだ

殺ころせよ殺ころせよ打うち殺ころせこれを見逃みのがし置おいたなら

神かみの館やかたは云いふも更さらお前等まへら一同いちどうの身みの終をはり

命いのちを取とるか取とられるか千騎せんき一騎いつきの正念場しやうねんば

ドンドコ ドンドコ ドコドコドン チヤンチキ チヤンチキ チヤンチキ

チン

歌と拍子につれて數多の老若男女は月光を浴びながら館の表門指して押し寄せた。この物音に小國姫、三千彦は不審を起し、三千彦は小國姫に病人の看護をさせ置き、自分は唯一人門外に驅け出した。ワツクスは三千彦の姿を見るより、ワツクス「ヤアヤア皆の者、今其處に現はれた奴が町民の仇、大泥坊の魔法使だ、それ逃がすな」

と下知すれば、何も知らぬ老若男女は蚯蚓に蟻が集まつたやうに四方から木片をもつて打ち叩き、寄つて集つてふん縛り、ワツシヨワツシヨと聲を揃へてアンブラツク川の水瀬にザンプと許り投げ込んで仕舞つた。アア三千彦の運命はどうなるであらうか。

(大正一二・三・二四 舊二・八 於伯耆皆生温泉濱屋 加藤明子録)

第八章 愚摺(一四五八)

ワックスはビルマと共に巧く町民を煽動し、三千彦を袋叩きにして、アンブラツク川に投げ込み、意気揚々として己が館に歸つて來た。父のオールスチンは二人の看護婦に看護され乍ら現になつて、ワックス ワックスと連呼してゐる。そこへソツと歸つて來たワックスは、盗猫が留守の家を覗く様な態度で、ノソリノソリと這入り來り父の病床に近寄り、二人の看護婦に向ひ、小さい聲で、ワックス「モシ、看護婦さま、日夜御苦勞ですが老爺の病氣は助かりませうかな」看護婦の一人「ハイ、お氣の毒乍ら到底諦めて貰はねばなりませんまい」ワックス「成程、それも仕方ありません。何程悔んだつて壽命はどうする事も出來ませぬからな」ビルマ、小さい聲で、

「親の財産あてにすりや

薬罐頭が邪魔になる」

とウツカリ喋つた。病人のオールスチンは耳敏くも此聲を聞きつけて苦しい體を起き上り、……悴のワックス奴、大切な親の死ぬのを待つて居やがるのだな……と苦痛を忘れ、聲を尖らして、

オールスチン「こりや悴、何と云ふ不孝な事を申すのか。ま一度今云つた事を云つて見よ」

ワックス「へ、あまり御病氣が重いので心配して看護婦に尋ねて居つた處です。ここに來てゐる門番のビルマと云ふ奴、お父さまが大病で、私がこれ丈け心配してるのに其心も知らず、あんな事を云ひやがつたのです」

オールスチン「さうぢやあるまい。貴様常平生から左様の事を云つて居るものだからビルマが眞似をしたのだらう。貴様はチツと心得ねばならぬぞ。俺が目を買つて了へばお前の身邊は忽ち危ふくなつて來るぞ。如意寶珠の玉を隠したり、種々雑多と陰謀を企てて居つた事は三五教の三千彦様がスツパリ御存じだ。こんな事が表沙汰になつたならば家令の家は斷絶、お前の命はなきものと覺悟せねばなるまい。これが一生の別れだから憎い悴でも矢張り親の因果として庇い度うなつて

来る。今の間何處かへ身を隠し、遠い國へ行つて苦勞を致したが宜からう」

ワックス「お父さま、そりや違ひます。三千彦と云ふ魔法使が盗つて居たのですよ。その證據には町中の者が袋叩きにして……ムニヤムニヤムニヤ」

オールスチン「何、町中の者が、三千彦を袋叩きにしたと云ふのか。そりや大變な事をして呉れた。早くお詫をせなくちやお館の一大事が起るかも知れぬぞ」

ビルマ「何と云つても町内が寄つて集つて雁字搦みにし、アンブラック川に投げ込んだものですから、疾うの昔に死んでゐますよ。滅多にワックスさまの難儀になる氣遣ひはありません。寧ろ神館の惡魔を退治なさつた結構な救世主です。そして小國別様の御養子になられる約束がチヤンと奥さまとの間に定つたのですから、オールスチン様、御安心なさいませ」

オールスチン「一人の悴を養子にやると云ふ事はどうしても出来ない。さうすればオールスチンの家は血統が絶えるぢやないか」

ワックス「お父さま、そんな心配は爲さらず早く成佛して下さい。貴方の苦みを見て居るのが子として見て居られませぬからな。私とデビス姫と結婚した上は三

人にんや五人ごにんの子こは出で來きるでせう。總領そうりやうは養家やうかの後繼あとつぎとし、次男じなんをオールスチン家けの後目相續あとめさうぞくにすれば宜よいぢやありませぬか。貴方あなたの血統けつとうたる私わたしが殘のこつてる以上いじやうは大だい丈夫ぢやうぶです。ゴテゴテ云いつたら養家やうかをオールスチン家けにして了しまへば宜よいのです。

(小聲こしやう) エ一年寄としよりだてら死際しにぎはになつて要いらぬお節介せつかいだ。いい加減かげんに斃くたばつたら宜よい  
のにな」

と後振あとふり返かへつて小聲こしやうに呖うげいて居ゐる。幸さいはひに病軀びやうくに惱なやむ父ちちの耳みみには這入はいらなかつた。

オールスチンはグタリとなつて苦しげに又またもや寢臺しんだいの上うへに倒たふれて了しまつた。

看護婦かんごふ「モシ若旦那様わかだんなさま、餘あんまり八釜やかましう仰有おつしやいますと御病氣ごびやうきに障さはりますから、何卒どうぞ

別館はなれの方ほうへ行いつてお休やすみ下くださいませ」

ワックス「オット、ヨシヨシ、それを待まつて居ゐたのだ。然しかし看護婦かんごふさま、此方こちらに

も都合つがふがあるのだが、お前まへの考かんがへでは今日けふ一日いちにちは大丈夫だいぢやうぶだと思おもふか。葬禮さうらいの用意ようい

もせなならぬからな」

看護婦かんごふ「御心配ごしんぱいなさいますな。屹度きつと本復ほんぶくさして上げます。假令たとへお亡なくなり遊あそばす

として、三十日さんじふにちや五十日ごじふにちは大丈夫だいぢやうぶですからな」



ワックス「へー、何分御介抱を宜しう頼みます」  
と云ひながら別館の間に至り、冷酒を兩人差向ひになつてグイグイとやり初めた。  
ビルマはへべれけに酔ひ潰れ、ソロソロ銅羅聲を張り上げて唄ひ出した。

ビルマ「オールスチンの老爺さま 肋骨を折られてウンウンと

呻つてゐる憐らしさ 癒りもせねば死にもせず

厄介至極の老爺さま ワックスさまも嘸や嘸

困つてゐるに違ひない 早く何とか埒つけて

ワックスさまの目的を 立てさしてやらねばなるまいぞ

もしも都合好う行つたなら 私は一躍家令職

之を思へば一時も 早く老爺さまに死んで欲しい

欲しいわいな欲しいわいな欲しいわいな 薬罐老爺が死んだなら

皆さま喜ぶ事だらう ヨーイセイー ヨーイセイー

思ふやうにはいかぬもの ホンニ浮世はじれつたい

ヨートセー　ヨートセー」

ワックス「こりや何ほ何でも俺の前で、そんな事を唄ふ奴があるか。俺だつて肉身の親だもの、死ぬのがチツトは……嬉しいとも悲しいとも思はないよ。併し乍ら老爺が死ねば此財産がスツカリ俺の所有物になるのだから嬉しい様でもあり、只一人の親が死ぬのだから悲しい様でもあり、嫁入りと葬式と一緒に來たやうで一掬同情の涙を流して居るのだ。貴様も餘程没分曉漢だなア」

ビルマ「没分曉漢か、何か知らぬが此ビルマは心にもない追従を云ふのは嫌ひだ。ワックスさま、お前の心は此ビルマが云つた通りだらう。そんな目に唾を着けるやうな同情は止めなさい。それよりも態よう老爺に早く死んだらよいと云うたが宜しからうぜ。悪黨なら悪黨らしく、男らしくせぬのかい。そんな事で大陰謀が成就するものか、お前さまも徹底的の悪人だと思つたが大徹底的の悪人だつたな。悲しくもないのに悲しい様に云ふ丈け人間が悪いわ」

と譯の分らぬ事を管巻く。

斯かかる處ところへエクス、ヘルマンの兩人りやうにん、ズブ六ろくに酔よひ乍ながら門もんの戸とを矢鱈やたらに叩たたき、  
兩人りやうにん「へー、御免ごめんなせえ。鬼門きもんの神かみがやつて來きやした。ワックスさまの陰謀いんぼう先生せんせい  
は在宅ざいたくですか。何だ、何奴どいつも此奴こいつも返事へんじしやがらぬな。ハハア、俺おれを排斥はいせきして  
けつかるのか。ヨーシ、何もかも、之これから館やかたへ行いつて陰謀いんぼうを素破すつばぬ抜ぬいてやらう…  
…と云いつても俺おれも其仲間そのなかまだ。何時なんどき暴露ばれて笠かさの臺たいが飛とぶかも知しれないのだ。それを  
思おもへば甘え酒うめさけも不味まずうなつて來くる。斯かう毎日まいにち毎日まいにち心の鬼おにに責せめられては、やりき  
れない。一つワックスの若造わかざうに無心むしんを云いつて三百兩さんびやくりやうばかりおつ放はり出ださせ、自棄やけざ  
酒けでも飲のんで過すごさにやりきれないわ」  
と戸とを無理むりに引き開あけ、ドカドカと病室びやうしつに驅かけ込み、  
エクス「ヤ、御大將おんたいしやう、矢張やつぱり御病氣ごびやうきですか。そりや誠まことにお氣きの毒どくだ。然しかし乍ながら一ひと  
つ願ねがひ度てえ事ことがあつて吾々われわれ兩人りやうにんがやつて來きやした。此この様子やうすでは御家令ごかれいさまも、と  
ても助たすかりますまい。澤山たくさんの財産ざいさんを持もつて冥土めいどに行く譯わけにもゆくまいし、チツト  
は善根ぜんこんの爲ためにわれわれ兩人りやうにんに三百兩さんびやくりやうばかり死土産しにみやげを下くだつせえ。お前まへの大切たいせつの倅せがれの  
首くびがつなげるのも、つなげぬのも、吾々われわれ兩人りやうにんの舌した三寸さんすんの使つかひやうだ。死しんでも心こころ

残りのない様に、サア、スツパリと三百兩<sup>さんびやくりやう</sup>めて六百兩<sup>ろくびやくりやう</sup>出して頂きやせう。御家令<sup>ごかれい</sup>

さま、小倅<sup>こせがれ</sup>の命<sup>いのち</sup>が繋<sup>つな</sup>げると思<sup>おも</sup>へば安價<sup>やす</sup>いものでせう」

看護婦<sup>かんごふ</sup>「コレお二方<sup>ふたかた</sup>、旦那様<sup>だんなさま</sup>が御病氣<sup>ごびやうき</sup>の處<sup>ところ</sup>へ、そんな事<sup>こと</sup>を云<sup>い</sup>つて來<sup>く</sup>るものぢやあ

りませぬよ。若旦那<sup>わかだんな</sup>が別館<sup>はなれ</sup>に居<sup>を</sup>られますから、彼處<sup>あそこ</sup>に行<sup>い</sup>つて下<sup>くだ</sup>さい。此病室<sup>このびやうしつ</sup>へは

這入<sup>はい</sup>つてはなりません。ここは看護婦<sup>かんごふ</sup>の許可<sup>ゆるし</sup>がなけりや一歩<sup>ひとあし</sup>も這入<sup>はい</sup>つてはいけま

せぬ」

エキス「成程<sup>なるほど</sup>、これは恐れ入<sup>おそ</sup>つた。ワックスの若<sup>わか</sup>が別館<sup>はなれ</sup>に居<sup>あ</sup>るさうだ。一つ彼奴<sup>あいつ</sup>

に談判<sup>だんぱん</sup>してドツサリと「むし」つて來<sup>こ</sup>ようぢやないか。グツツツゲゲゲガラ

ガラガラドツツツ」

と八百屋店<sup>やほやみせ</sup>を出<sup>だ</sup>す。

看護婦<sup>かんごふ</sup>「エー、好<sup>す</sup>かんたらしい、掃除<sup>さうじ</sup>をなさい。妾<sup>わたし</sup>はお前等<sup>まへたち</sup>の掃除役<sup>さうじやく</sup>ではありま

せぬぞえ」

エキス「エー、八釜<sup>やかま</sup>しう云<sup>い</sup>ふない。出<sup>で</sup>たものは仕方<sup>しかた</sup>がないわ。グツグツ吐<sup>ぬか</sup>して六

百兩<sup>ひゃくりやう</sup>の金<sup>かね</sup>を出<sup>だ</sup>し惜<sup>をし</sup>みしやがるものだから嘔吐<sup>へど</sup>の奴<sup>やつ</sup>、氣<sup>き</sup>を利<sup>き</sup>かして八百兩<sup>はつひやくりやう</sup>、いや八

百屋店を出したのだ。エー、臭い臭い、おいヘルマン、行かうぢやないか。こんな斃つた老爺に向つて文句を竝べたつて仕方がないや。』  
と云ひ乍ら、ヒヨロリヒヨロリ廊下を傳つて足をヨボヨボさせ乍ら進み入る。  
エキス「おい、ワツクスの大將、金だ金だ。今日は何と云つても貰はなくちや動かねえのだ。エー、よう考へてみよ。宮町一般の人間を騙くらかし、大切なお姫様を狐のお化だと云つて、あんな岩窟に押込めよつて往生づくめでウンと云はさうと思つても、さうはいかぬぞ。サア六百兩、耳を揃へて出したり出したり、グツグツ吐すと二人が之からお館へ行つて素破抜くが如何だ。三千彦の宣傳使にだつて、あんな事をしやがつて、本當に太え野郎だ。サア、キリキリチャツと、四の五の吐さず六百兩出さぬかい。エー篋棒奴、無いと云ふのか。こんなデツカイ屋臺骨をしやがつて金の千兩や一萬兩、無いとは云はさぬぞ。お前の老爺は家令をしやがつて、うまい事して澤山の金を穴倉へ仕舞ひ込んだと云ふ事だ。澁老爺の鬼老爺の倅だけあつて貴様も中々出し嫌ひと見えるが、何と云つても俺には出さにやならぬ理由がある。サア、キリキリチャツとおつ放り出さぬかい。マゴ

マゴして居やがると貴様の首が飛んで了ふぞ

ワックス「オイ、又しても又してもさう脅喝に来ては困るぢやないか。今老爺が千騎一騎の場合だから……只一人の親に離れようとする最中だから、チツと俺の身にもなつて呉れ。老爺が亡くなつてから如何でもしてやるから」

エキス「暫らく待たれる位なら病人で取込んで居る家へやつて来るものかい。お前はさう陽氣な事を云つてるが俺は尻に火がついて居るのだ。サア早くキリキリチャツと出したり出したり」

ビルマ「オイ兩人、さう八釜しう云はずに、俺と一緒に酒でも飲んだら如何だ。」

話は後で緩りしたら宜いぢやないか

エキス「ウン、酒なら飲んでやらぬ事はない。四斗樽と仇名をとつたエキス、ヘルマンの兩人だ。お酒の御用なら後へは退かぬぞ」

とドツカリと坐し、柄杓に掬うてグーグーと飲み始めた、四人はへべれけに酔ひ、四邊構はず堤を切らして唄ひ初めた。

エキス 欲と色との二道かけて 極道息子のワックスが

二人の男をちよるまかし テルモン館の御寶

マンマと盗み出さして 自分がデビスの婿となり

終ひの果てにや小國別の 權利財産横奪し

榮耀榮華に暮さうと テツキリ梟の宵企み

夜食に外れて青い顔 致さにやならぬ時が來た

ドツコイシヨ ドツコイシヨ それさへあるにデビス姫

類ひ稀なるナイスさま ケリナの姫と諸共に

テルモン山の岩窟へ 狐のお化とちよるまかし

押し込んで置いて夜な夜なに 口説きに行きよる馬鹿男

之程悪を企む奴 六百兩の黄金が

惜うて出せぬ位なら 首でも吊つて死ぬがよい

何れ死なねばならぬ奴 今に天罰報い來て

家は斷絶その身は所刑 これの館は風前の

燈火の如く刻々に

危険の迫るを知らないか

生命が大切か黄金が

大切かよつく考へよ

金と命の引替へに

早く渡せよワックスよ

俺等二人は自棄糞だ

之から館へ飛び込んで

恐れ乍らと白状する

そしたら貴様は第一に

悪の兇頭と定められ

命のないのは知れた事

俺等二人は従犯だ

重い所で遠島か

所拂ひになる位

早く出せ出せ六百兩

ヨイトシヨ

ヨイトシヨ

こんな酸っぱい酒位

飲ましておいて箝口令

布いた所で駄目ぢやぞよ

暴露してやらうかワックスよ

命が惜けりや金を出せ

デビスが欲しけりや金を出せ

ケリナが欲しくば金を出せ

館の養子になり度くば

ヤツパリ六百兩の金を出せ

金を出すのが嫌なれば

俺等の前に首を出せ



此出刃庖丁でチヨンぎつて アンブラツク川へドンブリと

流してやらうか御承知か アア金が欲しい、金が欲しい

金が敵の世の中ぢや 何程敵と云つたとて

金ほど笑顔のよい奴が 又と世界にあるものか

ドツコイシヨ ドツコイシヨ 金ぢや金ぢや早や金ぢや

警鐘亂打の聲よりも 俺の催促烈しいぞ

コラコラ悪黨ワツクスよ 色と欲との二道かけた

此大芝居をやり遂げて 安全無事に此の世をば

送らうと思へば金を出せ 資本がなくては何事も

成就せないは世の習ひ アア惟神々々

金をドツサリ下さんせ バラモン帝釋自在天

大國彦の御前に エキス ヘルマン兩人が

畏み畏み願ぎまつる ウントコシヨ ドツコイシヨ

八釜しい聲が人耳に 入るのが嫌なら金を出せ

どんな難しい問題も

金で治まる世の中だ

兔角浮世は色と酒

此欲望を充すのは

ヤツパリ金の神様だ

お前の首をつなぐのも

ヤツパリ金の御利益だ

蒔かない種子は生えぬぞや

早く命の種子を蒔け

ドッコイシヨー ドッコイシヨー

扱ても強情い吝嗇だ

それ程金が惜いかい

雪隠の側の猿不食柿

澁うて汚うて小かうて

喰へない奴は貴様ぞや

アア金が欲しい金が欲しい

目玉飛び出しましたませよ

と自棄糞になつてワックスを困らせるために四邊構はず喚き立てる。ワックスは堪りかねて矢場に父の病室に駆け入り、ソファアの下に匿してある黄金を無理に引たくり、二人の前に投げつけた。

エキス エヘヘヘ流石は哥兄だ。偉い偉い、吾意を得たりと云ふべしだ。成程

山吹色の黄金で耳を揃へて六百兩、マアこれで三十日ばかりは沈黙を守つて居るから、次に來る迄用意をして置くが宜からうぞ。今度目にゴテゴテ云うと駄目だからな

と下駄を預け乍ら、六百兩を二人が懷に捻ぢ込み、ブラリブラリと臭い息を吐きながら歸り行く。

(大正一二・三・二四 舊二・八 於皆生温泉濱屋 北村隆光録)

第二篇 顯幽兩通

第九章 婆娑(一四五九)

霜しもに打うたれて茶滓ちやくすのやうになつた棕むくの葉はは、凧こがらしに吹ふかれてハラハラと小鳥ことりの群むれ立つやうに四邊あたりに飛とび散ちつて居ゐる。木の葉はの羽衣はごろもを脱ぬいだ栗くりの梢こずゑには成育せいいく悪あしき蟲むしの綴つづつた毬栗いがくりが二ふたつ三みつ蜘蛛くもの巢すと共に中空ちゆうくうに慄ふるつて居ゐる。鴉からすは皺しわ嘎が聲こゑを出だして岩窟いはやの麓ふもとの屑屋くづや葺ぶきの屋根やねにとまつて悲かなしげに鳴なき立たてる。どこともなしにボーンボーンと諸行無常しよぎやうむじやうを告つぐる梵鐘ぼんしやうが聞きこえて來くる。鬼哭きこく耿耿しうしうとして寂寥せきれう身に迫せまり、齒はの根ねも合あはぬガタガタ慄ふるひ、破やぶれ障子しやうじの隙間すきまから耳みみを射さすやうな凧こがらしがピウピウと矢やのやうに這はい入いつて來くる。黒くろずんだ破やぶれ疊たたみは歩あるく度たび毎ごとに足あしにもつれつき、幾度いくたびとなく人ひとを轉ころばして笑わらつて居ゐる。霜柱しもはしらは覺束おほつかなげに一本橋いっほんばしを眞白まつしろけに染そめ、川水かみづは直濁ひたごりに濁にごり、岩いはを嚙かんでは吠猛ほえたけつて居ゐる。高姫たかひめはシャルと共に裏うらの岩山いはやまから小柴こしばの朽くちた、半水ななみづを含ふくんだ枯枝かれえだを拾ひろひ來きたり、縁ふちの缺かけた圍爐ゐろ裏りに熏くすべ、耳みみの缺かけた四角しかくい湯釜ゆがまを天鈞てんどりに釣つり下さげ、眞黒まつくろけの竹たけの柄杓ひしやくで汲くんでは飲のみ、汲くんでは飲のみ、熏くすつた顔かほをつき合せ乍あはなから目玉計めだまばかりを【キヨロ】づかせ、又また煽あふり乍あはな、何かなにブツブツ不機嫌ふきげんな顔かほをして囁ささやいて居ゐる。

高姫たかひめ ♪ これシャル、お前まへも此處ここへ來きてから大分だいぶん日ひ日にちが立たつたやうだが、もう些ちつと

此生宮の精神が分りさうなものぢやないか。朝から晩迄灰猫のやうに圍爐裏の傍にへバリついて、湯ばかり餓鬼の様にガブガブ呑んで居ないで、些と外へ出て活動しては如何だい。第一靈國の天人の身魂日の出神の生宮に亡者引をさして、お前は灰猫爺の様に熏つて居ても、社會の爲貢獻する事が出来ないぢやないか。些と活動して貰はなくは、どうしてウラナイ教のお道が開けますかい。お前サンも見掛によらぬ【どたふし】ものだなア

シャル「そりや何をおつシャルのだ、よう考へて御覽なさい。斯う俄に陽氣が悪くなり夜とも晝とも分らぬやうな世の中にどうして活動が出来ますか。外はビユウビユウと冴が吹き、霜柱が立つて鴉さへも怖さうに啼いて居るぢやありませんか。日の出神の生宮なら些と日輪様でも昇つて貰つて陽氣が暖かくなるやうにして下さい。どれ程活動しようと思つても體が縮こまつて、寒うて淋しうて何だか怖ろしうて手も足も出せないぢやありませんか。日の出神様も好い加減なものですよ。これ程毎日日頼むのに日一日と寒くなる計り、こんな薄着でどうして日が越せませうか」

高姫「工工譚の分らぬ【トマ】助だなア。いつも云ふ通り苦勞の塊の花が咲く御  
教だ。寒い目をするのも飢い目をするのも苦しい目をするのも皆神様のお恵だよ。  
現世は假の世と云うて、限りがある。どうせ一度は死なねばなりませんよ。死ん  
でから、エターナルに無上の歡喜を攝受し、天國の住民として暮さうと思へば、  
五十年や百年寒い目をしたつて飢い目をしたつて易いものだ。肉體を苦しめて、  
靈を鍛へ上げ、立派な立派な神の生宮となるのだよ。此高姫の事を考へて御覽な  
さい。何程日の出神の生宮と云うたつて、肉體が有る限り矢張りお前サンと同じ  
やうに寒い時には寒い、飢い時には飢いのだ。結構な火と水とを戴いて喉が乾け  
ば水を頂き寒ければ火を戴いて暖まる、何と云ふ勿體ない事を云ふのだえ。火と  
水とお土との御恩を忘れては人間は此世に立つてゆけないと何時も云ふぢやあり  
ませぬか。初も初も覺えの悪い健忘症だなア、苦しいのが結構だよ。苦しみの後  
には屹度樂しみが来る、寒い冬の後には春が来る、何程冬を春にしようとしても、  
それは天地のお規則だから、人間が左右する事は出来ませぬぞや」  
シャル「何程、火の御恩と仰有つても、こう日月の光もなく、四面暗澹として闇

が碎けたやうに、空から落ちて来ては根つから火も暖かうないぢやありませんか。  
此處の火は、何だか水の中に屁を放つたやうに力がありませんわ。何程焚いても  
焚いても體が暖まる所へはゆかず、煙たい計りで、焚物迄が腹を立てて、ブツブ  
ツ小言を云ひ、シユンシユンと涙迄漣して居るぢありませんか。こんな火にあた  
つたところで燈明の火で尻を炙つて居るやうなものです。此頃の火は老耄たので  
せうか、テント勢力がありませんわ

高姫「コレ、何と云ふ勿體ない事を云ふのだい。お燈明で尻を炙つたやうだなど  
とは怪體の事を云ふぢやないか。お前さまは靈が悪から、精靈が籍を八寒地獄  
に置いて居るから、それで寒いのだよ。妾のやうに御神徳を頂きなさい。精靈は  
地獄、肉體は八衢に彷徨うて居るやうな事で、どうして神の生宮と云へますか」  
シャル「何だか知りませぬが、高姫さまの仰有る事は些とも腹に這入りませぬが  
なア」

高姫「定つた事だよ、そこら中泥坊に歩いて居たやうな悪黨者だから、一旦染み  
込んだ灰汁は容易に落ちさせぬワイ。誠水晶の塊の日本魂の結構な結構な生宮さ

まの身魂と、蛆蟲の生いた糞まぶれの身魂とはどうしてもバツが合はないのは當然だ。何を云うても最奥第一靈國と最下層地獄に靈を置いて居る者との應對だから、妾が云ふ事が分らぬのも無理はないが、併しこう永らく妾の傍に居るのだから、も少しは身魂が研けさうなものだが矢張身魂が我羅苦多だから骨の折れる事だよ。毎日日お前一人にかかつて言靈の原料が無くなるほど説き諭して居るのに、鶉の毛の露程も改心が出来てゐないぢやないか、盲聾と云ふものは、どうにもかうにも料理の仕様が無いものぢやなア。天人の靈にこの高姫が一言云うて分る事を、地獄靈のお前には數百萬言を費さねばならぬのだから、本當に厄介者を引張込んだものだ。是でも神様は至仁至愛だからトコトン改心させねばならぬ。お前さへ改心して呉れたなら、世界中一遍に改心すると底津岩根の大神様が仰有るのだから何卒日の出神が手を合して頼むから、聞いて下さい。神も一人一人改心させようと思へば骨が折れるぞよ。チト神の心も察して下さいよ。日の出神の生宮の申した事は一分一厘毛筋の横巾程も間違ひはムらぬぞよ」

シヤル「高姫さま貴女の仰有る事は、一から十迄間違ひだらけぢやありませんか。



ひとつだつて貴女の仰有つた事が的中した事が無いぢやありませんか。よう其れ程  
間違つた事を云うて置いて、自分から愛想が盡きない事ですな。……明日は日輪  
さまを出してやらう、若しこれが間違つたら日の出神は此世に居らぬぞよ……と  
啖呵を切つて置きながら、其日になるとザアザアと雨が降り、そこらが眞黒けに  
なつたぢやありませんか。其時になつてお前さまは何んな顔をなさるかと考へて  
居れば……アア日の出神様御苦勞様で△います。日輪様がお上りなさらないのも  
御無理は△いませぬ。此高姫の傍には身魂の曇つたものが「シャツ」ついて居る  
から、仕様が△いませぬ……とか何とか甘い理窟をつけて澄まし込んで△居るの  
から、私も愛想が盡きました。よう考へて御覽なさい、假令私が極悪人であらう  
とも一人の爲にお日様が出なかつたり、空が曇つたりするやうな道理があります  
か、萬一私に曇りがある爲に天地が曇るのなら私の一舉一動は天地に感動して居  
るやうなもの、そんな偉い者ぢやありませんか。お前さまは私の悪口を云ひ乍ら  
私を天地稀なる比類無き英雄豪傑にして下さつたやうなものだ。其處邊の點がど  
うしても私には合點がゆかないのですよ」

高姫「工工何をつべこべと下らぬ理窟を云ふのだえ。お前は因縁の悪い身魂だからバラモン教からは追出され小盗人からは除ね出され、しよう事なしにこの高姫の尻に喰ひついて居るのぢやないか。お前のやうな我羅苦多が天地を動かすやうな力はあるさうな事はない。併し乍ら神様がお前を世界悪の映象として三五教の變性女子のやうに型に出してゐるのだから、世界の悪身魂がお前に寫り、お前の悪身魂が世界に寫るのだ。それだからお前さへ改心して呉れたら世界中が改心致すと云ふのだよ。この日の出神は天も構へば地も構ふ、又八衢も構ふ大ミロク様の太柱だから、零落れて居ると思つて侮りて居ると、スコタンを喰ふ事が出来ますぞや。先を見て居て下され、先になりてから、……アア高姫さまは立派なお方だつた、こんな事なら、口答も致さず、も些と許り大事に敬つて居たらよかつた……と地團駄踏んでも後の祭り、何程其處になりて……改心致しますから助けて下され……と云つても日の出神は知りませぬぞや。さうだから今の間に柔順しう致して素直になさるがお主のお得だ。此世でさへも切替があるのに何をグツグツしてゐるのだ。早く心の切替をなさらぬかいナ」

シャル「高姫さま本當ですかいな。そんな事云つて大法螺を吹くのぢやありませんか、口から法螺を吹き、尻から喇叭を吹くのは當世の流行ものですからなア」  
高姫「それはお前の悪が水晶の鏡の此生宮に寫つて居るのだよ。……人の事だと思つて居ると皆吾事だぞよ……と變性男子のお筆に出て居るぢやありませんか、犬が魚を銜へて一本橋の上を渡ると、水の底にも亦一匹の犬が居て魚を銜へ倒に立てつて歩いて居るのを見て……此奴怪しからぬ奴だ、足を天にし背中を地に歩いて居る。一つ叱つてやれ……と、ワンと云うた途端に口に銜へて居た魚がバツサリと水の中へ落ちたと云ふ話があるだらう。恰度お前さまは橋の上の犬だ。水晶の水鏡、即ち高姫の靈にお前の醜い靈が寫つて何事も逆様に取られるのだぞよ。蟻蛙の膏を取る時には四方八方ガラスを立てた箱に入れて置くと、四方八方に自分の醜い姿が寫るので、自分の敵と思ひ、彼方へ突き當り、此方に飛びつき、終の果にはすつかり疲れて膏を出してカンピタンになつて死ぬものだ。この高姫が悪く見えるのは約りお前さまの靈が悪いのだ。

立ち向ふ人の姿は鏡なり

己が心を寫してや見む。

と云ふ道歌を考へて御覽なさい、皆人が悪く見えるのは自分が悪いからぢやぞえ。ても扱ても犬蛙人種と云ふものは仕方のないものだなア<sup>㊦</sup>シヤル<sup>㊦</sup>高姫さま、善言美辭の教だ<sup>を</sup>何時も仰有るが、随分惡言暴語を放出なさるぢやありませんか。それでは神の資格はゼロですよ<sup>㊦</sup>

高姫<sup>㊦</sup>それは又何と云ふ分らぬ事を云ふのだえ、最前からあれ程鏡の喩を引いて説明してやつただぢやないか。エ工鈍な身魂は困つたものだなア。高姫が惡言暴語するのはお前さまの靈が寫つて居るのだ。いやお前さまのためだ。此高姫は半鐘のやうなものだ。柔かく打てば柔かく響く、強く打てば強く響く、高く打てば高く響く、低く打てば低い音が出るのだ。お前さまが下らぬ口を叩くからこんな言葉が出るのだよ。お前さまがモ些と素直になり、長上を敬ひ、もつと柔しき言葉を使へば柔しくなるのだ、……此神は従つて來れば誠に柔しき神であるなれど、

敵對心てきたいこころで神かみの前まへに來きて見みよれ、鬼おにか蛇じやの相好さうがうになるぞや………

シヤルシヤル「モシ高姫たかひめさま、それや現界げんかいの理窟りくつぢやありませんか、至仁しじん至愛しあいの大おほ三口くち

ク様さまなら、惡人あくにんが來くれば尚可愛なほかあいがり、善人ぜんにんが來くれば又可愛またかあいがり、決けつして憎惡ぞうをの念ねん

をお持もちなさらないのが神様かみさまでせう。己おのれに敵てきする者ものに對たいして鬼畜きちくの相さうを現あらはし、

己おのれに従したがふ者ものには柔和にうわの相さうを現あらはすと云いふのなら、お前まへさまを尊敬そんけいすることが出で來き

ませぬわ。何どんな惡わるい者ものでも此方こつちが親切しんせつにしてやれば喜よろこんで従したがひ、キツト恩返おんがへし

をするものです。己おのれに従したがふものを愛あいし、敵てきするものを憎にくむのなら、それは自愛じあいで

あつて、八衢人やちまたにん足そくや、地獄界ぢごくかいの邪氣じやきのする業わざでせう。神様かみさまは決けつして憤慨ふんがいしたり憎ぞう

悪をしたりなさるものぢやありませんぞ。神様かみさまがもし憎惡ぞうをの念ねんを起おこしたりなさると

すれば、神かみ自體じたいが既すでに亡ほろびぢやありませんか

高姫たかひめ「工工こご、第一だいいち靈國れいこくの天人てんにんの申まをす事ことがお前等まへらに分わかるものか、モ些ちつと修業しうげふなされ。

器うつはが大おほきくなつたら此高姫このたかひめの申まをす事ことが明白はつきり分わかるだらう。夫それよりも早はやく四辻よつつじに出で

旅人たびびとを引張ひっぱつて來きなさい。こゝ毎まい日にち日ひに日にち結構けつこうな光陰くわういんを空費くうひして居ゐては、天地てんちの神かみ

様さまに勿體もつたいない、一人ひとりでも改心かいしんさせてウライナイ教けうの信者しんじやを拵こしらへねば、天地てんちの神かみ様に

濟まない。お前も此世に生れて來た甲斐があるまい。サア、トツトと四辻迄行つて來なさい」

シャル「高姫さま貴女も一緒に來て下さらぬか。又文治別とか云ふエンゼルがや

つて來たら困りますからなア」

高姫「エ工何と云ふ氣の弱い事を云ふのだい。文治別なんて、あんな者が千人や

萬人束に結うて來た所が、こたへるやうな生宮ぢやありませんぞや」

シャル「ハハハハハ、どこ迄も我執の念の強い人ですなア。山を越え、谷を越え

荆棘搔をしながら、のたくつて逃げたぢやありませんか。なぜ夫程偉いお方なら、

あのエンゼルを此處にじつとして居て凹ませてやらぬのですか」

高姫「エ工分らぬ男だなア。國治立尊様さへも謙讓の徳を守り惡神に世を譲つて

良へ退却なさつたぢやないか、そこが神様の尊い所だよ。此生宮も變性男子の系

統ぢやから、謙讓の徳を守つてエンゼルに花を持たせて逃げてやつたのだよ。救

世主の仁慈無限の精神が小盗人上りのお前に分らうか。「物言へば唇寒し秋の風」

と、可惜口に風を引かすより、ここは一つ沈黙を守らう。サア早く四辻に行つて

來なさい」

シャル「工仕方がありません、そんなら暫く行つて参ります。アア寒い事だなア。こんな事なら高姫さまの傍に居るのぢやなかつたに。今更ベル、ヘルの仲間に逆轉すると云うても寄せても呉れまい。毎日日亡者引をやつては撥ね飛ばされ、云ひ負されて耐つたものぢやないわ」

とブツブツ小言を云ひ乍ら、霜柱の置いた一本橋を怖さうに跨げながら出でて行く。

（大正一二・三・二五 舊二・九 於皆生温泉濱屋 加藤明子録）

## 第一〇章 轉香（一四六〇）

寒風吹き捲くる四辻に若布のやうな弊衣を纏うて唇まで紫色に染め、慄ひ慄ひ立つて居る一人の男はシャルであつた。シャルは道別の立石に凭れてブルブル慄

ひ乍ら一人呟いて居る。

シヤル「エー糞面白うもない。此風の吹きつ放しに罪もないのに立たされて……石地藏でもあるまいに……俺等は今でも血液が通つて居るのだぞ。高姫の婆奴、人を滅多矢鱈にこき使ひやがつて、馬鹿にしてやがる。此の寒いのに斯んな處に亡者引きに来る位なら矢張り泥坊でもやつて居た方が何程男らしいか知れやしないわ。水の流れと人の行末、變れば變るものだな。俺もバラモン教の軍人さまで公然と強姦もやり、強盗もやり、法螺も吹き、喇叭も吹いて来たものだが斯う零落れては、もう仕方がない。腹は空腹となる喉は渴く、着物は破れ蝨はしがむ、何處ともなしに身體は慄ひ出す、宛然地獄の様だワイ。一丈二尺の褌をかけた荒男がアトラスの様な面した婆にこき使はれて、アタ胸糞の悪い、糞面白うもない、ケツタ糞が悪いワイ。それにまだまだケツタ臭い事は、高姫の奴己の放れた糞小便を掃除せいと吐しやがる。金勝要の大神さまだつて雪隠へ落されたのだから、お前等が雪隠の掃除するのは結構な御神徳だ等と本當に馬鹿にして居やがる。實に糞慨の至りだ。だと云つて何處へ行く所もなし、八尺の體の置場に困つて居る



のだからチツトは氣に喰はいでも、あの婆に喰ひついて居るより仕方がないわ。  
エー糞忌々しい。誰かモ一人俺の云ふ事を肯く奴が来て呉れると雪隠の掃除をさ  
してやるのだが、来る奴来る奴、高姫と喧嘩して逃げて去にやがるものだから、  
宛然籠に水を入れて居る様なものだ。何時迄かかつたつて満足な信者は一人だつ  
て出来やしないわ。ウラナイ教か何か知らぬが教祖もし、役員もし、信者も一人  
で兼ねてるのだから婆も忙しいだらう。此間も信者が幾何あると聞いて見たら四  
十一人あると吐しよつた。よく考へて見ればアタ阿呆らしい、四十と云ふ意味は  
始終と云ふ意味だつた。今年で殆ど四十四年も布教してると云ひやがつたが、ま  
だ三人四人と信者が出来ぬのだから大したものだワイ。姑の十八ばつかり朝から  
晩まで竝べ立てやがつて、一人よがりの一人自慢、上げも下しもならぬ糞婆だ。  
年は幾才だと聞いて見たら四十九才だと吐しやがる。俺の見た所では、どうして  
も五十五六に見えるがヤツパリ年寄と見られるのが辛いと見えるワイ。何だか知  
らぬが「始終臭い」事ばかり吐しやがる。アタ辛氣臭いもう厭になつて了つた。  
誰かよい馬鹿野郎が出て来て俺の仕事を手傳つて呉れる奴があるまいかな」

と自暴糞になり四股を踏み乍ら一人唝鳴つて居る。そこへ向ふの方から寒さうな風姿をして稍俯向き氣味に破れ笠を被り臭氣紛々たる着物をつけ乍ら、やつて来た蒼白い中肉中背の男があつた。シャルは此男を見るより大喝一聲「待てツ」と叫んだ。男は此聲に驚いてハツと立止まり、少し尻を後へ出し、兩手を金剛杖の上へ上にキチンと載せ乍ら、男「何用でムいますかな」

シャル「何用でもない。一寸尋ねたい事があるのだ。貴様の姓名は何と云ふか」男「ハイ、私は元はアブナイ教の信者でムいました鱈口曲冬と云ひ、今は人間の一等厭ふ一等厭と云ふ偽君子の團體へ這入つて懺悔の生活をやつてる者でムいます。どうか小便壺、雪隠壺、塵芥場の掃除をさして頂けませぬだらうかな」シャル「ヤ、そいつは感心だ。大に吾意を得たりと云ふべしだ。實の所、俺の館はここ三月許り小便、糞は云ふに及ばず、汚い塵芥が庭の隅にかたためであるのだ。どうだ、掃除して貰ふ譯には行くまいかな」曲冬「謹んで掃除をさして頂きます。十分の活動を致しますから、何卒麥飯でも

宜いから饗んで頂きたいものです」

シャル「小便は「シシ」と云ひ、糞は「フン」と云ひ塵埃は「ジン」埃と云ふか

ら「獅子奮迅」の活動をやって見せて呉れ。さうすりや俺の師匠の八釜しやの高

姫も麥飯の一杯位は饗んで呉れぬ事もあるまい。兔も角、お前の働き次第だ。藝

は身を助けると云ふから屹度お前も高姫さまに重寶がられるだらう。サアこれか

ら一つ歸つて高姫さまに對して信者を造つたのを土産となし、俺の仕事を手助け

貰ふ事ともなり一擧兩得だ。マアこれで俺も一寸息が出来るかと云ふものだ。オイ

曲冬とやら、永らく俺の部下となつて雪隠の掃除だけ受持つて呉れ。何と懺悔の

生活と云ふものは重寶なものだのう」

曲冬「初稚姫さまは天刑病者の膿血を吸うて助けてやられた事があるでせう。糞

小便の掃除位が何ですか。人間は皆糞小便を喜んで喰つて居るのですよ。直接に

喰ふ奴は犬だけだけど間接に喰うのは皆人間です。糞たれては大根、蕪、稻、麥等に

かけ、その肥料で野菜が成長し、米麥が實るのだ。云はば間接の糞喰ひ、小便呑

み人間だ。糞の掃除位が何それ程汚いものか。喜んで汚い處の掃除をする心にな

らないと本當の善にはなりませぬよ。これが誠の神心ですからな。己の欲する所を人に施し、己の欲せざる所を努めて行はなくては懺悔の生活ではありませぬワ  
イ

シャル「イヤ感心致した。サ、来て下さい。お前の事業は何程でも溜つてる、随分好い顧客だよ」

曲冬「ハイ、有難うムいます」

と云ひ乍らシャルの後に従ひ冷い野分に吹かれ乍ら岩山の麓の茅家に導かれた。

シャルは斜になつた戸を、がたつかせ乍ら漸うに引き開け、

シャル「サ、曲冬さま、此處は大彌勒様の金殿玉樓だ。マア這入つて冷い茶なつ

と一杯飲つて下さい。モシ高姫さま、よい鳥を一羽生捕つて來ました。サア何卒

お前さまの大和魂で、好きすつぽうに料理して下さい。屹度此奴アお氣に入るか

も知れませぬぜ」

高姫「これこれシャル、結構な人間様を御案内し乍ら何と云ふ御無禮な事を申すのだ。何故善言美詞を用ひないのか。悪言醜詞は禁物だと、何時も云つてあるぞ

やないかい」

シャル「エ、酢につけ、味噌につけ、何とかかんとか叱言を云はねば氣の濟まぬ人ですな。此人は一等厭の曲冬さまとか云つて懺悔の生活をして居る偽君子ですよ。貴方の辨舌で一つ歸順させて御覽なさいませ。そして便所の掃除をさして呉れと仰有るのです。何とマア結構なお方もあればあるものですよ」

高姫「ア、曲冬さまとやら、そこは端近、マア圍爐裏の側へお寄りなさいませ。嘸寒かつたでムいませう。此婆は斯う見えても見かけによらぬ優しい者だから安心して下さい。そしてお前、懺悔の生活をしてると云ふことだが、懺悔せにやならぬやうな悪事をしたのかい」

曲冬「ハイ、これと云つて別に悪い事をしたやうにも思ひませぬが、人間と云ふものは知らず識らずの罪を作つてるものですから懺悔のために、人の一等厭な便所の掃除や塵芥場の掃除をさして頂き、其處邊を巡つてるのでムいます」

高姫「扨て扨て奇特な事だ。併し乍らよう考へて御覽なさい。便所の掃除をするのは女房や女衆の役ぢやありませんか。男は男としての立派な事業があるでせう。

それに何ぞや、鞆丸さげた男が卑怯未練にも便所の掃除をするとは、チト可笑しいぢやありませんか。お前さま等がそんな事をするものだから此頃の女中は皆増長して了ひ、「私は下女には来たが便所の掃除は約束外だ」と、自分の放いたもの迄主人の奥さまに掃除さす様になつたのも、皆お前等が悪いからだ。世界の男子が、何れも之も一等厭に這入り、便所掃除になつたら如何するのです。自分の放いた糞まで人に掃除させたり、又人の糞まで掃除して歩く様な不合理な罰當りの事が何處にありますか。それだから世間の人は一等厭の奴はド奴の糞奴計りだと云ふのですよ。何だか怪體な香がすると思へばお前の着物に尿糞塵の香が浸みこんで居る。地獄に籍を置いたものは鼻をつく様な堆糞の場所や便所塵芥場を喜ぶものだ。其臭氣をまるで高天原の天香の様に思つて居るのだから困つたものだ。鼻もそこ迄痲痺しては善惡美醜の區別もつかなくなり、却て樂かも知れない。併し乍ら折角神の分靈を貰つてる人間が醉生夢死の生活を送るのも勿體ない、自分の放いた糞は自分で掃除すれば宜いのだ。人の放いた糞まで掃除させたり、したりするものぢやない。他人に糞の掃除をさせるのは赤ん坊の間だ。又その糞

を掃除するものは赤坊を負うた母親か、子守の仕事だ。チツト考へて御覽なさい  
曲冬『さう一口にコキ下されては「便」明の辭があります。併し乍ら一等厭は  
一等厭としての主義綱領があります。どうか便所の掃除をさして頂き度いもので  
すな』

高姫『イヤイヤなりません。何と心得てゐる。ここの便所は普通一般の便所とは  
違ひますぞや。勿體なくも大彌勒様のお尻から出たお肥料様だ。そこへシャルの  
汚い奴も交つて居るが、然し此館にはシャルと云ふものが居りますから……ここ  
の便所なんか身魂の研けない人に構つて貰ふ事は出来ませぬ。中々大彌勒さまの  
便所の掃除をさして貰はうと思へば竝や大抵の事ぢやありませんぞや。餘程神徳  
を貰はなくちや出来ませぬ。そんな事云つて麥飯の一杯も饗ばれようと思つて  
のだらうが、此の辛い世の中に、誰がそんな糞奴に飯の一杯も食はす者がありま  
すかい。それよりもチツト日の出神の義理天上が申す事を腹へ締め込んで置きな  
され。さうすれば結構な出世が出来ますぞや。折角結構な人間と生れて便所の掃  
除をやつて居つては神様に對しても濟まぬぢやありませんか。お前さまの様な連

中が澤山出来て便所の掃除を引受けて下さるのは宜しいが、これが百年も将来に行つて御覽なさい。世間から特種部落扱ひをされて、便族と云ふ名が付きますぞや。さうすりや普通の人間と縁組も出来ませぬぞえ。宜い加減「テンコウ」して置くが宜しからう。特種部落の開祖になる積りだらうが、そんな事するより三千世界を助けるウラナイ教にお這入りなさい何程結構だか知れませぬぞや」  
曲冬「それもさうですな。實の所は厭で堪らないのだけど、喰はんが悲しさに人の厭がる便所の掃除をして其日の飢を凌いで居るのです。それでも世間は馬鹿者が多いと見えて一種の態のよい乞食を聖人だ、君子だと崇めて呉れますからな。新聞や雑誌に書き立てて褒めるのですもの、チツト位臭くても辛抱が出来たものですよ。併し乍ら天香宗の教祖様は表から見れば随分立派なお方ですが、ヤツパリ株を賣買したり、儲かりさうな鑛山を買占めたり、借つたものは何とか云つて返さず、取り込む事は随分上手ですよ。それでも上流社會から非常に褒めそやされ、澤山な書物が賣れるのですから、世の中は妙なものですな。兒島高德が櫻の木に「天香雪隠を空しうする勿れ、時に飯禮無きにしも非ず」と云つて、私の狂



祖さまの事を豫言しておいた位ですもの、餘り馬鹿にはなりませんませぬワイ」  
高姫「サ、それが暗がりの世の中と云ふのだよ。善人は悪とせられ、悪人は善人と推稱せらるる逆様の世の中だから、それで此度天から大彌勒様が、此地の上にお降り遊ばし、此高姫の肉體を宿として衆生濟度の爲にウライナイの道をお開き遊ばしたのだ、何と有難い事ではないかな。天香教とウライナイ教と何方が誠と思ひますか」

曲冬「天香教には永らく這入つて居りましたので大抵の教理は分りましたが、まだウライナイ教は何も聞いて居りませぬから、どちらが善いか悪いか、判断がつかませぬ。先づ御説教を聞かして貰つた上でお返事致しませう」  
高姫「成程、何程おいしいものでも食つて見ねば味の分らぬ道理だ。お前の云ふ事には一理がある。米の飯と麥の飯と食ひ比べて見れば、米の飯がうまいと誰も云ふだらう。此ウライナイ教は實は農業を基とする教だ。それだから北山村に農園を開いて種物神社を祀つてるのだよ。ウライナイ教の標を見て御覽なさい。八木と書いてあるでせう。八木は所謂米といふ字だ。米國から渡つて來た常世姫の教だ

からな」

曲冬 『日の出神さまの御紋に米の字とはチツト釣合ひがとれぬぢやありませぬか』  
高姫 『お前は考へが浅いから、そんな事を云ふのだ。』

日の出の日の字は朝日の日の字

米國の米の字は米と書く

臆て日の出の「まま」となる。

と云ふ歌があるだらう。此歌は日の出神の義理天上が世界の人間に知らず爲に作つて置いたのだよ。何と理のつんだ歌だらうがな。到底人間の作物ぢやありますまい。それだから日の出の神の云ふ事を聞いて居れば此世の中が「まま」になるのだ。分りましたかな」

曲冬 『何と言靈と云ふものは偉いものですな。よく理がつんで居りますワイ』

高姫 『エ、又しても、こましやくれた言靈なんて……何を仰有るのだ。言靈は變

性女子の緯身魂の云ふ事だ。ここは誠生粹の日の出魂の教を致す經の御用だから、  
言靈なんか云つて下さるな。【こと】と云ふ奴ア横に寝させられて、澤山な筋を竝  
べてピンピンシヤンシヤンと誤魔化す奴だ。ここは誠一筋を立通す善一筋の教だ  
から、その積りで居つて下さいや」

曲冬「イヤ、大きに有難う。こんなお話を何時迄聞いて居つても埒が明きませぬ  
から御免蒙りませう」

高姫「コレコレ、さう短氣を起さずにジツクリ落着いて聞きなされ。結構な結構  
な誠一厘の仕組を教へてあげますぞや」

曲冬「一厘も二厘も要りませぬ。左様なら」

と云ひ乍ら足早に門口さして逃げ出す。高姫は、  
高姫「此儘逃がしてなるものか、嫌でも應でも後おつ驅けて引捉へ、ウラナイ教  
の信者になさねば置くものか、シヤル、つづけ」

と云ひ乍ら家鴨の火事見舞の様な足つきでペタペタと内鰐足で後を追駆けて  
行く。曲冬は細長いコンパスに身も軽くトントントンと四辻まで引返し、北へ北

へと走り行く。

（大正一二・三・二五 舊二・九 於皆生温泉濱屋 北村隆光録）

第一章 鳥逃し（一四六一）

白髪交りの藁箒のやうな髪をサンバラに困に靡かせ乍ら夜叉のやうにペタペタと大地を鳴らせつつ四辻までやつて来た。見れば、最前きた天香教の曲冬は尻引からげトントンと大股に夜這星のやうに黒い禪を引きずり乍ら走つて居る。何程高姫が呼んでも叫んでも振り向かばこそ、驅け出す其勢に高姫も追つく事を得ず四辻に齒噛みをなし地團駄を踏んで、高姫「エイ残念やなア、これシャルお前が鈍馬だから折角出てきた鳥を逃がして仕舞つたのだ。なぜ知らぬ間に綱でも掛けて置かなんだのかい。」神が綱さへかけて置けば何程チリチリ悶へをしても離さんぞよ」とお筆に出て居るぢやないか

シャル「私は人間、貴女は神様でせう。人間が綱かけたつて何になりませう。私に不足を云ふより、なぜ日の出神様が綱かけなかつたのですか。その不足は聞きませぬ」

高姫「エ、よう小理窟を云ふ男だなア。なぜ絶対服従をせないのだ。一體妾を誰人と心得て居るのだい」

シャル「ハイ、誰人さまかと思へば矢張此方さまで△いました。此方さまかと思へば矢張高姫さま、高姫さまかと思へば義理天上日の出神の生宮、さうかと思へば底津岩根の大彌勒さま、大彌勒様かと思へば第一靈國の天人様、天人様かと思へば現界、幽界、神界の救主さま、救主さまかと思へば空助さまの奥様、空助さまの奥様かと思へば常世姫の御靈様、常世姫のお靈様かと思へば高宮姫様、高宮姫様かと思へば定子姫様、誰人が誰人やら、薩張見當がつきませぬワイ。矢張此方さまにして置きませうかい」

高姫「エ、仕様もない、何と云ふ事を云ふのだい。澤山の名を並べて、一つ云つたらよいぢやないか。繁文褥禮は流行りませぬぞや。そんな複雑な名を云はいで

も、もちつと單純たんじゆんに生宮いきみやさまとなぜ云いはんのかい。法性寺ほつしやうじの入道にふだうが運上うんじやうと取りに來くるぢやないか」

シャルシヤル「それでもシンプルめいしよつな名稱めいしよつでは、お前様まへさまのお氣きに入いりますまい。些ちつとでも長く云いふ程ほど、貴女あなたの御機嫌ごきげんがよいのですからなア。足曳あしびきの山鳥やまどりの尾をのしだり尾をの長々ながながしう云いふのが、どこともなしに價値ねうちがあるやうですよ。第一だいいち雅味がみがありますからなア」

高姫たかひめ「エエ、シンプルだの、複雑ふくざつだの雅味がみだのと何をガミガミ云いふのだい。そんな毛唐けたうのやうな言葉ことばは地ちの高天原たかあまはらでは用もちひませぬぞや」

シャル「それでも貴女あなた時々英語えいごを使つかふぢやありませんか」

高姫たかひめ「あれや英語えいごぢやない神世かみやの生粹きつすめのお言葉ことばぢや、此忙このいそがしいのにさう長く名なを云いはれると餘り氣分きぶんのよいものぢやない。お前まへも一つ云いうて上げようか、さうしたら味あぢが分わかるだらう。何處どこの奴やつかと思おもへば此處ここの奴やつだ。バラモン教けうの旗持人はたもちにん足そくかと思おもへば小盗人こぬすとだ。小盗人こぬすとかと思おもへば川かは陥はまりだ。川かは陥はまりかと思おもへば、死損しにぞこなひの八衢人やちまたにん足そくだ。八衢人やちまたにん足そくかと思おもへば、地獄ぢごくに籍せきをおいた亡者まうじやの魂みたまだ。亡者まうじやの魂みたまかと思おもへば

極道息子だ。極道息子かと思へば腰抜けた。間抜けに齒抜け、魂抜け野郎だ。魂抜け野郎かと思へば高姫の尻拭きだ。尻拭きかと思へば矢張シャルだ。オツホホ

シャル「どうも甚いですな、それ丈よう悪口が陳列出来たものですワイ。矢張お前さまは義理天上は嘘だ、金毛九尾の容器でせう」

高姫「定つた事だよ。金毛九尾と云ふ守護神は初めは悪だつたけれど、今度、高姫の悪が善に改心して、善に立ち歸つたのだから、三千世界の事は何でも彼でも皆知つて居るのだ」

シャル「成程、どこともなしに【九尾】九尾して居ますワイ。併し貴女は女だからよもや【キン】毛はムいますまい」

高姫「コレお前は此處にすつこんで居なさい、彼方から何だか出て来るやうだ。妾が一つ説教を、捉まへてするから、お前は決して口出しをしてはならぬぞや。此枯草の中に身を隠して聞いて居なさい。少し勉強せねば今日のやうに折角出て来た鳥を逃がしては何にもならぬからなア。サア早く引込んだり引込んだり」

シャル「それでは暫しほく蠡斯きりぎりすぢやないが草くさの中に引ひ込みます。長話ながばなしはおいて下ください、  
足あしが痺しびれますからなア」  
と云いひ乍ながら、ガサガサと萱草かやくさの中に潜もくり込んだ。幽かすかな聲こゑで宣傳歌せんでんかを歌うたひ乍ながら一ひと  
人りの男をとこがやつて來くる。

三千彦みちひこ「神かみが表おもてに現あらはれて 善神ぜんしん邪神じゃしんを立て別わかける

此世このよを造つくりし神直日かみなほひ 心こころも廣ひろき大直日おほなほひ

唯何事ただなにごとも人ひとの世よは 直日なほひに見直みなほし聞きき直なほす

三五教あななひけつの神館かみやかた 總務そうむの司つかさと仕つかへたる

東野別あづまのわけを慕したひつつ 自轉倒島おのころじまを立たち出いでて

戀こひに狂くるうた高姫たかひめが 恥はぢも人情にんじやうも知しらばこそ

眼まなこは暗くらみ耳みみは聾しえ 戀こひの惡魔あくまに囚とらはれて

所ところもあらうに聖場せいぢやうで あらむ限かぎりの醜態しうたいを

暴露ばくろせしこそ果敢はかなけれ 心亂こころみだれし高姫たかひめは



金毛九尾に誑られ  
泣く泣く館を立ち出でて

河鹿峠の急坂を  
風に裾をば煽られつ

太股迄も放り出して  
スタスタ下るスタイルは

地獄の町を通ひ居る  
夜叉の如くに見えにける

祠の森に立ち寄りて  
妖幻坊の曲者に

靈をぬかれて愚にかへり  
所在醜態演出し

妖幻坊の空助と  
手に手をとつて小北山

聖場に横柄面さげて  
詣でたところ月の宮

扉の中より迸る  
その靈光に肝つぶし

命辛々逃げて行く  
浮木の森に立ち寄りて

狐狸に誑られ  
初稚姫やスマートの

生言靈に怖ぢ恐れ  
妖幻坊と諸共に

心も暗き黒雲に  
乗りて逃げ出すその途端

如何はしけむ中空より  
眞逆様に顛落し

行方不明となりけり

嗚今頃は高姫は

此世にありて盡したる

驕傲尊大脱線の

道を辿りて中有界

どこかの野邊に潜伏し

道行く精靈に相對し

支離滅裂の教理をば

吹き立て居るに違ひない

吾は三千彦宣傳使

玉國別の師の君と

別れて一人テルモンの

神の館に立ち向ひ

悪人輩の企みをば

暴露し館の難儀をば

助けむために來りけり

此處はいづくぞフサの國

アンブラツク川の片傍

草茫茫と生え茂る

青野ヶ原と覺えたり

小鳥は唄ひ花匂ひ

天國淨土も目の當り

實にも愉快の心地する

ああ惟神々々

神の御靈の幸はひて

テルモン山の神館

一時も早く歸しませ

神のみ前に願ぎまつる

と歌ひ乍らやつて来る。高姫は餘り遠くて自分の事を歌つて居るのは氣がつか  
なかつたが、小鳥は唄ひ花匂ひ、青野ヶ原で云々と云ふ一句を聞いて、  
高姫「これだけ霜に痛んだ枯野ヶ原を、鳥が唄ふの花が咲くのと云ふのは狂人で  
はあるまいかな、うつかり相手になつて先方が狂人だつたら仕末がつかない。茲  
は一つ柔り出て様子を考へて見よう」  
と四辻に立つて居る。三千彦は漸く此處に進み來り高姫を見て、よう似た顔だと  
は思ひ乍ら、自分も八衢に來て居るとは氣がつかず、  
三千彦「モシ一寸お尋ね致しますが、波斯の國のテルモン山は、何方の方面に當  
りますかな」

高姫「ヘイ、あのテルモン山でムいますか、此處は浮木の森でムいますが、まだ  
随分遠いと云ふ事でムいます。そして貴方、テルモン山へ何御用があつてお出  
なりますか」

三千彦「ハイ、私は三五教の宣傳使でムいますが、テルモン山の館には大騒動が  
起つて居りますので、お助け申度いと思つて心を配つて居ます。併し乍ら、どう

道を踏み迷うたか知らないが、こんな所へ来たのですよ」

高姫「貴方は三五教でムいますか、それはそれは結構でムいますな。併しテルモ

ン山にはバラモン教の神様が祭つてあるではムいませぬか」

三千彦「ハイ、さうです」

高姫「テルモン山、……テルモン山はバラモン教の、それバラモン教の神館でせ

う。そして小國別と云ふ、酔でも蒟蒻でもいかぬ、梃でも棒でも槍でも鐵砲でも

いかぬと云ふ、誠に早狂暴無頼な、狂暴無頼な、神司が控へて居るぢやありません

ぬか。そんな者をお前、そんな者をお前はどうしてお前は助けに又、どうして助

けに行くのですかい」

三千彦「ハイ、つひ行がかりで後へ引くにも引かれぬ事が出来たのです。貴女は

失禮ですが、高姫さまぢやムいませぬか。お歸幽になつたと云ふ事を聞いて居ま

したが、矢張御壯健でウライナイ教をお開きでムいますか」

高姫「ハイ、そんな噂がムいますかな、高姫はこんなに丈夫でビチビチして居ま

すから御安心下さい。これから義理天上日の出神が説教を致しますから、一寸立

寄つて下さいませまいか」

草の中からシャルは顔を出し、

シャル「駄目だ駄目だ」

と云つては顔を隠す。

三千彦「モシ高姫さま、貴方の中からデクの坊のやうな者が變現出沒して居ます

が、あれは何ですか」

草の中から、

シャル「三千彦さま私も連れて行つて下さい」

と云ふ。

三千彦「ハテナ、何だか妙なものが草の中から私の名を呼んで居るやうです」

高姫「イエ、あれは九官鳥ですよ。此の原野には鸚鵡や九官鳥が棲んで居ますか

らチヨコチヨコああ云ふ事を云ふのです」

三千彦「へエ妙ですなア。此九官鳥は人間の姿をして居るぢやありませんか」

高姫「そりやさうでせうとも、化物の世の中ですもの。岩根木根立草の片葉迄も

言問ふ世の中ですから、些とは變化て出るのでせう。それだから日の出神が水晶の世に立直さうと思つて、高姫の肉宮を借り、御苦勞遊ばすのです」

三千彦「成程妙な事もあるものです」

草の中から、

シャル「變化の變化の變化武者、變化神社の高姫さま、變化の變化の變化武者、變化神社のシャルさま、ウツポツポー、ホーツク、ホーツクホーホー、ホホホ

ホー、ホーホケキヨ　ホーホケキヨ、ケキヨ　ケキヨ、ニヤーン、モウー、ヒンヒンヒン、ワンワンワン、ウーウーウー、キヤツ　キヤツ　キヤツ、チウチウチ

ウ、キユツ　キユツ　キユツ、ウツポツポ、アハハハハハ」

三千彦「何とマア變化れるものですなア、こんな所に居ると何が出て来るか知れませぬ。左様なら御免を蒙ります」

とスタスタ立つて行かうとする。高姫は大手を擴げて、

高姫「待つた待つた、此關所は容易に潜る事は出来ませぬぞや、潜り度くば高姫の云ふ事を一應腹へ確りと締めこんで行きなさい、後で後悔する事が出来ませぬぞ

や  
』

三千彦 『ヤ有難う。併し私は少し急ぎますから今度又悠くり聞かして頂きませう』

シャル 『モシモシ宣傳使様、こんな婆に相手にならず、トツトと行きなさいませ。

さうして私も何卒連れて行つて下さい。我が強い仕方のない婆さまですよ』

三千彦 『アアお前が九官鳥だつたか、そんな所に何をして居るのだ』

シャル 『ハイ、鷹の命令によつて九官鳥此處に新聞の【きうかん】（休刊）して

居ました』

高姫 『こりやシャル、何と云ふ事を申すか。もう了見せぬぞや』

とグツと胸倉を取り、喉元をグウグウ押へつける。シャルは目を白黒させながら

苦しさに手足をバタバタと藻掻いて居る。三千彦は見るに見兼ね、高姫の頭髪を

グツと握つて引き倒した。同時にシャルは起き上り、

シャル 『モシ宣傳使様、サ早く参りませう。私が何處へでも案内致します。こん

な婆に相手になつて居ては耐りませぬからなア』

と云ひ乍ら、スタスタと駆け出す。三千彦は、

高姫様左様なら、悠くり草の褥で一休みなさいませ」  
と青草茂る田圃道をスタスタと進み行く。高姫は齒ぎしりし乍ら恨めし氣に二人の姿を見送つて居た。

シャルの目には今迄寒風吹き荒む枯野ヶ原と見えて居たのに、三千彦に遇つてから其處等一面が春野のやうになり、鳥唄ひ、花匂ふ光景が目に入るやうになつた。シャルは嬉々として三千彦の後になり先になり、北へ北へと進み行く。

(大正一二・三・二五 舊二・九 於皆生温泉濱屋 加藤明子録)

## 第一二章 三狂(一四六二)

三千彦はシャルと共に小聲にて宣傳歌を歌ひ乍ら、八衢街道とは知らず現界の道路を通過する氣分にて進み行く。八衢の關所には例の如く赤面、白面の二人の守衛が儼然と控へて居る。見れば一人の男が赤面の守衛に何事か調べられて居た。



赤「その方の姓名は何と申すか」

男「ハイ、私は鰐口曲冬と申します」

赤「其方は何か信仰を有つてゐるか」

曲冬「ハイ、別にこれと云ふ信仰もムいませぬが、神儒佛三教を少し許り嚙つて

居ります」

赤「其中で何教が一番お前の心に適したか、否徹底して居たと考へたか」

曲冬「ハイ、初めは一生懸命に佛教を研究致しました。さうした處が何處に一つ

據る所がないので止めましてムいます。要するに佛教は百合根の様なもので、一

枚々皮を剥いて奥深く進みますと、何にも無くなつて了ひます、所謂佛教は無

だと思ひます。能書計り澤山竝べ立て、まるで藥屋の廣告見た様なものですから

な。賣藥の廣告ならば「此藥は腹痛とか、疝氣とか、肺病に用ゆべし。又日に何

回服用とか、湯で飲めとか、水にて飲めとか、食前がよいとか、食後がよいとか、

大人ならば何粒、小人ならば何粒、何才以下は何粒」と御叮嚀に服用書が附いて

居ますが、佛教の經典は只觀音を念じたら惡事災難を逃れるとか、阿彌陀を念じ

たら極樂ごくらくにやると書いてあるのみで、八萬四千はちまんよんせんの經卷きやうくわんも何處どこにも其用法そのようほうが示しめしてないので駄目だめだと思おもひました」

赤あか「お前まへは靈界れいかいの消息せうそくを洩もらしたる佛敎ぶつけうに對たいし尊敬そんけい歸依きえの心こころを捨すて、なまじひに研究けんきう等などと申まをしてかかるから、何なんにも掴つかめないのだ。靈界れいかいの幽遠いうゑん微妙びめうなる眞理しんりが物質しつがいの法則はふそくを基礎きそとして幾萬年いくまんねん研究けんきうすると解決かいけつのつく道理だうりがない。暫しばらく理智りちを捨すて、意志いしを専もつばとして研究けんきうすれば神かみの愛あい、佛ほとけの善ぜん、及び信しんと眞しんとの光明くわうみやうがさして來くるのだ。佛敎ぶつけうがつまりまらない等などと感かんずるのは、所謂いはゆるお前まへの精神せいしんがつまりまらないからだ。佛ほとけの清きよきお姿すがたがお前まへの曇くもつた鏡かがみに映うつらないからだ」

曲冬まがふゆ「さう承うけたまはれば、さうかも知しれませぬが、如何どうも分わかり難にくうございます」

赤あか「人間の分際ぶんざいとして佛ほとけの御精神ごせいしんを理り解かいしようとするのが間違まちがひだ。佛ほとけは慈悲じひ其そのものだ、至仁しじん至愛しあいの意味いみが分わかれば一切いっさいの經文きやうもんが分わかつたのだ」

曲冬まがふゆ「ア、さうでございましたか。それは、偉えらい考かんがへ違ちがひをして居をりました。之これから一ひとつ研究けんきうをやつて見みませう」

赤あか「駄目だめだ。二ふたつ目めには研究けんきう々々けんきうと口癖くちくせの樣やうに申まをすが、お前まへの云いふ研究けんきうは犬いぬに灸やいと

だ。ワンワン吠猛るばかりが能だ。止めたら宜からう。左様な心理状態では到底佛の御心を悟る事は出来ない。それから次は何を信仰したのだ」

曲冬「ハイ、別に信仰は致しませぬが、やはり聖書を研究致しました」

赤「舊約か、新約か」

曲冬「勿論舊約でムいます」

赤「何か得る處があつたか」

曲冬「ハイ、賣る處も買う所もムいませぬ。これもヤツパリ私の性に合ひませぬので五里霧中に逍遙ふ所に、或人の勧めによつて三五教に入つて、可なり眞面目に研究して見た所、どうも變性女子の言行が氣に喰はないので、弊履を棄つる如く脱會し、今は懺悔生活に入つて居ります」

赤「その方は靈界物語の筆寫迄やつたぢやないか。直接に教示を受け乍ら、分らぬとは扱ても困つた盲だな。矢張研究的態度を以てかかつて居るからだ。結構な神の教を筆寫し乍ら、ホンの機械に使はれたやうなものだ。さうして幾分か信ずる處があつたのか」

曲冬「ハイ、女子の方は幾分か信じて居りましたが、然しこれは宜い加減なペテ  
ンだと考へて居りました。それよりも變性男子の神諭に重きを置いて居つた所、  
其原書を見て餘り文章の拙劣なのに愛想をつかし、信仰が次第に剥げて了ひまし  
た」  
赤「馬鹿だな。神の教は文章の巧拙によるものでないぞ。文章なんかは枝葉の問  
題だ、その言葉の中に包含する密意を味ふのだ。目はあれども節穴同然、耳はあ  
れども木耳同然、舌はあれども數の子同然、鼻はあれども節瘤同然、そんな事  
三五教が善いの、悪いの、男子がどうの、女子がどうのと云ふ資格があるか。よ  
くも慢心したものだのう」  
曲冬「別に慢心はして居りませぬ。世界の人間に宣傳しようと思へば信仰も信仰  
ですが充分研究を遂げ、これなら社會に施して差支ないと云ふ所まで調べ上げね  
ば社會に害毒を流しますからな。云はば社會の爲に忠實なる研究ですよ」  
赤「お前は未だ我執我見がとれぬからいけない。異見外道、自然外道、斷見外道  
と云ふものだ。そんな態度では何處迄も神様は眞理を悟らして下さらぬぞ。神様

は愚なるもの、弱きもの、小さきものをして誠の道を諭させ玉ふのだ。決して研究的態度を採る様な慢心者には、密意は告示しなさらぬ。お前は大學を卒業して一廉學者の積りで居るが、其學問は八衢や地獄では一文の價値もない。いや却て妨げとなり苦惱の因となるものだ。お前の兩親も困つた事をしたものだな」

曲冬「お前は門番の癖に文士に向つて偉さうに云ひますが、日進月歩文明の世の中に學を排斥するとは以ての外ぢやありませんか。國民が残らず無學者であつたなら皆外の文明國に奪られて了ふぢやありませんか。人文の發達を圖り、國威の宣揚を企圖する爲には、どうしても大學程度の學問がなければ駄目ですよ。お前等は僅か小學を卒業した位だから世間の事に徹底して居ない。それだからポリス代用の門衛をして居るのだ。到底拙者の論説に楯突く事は出来ずまい。何科あつて調べらるるか知らぬが、もつと確りした分る方と呼んで来て下さい。知識の階段が違つて居るからお前さまには分りませんまい」

赤馬鹿を云ふな、此處は靈界の八衢だ。博士も學士も皆出て来る所だ。無學でどうして此門番が勤まるか。お前等は自然界の下らぬ學説に心身を蕩かし、虚偽

を以て眞理となし優勝劣敗弱肉強食の制度を以て最善の方法と考へて亡者だから到底眞理の蘊奥は分らないのだ。お前のやうなものが靈界へ來ると譯の分らぬ理窟を云つて精靈を汚すから、ここで現界で研究して來た下らぬ學術を皆剥奪してやらう」

曲冬「コレ赤さま、お前は發狂してるのか、但は酒に酔うて居るのかい。ここを靈界の八衢だ等と、それは何を云ふのかい。靈界や八衢や地獄があつて堪りますかい、人間は子孫を残して死ねば、それ迄のものだ。チツト哲學的知識を養うて置きなさい。社會の落伍者となつて遂に門番も勤まらなくなりませよ」

赤「門番が、それ程、其方は賤しいと思ふのか。便所の掃除や塵捨場の掃除は如何だ。それの方が矢張尊いのか」

曲冬「さうですとも、大慈大悲の心を以て人の嫌がる事を喜んでするのが、人間の人格を向上する所以です。便所の掃除する者や塵の掃除する者が無ければ、世の中は尿糞塵の泥濘混濁世界となるぢやありませんか。それで私等は伊吹戸主の神様の御用をして居るのだ。汚いものを美しくする位神聖な仕事はありますまい。

わたしは賤しい仕事とも汚い商賣とも思つて居りませぬ」

赤「ア、さうか、それではお前の最も愛する處へやつてやらう。地獄には塵捨場もあれば堆糞の塚も澤山にある。娑婆の亡者がやつて来て腐肉に蠅が集る様に喜んで嗅いで居る。現世にある時の所主の愛によつて身魂相應の處に行つたが宜からう。夜もなく冬もなき天國に於て、總ての神の御用に仕へまつり無限の歡喜に浴するよりも、其方は臭氣紛々たる地獄道へ行くのが得心だらう。サア遠慮は要らぬ、トツトと行つたが宜からうぞ」

曲冬「はてな、さうすると此處は矢張靈界ですか」

赤「定つた事だ。靈界か現界か分らぬ様な亡者が如何なるものか。それだから心の盲と云ふのだ」

曲冬「然らばどうか天國へやつて頂き度いものです」

赤「マアここで或一定の時間を経なくては、お前の様な汚れた魂は直に天國にやる事は出来ない。先づ外部的要素をスツカリ取らなくてはならぬ。現世に於て心にもない事を云つたり、阿諛を使つたり、體を糞したり、種々とやつて來た其外

念をスツカリ取り外し、第二の内部状態に入り、内的生涯の關門を越えるのだ。  
内的とは意志想念だ。果してその意志が善であり眞であれば天國へ上る事が出来るであらう。併し乍ら内的状態になつてからエンゼルの教を聞き、其教が耳に這入る様ならば天國へ行く資格が具備してゐるなり、如何しても耳に這入らねば地獄行きだ。之を第三状態と云つて精靈の去就を決する時だ」  
曲冬「へー、随分難しいものですな。矢張天國も地獄もあるものですか」

斯く話す所へ高姫は皺噺聲を張り上げ乍ら、

高姫「オーイ、三千彦、シャル、待つた待つた。云ひ度い事がある」

と天鹽昆布の様になつた帯を引摺り乍ら走り來り、

高姫「こら、シャル、恩知らず奴、妾が此三千彦の極道に引倒され、苦しんでゐる間に悪口をついて逃げて來たぢやないか。コレコレお役人さま、此奴は悪黨者でゐます。義理天上が直接成敗する處なれど神界の御用が忙しいから、お前さまに任すから厳しく膏をとつてやつて下さいや」  
赤「ヤ、お前は高姫ぢやないか。靈界へ來て迄噪やいで居るのか。モウいい加減



に外部ぐわいぶ的狀態ていきじやうたいから離はなれたら如何どうだ。一年いちねんにもなるのに何なんと澁しぶと太とい奴やつだな〃

高姫たかひめ 〃 へん、よう仰おつしや有ありますワイ。一年いちねんにならうと二年にねんにならうとお構かまひ御免ごめんだ。

いつやらも柰助もくすけさまを隠かくしやがつて、量見れうけんせぬのだが何なにを云いつても大慈だいじ大悲だいひの大おほ

彌勒みろくさまの生宮いきみやだから、大目おほめに見みて居ゐるのだ。グヅグヅ申まをすと此生宮このいきみやが承知しょうち致いたさ

んぞや〃

赤あか 〃 白しろさま、此婆このばアさまは、邪魔じやまになつて仕方しかたがないから何處どこかへ突つき出だして下くだ

さい〃

高姫たかひめ 〃 へん、お邪魔じやまになりますかな。そりや、さうでせう。誠まことの神かみの言葉ことばは悪人あくにん

の耳みみには、きつう應こたへませう。お氣きの毒様どくさま乍ながら此生宮このいきみやは世界せかい萬民ばんみん救濟きうさいの爲ため、チツ

トお耳みみが痛いたうても云いふ丈だけ云いはして貰もらひませう。彌勒みろく様の因縁いんねんを知しつて居ゐますか、

一厘いちりんの仕組しぐみが分わかりますか、エー、よもや解わかりますまい。へん、一厘いちりんの仕組しぐみも分わか

ぬ癖くせに偉えらさうに云いふものぢやないわ〃

赤あか 〃 白しろさま、早はやく何處どこかへやつて下ください〃

白しろ 〃 コレコレ高姫たかひめさま、ここは八衢やちまただからお前まへは早はやく何處どこかへ行いつて下ください。職しよ

務くむの邪魔じやまになりますからな」

高姫たかひめ「コウリヤ白狐しろぎつね、お前は赤狐あかぎつねの云ふ事ことを聞いて此日このひの出神でのかみを放出ほりださうとするのか。ハテ悪い量見れうけんだぞえ。よう考へて御覽ごらんなさい。天地てんちの間あひだは何一つ彌勒みるくさま様のお構かまひなさらぬ處ところはないぞえ。お土つちとお水みづとお火ひの御恩ごおんを知しつてますか。その本もとを掴つかんだ底津岩根そこついはねの大彌勒おほみるくさまを何なんと心得こころえてゐる。扱さても扱さても盲程めくらほど困こまつた者は無ないワイ。ヤ最前さいぜんから怪體けたいな男をとこが立つて居をると思おもつたが、お前はアブナイ教けうの菊みつ石彦ちやひこだな。先程さきほどは大きに憚はばかりさま、ヨー突き倒たふして下くださつた。コレコレ赤あかに白しろ、日ひの出神でのかみが吩咐いひつける。此菊石彦このみつちやひこは此生宮このいきみやを引倒ひきたふした悪人あくにんだから一つきつい制敗せいばいに遭あはしなさい。屹度きつと申付まをしつけて置おきますぞや」

白しろの守衛しゆゑいは止やむを得えず、棕櫚しゆろ箒ばうきを以もつてシャル、高姫たかひめの兩人りやうにんに向むかつて掃出はきだした。二人ふたりは驚おどろいて雲くもを霞かすみと南みなみを指さして逃にげて行く。

三千彦みちひこ「モシ、門番もんばん様、ここは實際じつさいの靈界れいかいでムいますか」

赤あか「ハイ、さうです。貴方あなたはアンブラック川がはへ悪者わるものに縛しばられ投なげ込まこれなかつた一刹那いちせつな、氣絶きぜつなかつた爲ため、精靈せいれいが此處ここへ遊行いうかうして來きたのですよ。神かみの化身けしんのスマー

トと云ふ義犬が矢場に川に跳び込み、貴方の死骸を啣へて堤へ引上げ、縛を解いて今一生懸命に貴方の肉體に對し介抱をして居ります。聽てスマートフォンが迎へに来るでせうから一緒にお願いなさい。まだ此處に来る時ではありません。そしてテルモン山に悪者が跳梁つて居ますから充分注意して臨まねばなりません。そしてテ

三千彦「さう承らば幽かに記憶に浮んで來ます。矢張私は溺死したのです。かいな。靈界と云ふ所は現界と少しも違はない所です。一つ不思議なのは、あの高姫さまは命がなくなつたと聞いて居りましたのに随分えらい脱線振り、あの方も矢張靈界に居られるのですか。」

赤「まだ現界に三十年許り生命が残つて居りますが、餘り現界で邪魔をするので、時置師神様がお出になり、伊吹戸主の大神に願ひ遊ばして、三年が間中有界に放つてあるのでムいます。三年すれば屹度外の肉體に憑つて再び現界で活動するでせう。今の精神で現界に行かれちゃ、やりきれませぬから、あと二年の間に自分の修業をさして現界に還す積りです。」

三千彦「成程、何から何まで、神様のなさる事はよく行き渡つたものです。併

し乍ら三年の後はには高姫の肉體は最早駄目でせう」

赤「三年の後に生命盡きて靈界に来る肉體がありますから、其肉體に高姫の精靈を宿らせ、残り三十年を現界で活動させる手筈となつて居ります」

三千彦「ア、さうですか。三年先になれば誰かの肉體に憑つて脱線的布教をやるのですな、困つたものですな」

赤「もう已に一年を經過したのだから、後二年ですよ。あの我執我見を此二年の間に何とか改良せねばならぬのですから、靈界に於ても大變手古摺つて居ます。

今は岩山の麓に小さき家を建てて一人暮しをして居ますが、マア一人で暮して居れば餘り害がないから大神様も大目に見てゐるのでですよ。エンゼルが行つても減らず口計りたたいて、受け付けぬから困つたものです。人間の精靈も、あれ文け我執に固まつて了つては仕方無いものですワイ」

斯く話す時しも南の方より宙を跳んで走り来る一頭の猛犬、「ウーウー、ウワツウワツ」と二聲三聲高く叫んだ。此聲にハツと氣がつき四邊を見れば今迄の八衢の光景は影もなく消え失せ、アンブラツク川の堤の青芝の上に横たはつて居

た。側には猛犬スマートが行儀よく坐つて嬉しげに三千彦の顔を眺め尾を掉つて居る。テルモン山の方を眺むれば黒煙濛々として立ち上り黒雲の如く空を封じて居る。月は黒煙の間に隠顯出沒しつつ足早に走る如く見えて居る。

(大正一二・三・二五 舊二・九 於皆生温泉濱屋 北村隆光録)

### 第一三章 惡醉怪(一四六三)

ワックスは父の病旦夕に迫り、嬉しうもあり悲しうもあり、大事の嬢を死なして同時に美人の藝者を後連れに貰うたやうな、悲喜交々の體であつた。其處へ、エクス、ヘルマンの二人が幾度とやくなつて来て、金を「むし」り取り、今又大枚六百兩強奪して立ち去り、三十日の後には再び無心に来ると下駄を預けて歸つたので、心も心ならず、何とかして強力なる團體を造り、二人の害を免れむものと苦心慘憺の結果、無い智恵を搾り出して惡醉怪なるものを編み出したのである。

そして一方にはアンブラック川に投げ込んだる、三五教の三千彦が、スマートに助けられ、何處かに姿を隠したと云ふ事を聞いて心も心ならず、今の中に強力なる團體を組織し、三千彦を威喝し又自分の悪事の暴露したる時は、この團體の力を以て防がむと千思萬慮の結果、同志を糾合して本會を設立したのである。本會の敵とする所は三千彦のみならず、水平會をも唯一の敵と見做し、弱きを挫き強きに従ふと云ふ、奇妙奇天烈な結社である。

ワックスは創立委員長としてテルモン山の議事堂に集まり、オークスを臨時癡爺として開怪の辭を朗讀せしめたのである。今左に開怪の辭と縮辭、竝に挨拶を摘記する事にした。アア叶はぬから靈幸倍坐世。

弱きを挫き強きを助く、天晴男の悪酔怪

癡爺の縮辭と怪長の曖擦

大テルモン國、悪酔怪、スマネーケン凡夫發怪色は、鬼報の通り、二重慘日午後一爺より待合に於て開催されたが、尾皮怪長の辭、竝に癡爺の縮辭は左の通り

であつた。

### 開怪の辭

隔靴、竝に頭搔位の臨場を忝なふし、怪員笑死の出席を得、茲に大テルモン國、惡醉怪スマネーケン凡夫發怪式を狂行するに至りたるは金擧とする所也。思ふに我テルモン國は一大蚊屬國にして、バラモン神祖以來歴代盜を垂れ蠻民を撫育し、化身哀哭の心情を發露し上下不和もつて辛うじて國家を支持し國威を中外に失墜し、烈國平和の攪亂をなす。これ我國の情弊にして、宇内に冠絶する所以なり。然るにバラモン軍と、三五軍との大戦以來、死葬怪惡化の影響を受け、仁義道德漸く廢れ、盛んに弱肉強食行はれ、社會の秩序全く紊亂せむとす。加ふるに物質的卑吝の發達と學研的陋説の横行とは正にテルモン國の人民を犯して今や正に解亂せむとす。外に國際状態を案ずるに、其實力的壓迫の過重に堪へ得るやの疑懼あり。内憂外患交々至る現狀は上下三十五萬年未だ嘗て見ざる鬼期を目睫の間に控へたるものと言ふべし。吾、徳、學あり、智あり、財あるなし。併し榮位を有

すと雖も、バラモン神祖より享受せるバラモン魂は茫漠として存す。此發露によりて、金權に屈するの氣骨を有す。同情に泣く涙を有せず。時勢を慨する熱血なく、獻身奉公の仁侠を有せず、斯の如き不正意をもつて立つて時患を救濟すべからざる時の來れるものと覺悟す。これ大テルモン國、惡醉怪の生れたる所以なり。スマネーケン同志之に狂鳴し、力を分ち、心を二つにして奉公の實を上げざらむとす。幸に隔靴竝に頭搔位の御援助と會員一同の御贊助を得て、呱呱の聲を上ぐるを得たるは、金塊禁ずる能はざる所なり。希はくは怪員諸氏は一層自製發糞もつて凡怪の臭意、目的の貫徹に務められむ事を鬼望す。敢て心情を披瀝して謝辭を述べ、開怪の爺とす。

バラモン始終苦念慘喝慘重慘日

拙立異淫長ワックス

### 癡爺縮辭

茲に惡醉怪はスマネーケン凡夫拙立成り、凡日をもつて發怪式を擧げられたり。餘も此發怪式に列し、一言縮意を表し、併せて諸怪を述べる鬼怪を得たるは最も



欣鬼に堪へざる所なり。思ふに吾テルモン國は自在天、大國彦命建國以來三十萬年連綿として萬古不易ならず。世界無比の動亂國として國光を宇内に失墜し、國辱を海外に發揚し今や世界最小弱國の班に列するに至る。是素より自在天神祖の守護の厚からざる所にして、國民上下不一致の哀哭の死状と僞勇彷徨、死誠とを以て我民族精神となし、不誠意哭家の隆盛に貢獻せざりしもの與りて力ありと云はざるべからず。然るに今回、河鹿峠の戰鬥の結果として彼我共に異常の變革を呈し、死想怪又著しく混亂し甚しきは過劇なる死想を助長し、我國も亦此死想の大根元となれり。事の理非曲直物の正邪善惡を極めずして附和雷同し、この國體と相容る所の不完全なる死想に感染し、以て國家社會の秩序を亂し、バラモン國家の本義を忘るべからず。殊に經濟的の變動は勞働問題を惹起し、勞資の關係を紛糾せしめ、其協調を破り、従つて人心を不安に陥れむとする情勢を呈するに至りしは、誠に偉觀とする所なり。此時に災し憂國の士相計り、バラモン國惡醉怪を組織し、正義公道を經とし、仁俠死誠を緯とし、同身一體結束を固くし、以て時弊を救急し、萬邦無比の動亂、國を毀損する如き、失態あるべからず。狐

狗仔眠副の増進を計る事に努力せざらむ事を期し、既に死想團體として無力なる地歩を占むるに至りしはバラモン國の爲め慶賀に堪へざる所なり。由來我スマネーケンたる、神代に於てバラモン神の世を統治し、惡政を布き給ひし以來邪智の念深く、加之テルモン山麓の一角に僻在するを以て一般の民風質素剛健ならず、輕舉妄動の風あり。産業怪の葬儀の如き又多く顯現し、勃發し、動もすれば近時世の風潮に逆らひ、頓幸微風、道義觀念等漸次廢頹の傾向を示したるは實に我國體の爲に金擧とする所なり。今や同憂の士を相鳩合しバラモン國、惡醉怪スマネーケン凡夫を葬説して天下惑亂の主義綱領を體し、大に濁世害民の實をあげむとす。誠に時期に適したる愚擧にして、其效果蓋し甚大なるものあるべしと信ず。希はくは怪淫妾窳其責任の重且つ大なるを思ひ、自重自愛、苟くも本怪の臭意に反する事なく、不同心、不協力、不確乎、不拔の精神をもつて凡怪の目的を達成し、幽醜の鼻下を上ぐる事に災前の努力を致し、もつて國家に貢獻せざらむ事を望む。終りに凡怪不健全なる不發達と怪淫妾窳の不健康を祈る。聊か蕪辭を述べて縮辭となす。

バラモン國始終苦念慘喝慘重慘日

スマネーケン癡爺 重死位寤慘倒 田柄屁唸

ワツクスは、式を無事に終り一場の演説を試みた。

ワツクス「皆さま今日は御多忙中に關はず賑々しく御來會下さいまして、發  
者身に取り恐悅至極に存じます。就ては、開怪の辭に述べました通り、大バラモ  
ン國の主義主張に則り、弱肉強食を眞理と認め、弱きを挫き、強きに従ふ時代思  
想を遺憾なく發揮したものであります。例へば此處に三五教の宣傳使が一人現は  
れたと致しますれば、それは果して強者でゝいませうか。何事も多數決を尊ぶ世  
の中、吾々會員は無慮數百名、敵は唯一人でゝいます。如何に強いと云うても多  
數には勝てませぬ。夫故三千彦の宣傳使は弱者でゝいます。故に宮町町民の爲に  
手足を縛られ、アンブラツク川に投げ込まれたのはバラモン國の傳統の教義とし  
て最も尊ぶべき行爲と思ひます。然るに又彼三千彦は四足に命を救はれ、此テル  
モン山の何れにか潛伏致して居る形跡がありますれば、本會の規則により、見

け次第容赦なく縛りつけ、今回は石を括りつけ放り込まれたいものでムいます。拙者の如きはテルモン山の神館に於ては家令の倅として最も強きものでムいます。その最も強き者に對してエキス、ヘルマンなどの弱者が折々金の無心に參り、駄々を捏ねまする故、もし今後そんな事を致した時には會長の私から、會員諸君に通知を發しますから皆さま悪酔怪設立の趣旨に従つて速にお驅つけ下さらむ事を悪酔怪の規則によつてお願いして置きます」

エキスは此時群衆の中より、怒髪天を衝いて現はれ來り反り身になつて、エキス「皆さま、今ワツクス殿が述べられました通り、弱きを挫き強きに従ふが本會の趣旨たる事は御存じでせう。一人の男が二人の男に脅迫され、命よりも大事な六百兩の金をおつ放り出し、命を助けて貰うたものがありとすれば、皆さまどちらが強いと思はれますか、又二人と一人とは、何方が強いと思ひますか。本會の主義精神に基いて拙者等兩人が強者なる事を認め、拙者等兩人がワツクスの館に押寄せたる時は、何卒御援助を願ひます。此のワツクスと云ふ奴は、宮町の町民を馬鹿に致して居る人犬でムいますから、皆さま御用心なさいませ。家々の

大切な寶をあの騷動に紛れ盗ませたのはワックスでムいますよ。其竊盜の衝に當つた強者は此處に二人許り顔を竝べて居られます。これは皆様の御判断に任す事に致しませう」

聴衆の中より、

「オイ、エキス、それや本當か、よもや嘘ではあるまいな」

エキス「滅相な、何程惡酔怪だと云つて、そんな見え透いた嘘が申されませうか。寶の泥坊は全くワックス以下兩人の仕事でムいます。そして其盗まれた品はテルモン山の鳩の岩窟にすつかり隠してムいますから、嘘と思はれるなら皆さま行つて調べて御覽なさい」

ワックスは二つ三つ咳拂ひをしながら、

ワックス「皆さま、エキスの言葉に誑されてはなりません。現在寶の隠し場所を知つて居る以上、御本人が盗んだに相違ムいませぬ。本人が盗まぬのに知つて居る筈がありますまい」

惡酔怪と稱する一同は忽ち總立となり、

一同「ワックスを撲れ、エキスを殺せ」と猛り狂うた。

此騒ぎにワックス、エキス、オークス、ビルマは細くなつて、テルモン山の山奥指して一散に驅出した。そこへ、エルが鞆丸を押へ乍らエチエチと演壇に登り來り大喝一聲、

エル「皆様お静まりなさいませ、貴方は悪酔怪員ぢやありませんか。ワックス様を初め其外の方々がどうしてそんな事をなさいませう。發會式の餘興に皆さま方の肝玉を試さむと思ひ故意にあんな事を云うて喧嘩をして見せられたのです。皆さまこれから鉢巻をして腹帯を締め、弱きを挫き強きに従ふの大精神になつて貰はなくてはなりません。今のワックス、エキスの争ひは八百長ですから、本當にしてはなりません。それよりもバラモン教の聖地に、幾度となく入り込み來る三五教の宣傳使を防ぐために、貴方方のお力を頼まねばなりません。其爲に本會を組織したのでムいます。水平會などを相手にするのが目的ぢやありませんか。皆さまは非常な特權を與へられて居る事を知つて居ますか」

群衆の中より、

「その特權とは何だ。詳細に説明を願ふ」

エル「其特權と申すのは表面には申されませぬが、月の國、ハルナの都の大黒主様より、烏鷺の勝負の默認を得て居るのでムいます。それ故晝間襦袢を着てウロウロ致し、ウロをうつて居ても見て見ぬ風をするから夫が第一の特權です。皆さ  
ま是から惡醉怪の萬歳を三唱し、惡醉踊りでも盛んにやつて本會の創立を心から祝して下さいませ。酒は弱者から徵發して來たのが澤山にムいますから」

一同「ウロー、ウロー」

と云ひ乍ら、荒くれ男が、毛脛を出して縦横十文字に踊り狂ひ、議事堂は忽ち床墜落し、數百の鼠が驚いて一生懸命に戸外に逃げ出し、

「クウクウクウ チウチウチウチウ」

と云ひ乍ら強者に敵し難く弱り切つて叢の中へ命からがら逃げて行く。嗚呼叶はぬから靈幸倍坐せ。

弱きをば扶け強きを挫くとは

表面ばかり鬼の念佛。

その實は弱身につけ込む風の神

強い奴等に尾を掉る偽侠よ。

(大正一二・三・二五 舊二・九 於皆生温泉濱屋 加藤明子録)

## 第一四章 人畜(一四六四)

テルモン山の山麓の楠の岩窟には、神館の姉娘デビス姫を悪狐の化物として押込めてあつた。宮町一般の老若男女は八九分通りまで實の姫とは知らず、何れも妖怪の變化とのみ信じ、恐れて近づく者が無かつた。ワックスは夜密かに燈火を點じ、親切らしく窟内の姫を訪うた。姫は暗がりの窟内に端坐し、述懐を歌つて



居る。

デビス姫ひめ 世よは常暗とこやみとなり果はてて 月日つきひの影かげも薄うすらぎつ

悪魔あくまは四方よもに横行わうかうし 善ぜんを損そこなひ悪あくを助たすけ

所在あらゆる手段しゆだんを廻めぐらして テルモン山ざんの神館かむやかた

狙ねらひ居ゐるこそ嘆うたてけれ 家令かれいの倅せがれワツクスは

表おもてに善ぜんを標榜へうぼうし 甘あまき言葉ことばを竝ならべつつ

尻しりに劍持けんもつ蜜蜂みつばちの 空恐そらおそろしき悪漢しれものぞ

妾わらはを日頃ひごろ戀こひ慕したひ 目尻めじりを下さげて寄より來きたる

そのスタイルの嫌いやらしさ 妾わらははもとより女をんなの身み

何いづれは夫をうとを持つ身みなれど せめて男をとこらしき益ます良夫らをを

吾背わがせの君きみと崇あがめつつ 父ちちの家いへをば克よく守まもり

母ははの心こころを慰なぐさめて 神かみの御おん爲ため世よの爲ために

誠まこと一つを立通たてとほし 此世このよの鑑かがみと謳うたはれて

恵みの露を民草の上  
に浸しつ神の子と

生れ出でたる務めをば  
盡さむものと朝夕に

神の御前に祈りしが  
如何なる悪魔のさやりしか

大黒主の開きたる  
珍の聖地も何日しかに

魔神の棲處となり果てて  
吾家の爲に力をば

盡して仕へ奉るべき  
家令の倅ワツクスは

戀の虜と成り果てて  
日毎夜毎の悪企み

大黒主の残されし  
如意の寶珠を盗み出し

妾が家に仇をなし  
父と母とを苦しめて

往生づくめに妾をば  
妻となさむと企らみつ

振舞ひたるぞ憎らしき  
父は心を苦しめて

重き病に臥し玉ひ  
命の程も計られぬ

御身とこそはなり玉ひ  
悲嘆の涙は神館

時じく降りて晴れ間なく  
苦しみ悶ゆる親娘の心

憐れみ玉へ物凄き  
深山の奥に只一人

夜な夜な通ひて水垢離  
三七日の其揚句

さも恐ろしき盗人に  
途中に出會ひ玉の緒の

命絶えむとする時ゆ  
三五教の神司

求道居士が妹の  
ケリナを伴ひ來りまし

妾の命を救ひつつ  
仁慈無限の心もて

ベルとヘルとの二人まで  
救はせ玉ひし健氣さよ

妾は居士に従ひて  
露おく野路をスタスタと

パインの森に立向ひ  
少時休らふ折りもあれ

鉦や太鼓でドンチャンと  
旗指物を押立てて

進み來りしワツクスが  
數多の町人使噓して

妾を狐の化身ぞと  
云ひくるめつつ手足をば

固く縛つて岩窟に  
投げ込みたるぞ恐ろしき

如意の寶珠は今何處  
父の命は今もまだ

つづかせ玉ふか雁の  
便りもがなと思へども

尋ねむ由もなく斗り  
求道居士や妹の

身の上如何になりしかと  
思へば胸も張り裂くる

此苦みを如何にして  
癒やさむ術もなき倒れ

舌噛み切つて死なむかと  
思ひしことも幾度か

さはさり乍ら待てしばし  
年老い玉ひし父母の

此世に居ますその限り  
短氣を起し身失せなば

不孝の罪の重なりて  
未來の程も恐ろしと

又とり直す心の弓  
矢竹心の何處までも

通さにやおかぬ吾思ひ  
三五教を守ります

國治立の大御神  
豊國主の大御神

果敢なき吾等が身の上を  
守らせ玉へ惟神

御前に愼み願ぎ奉る  
朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも  
假令大地は沈むとも

誠まこと一つの三五あななひの

神かみの教をしへは世よを救すくふ

救すくひの神かみを頼たのめよと

宣のらせ玉たまひし師しの君きみの

言葉ことばは今いまに忘わすれられず

いと懐なつかしき求道きうだう居士こじ

健まめで居ゐませや妹いもうとよ

それにつけてもヘル司つかさ

一日ひとひも早はやく大神おほかみの

恵めぐみの露つゆを身みに浴あびて

岩窟いはやの中なかの苦くるしみを

免のがれ出いでませ惟神かむながら

神かみかけ祈いのり奉たてまつる

三千さんぜん世界の梅うめの花はな

一度いちどに開ひらく例ためしもあるに

梅うめと櫻さくらに譬たとふべき

吾わが姉妹おとどひは如何いかにして

蓄つぼみの花はなの開ひらかざる

早はやく岩戸いはとを何人なにびとか

情なさけの深ふかき武士ものぶの

尋たづね来きたりて開ひらきませ

心こころの空そらに日月じつげつは

伊照いてり渡わたれど現身うつそみの

儘ままならぬ身みは如何いかにせむ

鋼はがねの壁かべに隔へだてられ

曇くもり果はてたる現世うつしよの

光ひかりさへ見みぬ淺間あさましさ

此世このよを造つくりし神直日かむなほひ

心も廣き大直日 只何事も人の世は

直日に見直し聞直し 身の禍は宣り直し

救はせ玉ふ大神の 御袖に縋り奉る

妾の生命は惜まねど 父と母との御身の上

如意の寶珠の寶をば 救はせ玉へ大御神

心も亂れ氣も狂ひ 前後も知らぬ乙女子の

後や前なる口説き言 許させ玉へ素盞鳴の

瑞の御靈の御前に 慎み敬ひ願ぎ奉る

アア惟神々々 御靈幸はひましませよ

ワックスは鐵の門扉を隔てて此歌をスツカリ聞いて了ひ、雙手を組んで吐息を

つき乍ら獨言、

ワックス「アア今の歌の様子ではデビス姫は餘程俺を怨めてゐる様だ。こりや一

通りでは靡くまい。何とかうまく言葉を設けて姫の歡心を買ひ、ワックスに怨が

ないものだと思はしめねばならぬ。ハテ困つた事だな。……ウん、ヨシヨシ此奴  
あエキスに、にじりつけてやらう。さうすりや、屹度デビス姫が疑を晴らし自分  
を信用するに違ひない。萬一三千彦の奴、こんな處へ隠してある事を探り、救ひ  
出さうものなら、それこそ大變だ。何でも今晚の間に、巧くやつつけねば六莖十  
菊の悔を貽さねばなるまい。だと云つて俄に良い知恵も出ない、困つたものだ」  
と獨語ちつつ半時ばかり考へて居た。ワツクスは何か良い思案が浮んだと見え、  
嫌らしい笑を浮かべ乍ら、月西山に没れたのを幸ひ、入口に進み寄つて、  
「ヤアヤア、これなる岩窟に押込められ玉ふ御方は如何なる御仁でゐるか。道聽  
途説によれば三五教の惡狐高倉稻荷の化身との事、拙者は大惡人のエキスに誤ら  
れ大切なる姫君様を高倉稻荷が取り喰らひ、その御姿に巧く化け居るものと信じ、  
姫様の敵を討たむものと、畏れ多くも此岩窟内に閉ぢ込めたり。これ全くワツク  
スの心より出でしものに非ず、併し乍ら姫様の仇を報はむとの眞心は矢も楯も堪  
らず無慙にも白狐の化身と思ひ誤り押込め参らせたり。昨晚のバラモン大神の夢  
のお告げに、此岩窟に入られ玉ふ姫様は實のお姫様との事、直様罷り出で、お助

け申さむと心は矢竹に逸れども、悪人エクス、ヘルマン、吾身邊を看守り居れば、  
無念乍ら夜陰を待ち、只今お迎への爲參上仕つたり。姫君様、如意寶珠のお玉も  
エクス、ヘルマンの兩人盗み居たりしを此ワックス慧眼を以て看破し、直ちに小  
國別様に返附させたれば此事は御安心あれ。又御父上様は未だ御壯健に在しませ  
ば必ず心慮を惱ませ玉ふ事勿れ。御兩親は此ワックスの忠誠を御稱讚遊ばされ、  
今やデビス姫の御夫と御定めの上、神館の御相續人とお定めありし上は、今日只  
今より姫様は拙者の女房、妻の爲には身命も惜まぬ此ワックス、御安心なされま  
せ。又御妹君ケリナ様も御無事で居られますれば、お喜びなされませ。これ全く  
ワックスが盡力の致す所、必ずお疑ひ下さいませ。ワックス、只今人目を忍び  
お迎へに參上仕りました」  
と大音聲に呼はつた。中よりデビス姫は細き聲にて、  
デビス姫「夜陰にも拘らず此恐ろしき山奥に妾を訪ね来るは何者ぞ。狐狸か、妖  
怪か、速にここを立去れ。左様な世迷言は聞く耳持たぬ。エー汚らはしい」  
ワックス「これはしたり、デビス姫様、拙者は狐狸でも妖怪でもムらぬ。正真正



銘の家令の倅ワックスでムいます。貴女を助けむために何れ丈け苦勞を致したか  
分りませぬ。御推量下さいませ」

デビス姫「人間か、怪物か知らないが其方は人の面を被つた古狐古狸だ。否や大  
妖怪だ。惡逆無道の邪鬼、羅刹、汝の言葉を聞くも汚らわしい。又假令眞のワッ  
クスにもせよ。決して言葉を交す所存はない。卑劣極まる根性を提げて夜中に忍  
び忍び岩窟に来るとは腹黒き曲者、最早妾は此岩窟の女王となり數多のエンゼル  
に救はれ、食物にも不自由なく安心に暮して居る。汝が如き犬畜生輩には死んで  
も御世話にならない。及ばぬ望みを起すよりも、トットと尾を掉つて歸れ、人畜  
生奴」

と言葉厳しく罵つた。ワックスはクワツと怒り、鐵門を石にてガンガンと力限り  
に打ち続け脅喝し乍ら、

ワックス「コレ、姫さま、そんな事を云つた所で岩窟内に食物がある筈もなし、  
名代の魔窟にエンゼルのお降り遊ばす道理はない。瘦我慢を張るよりも因果腰を  
定めて此ワックスの戀をお聞き下さい。魚心あれば水心あり、テルモン山の神館

を初め御兩親のお身の上を守るは此ワックスより外にはムいませぬぞ。左様な無分別な事を云はずに諾と云ひなされ。どこ迄も頑張つて肯かなければ此方にも覺悟がムる。戀の叶はぬ意趣返し、鵬殺しに致しても恐ろしうはムらぬか」

デビス姫「エー、汚らはしや、悪黨者、主人に向つて無禮の罪、赦しは致さぬぞ、覺悟しや」

と云ひ乍ら岩片を拾ふより早く鐵の格子窓の間よりワックスに向つて投げつけた。ワックスは烈火の如く憤り竹槍を扱いて垣越しに骨も通れよと、デビス姫目莖けて突き出した。狭き岩窟に隔てられ、デビス姫は身を避くる餘地が無い。あわや突殺されむとする一刹那、何處ともなく宙を飛んで驅け来る猛犬、  
「ウーウー、ウワツウワツ」と威喝し乍らワックスの利腕に噛り付いた。ワックスはアツと云うた儘、其場に脆くも倒れた。猛犬スマートは後振り返り振り返り「ウーウー」と叱りつけ乍ら、何處ともなく姿を隠した。

暫らくあつてワックスは氣が付き、腕の血を拭ひ四邊の草にて括り乍ら這々の態にて一先づ吾館へスゴスゴと歸り行く。四邊の木の茂みから梟の聲「アホーア

ホー、ゴロツトカヘセ、ヤラレタナー、バカバカ』と啼ないて居ゐる。俄にはかに山柿やまがきの枝えだから蝉せみの聲こゑ『ザマ ザマ ザマ、ミーン ミーン ミーン ミーン』、蟋蟀きりぎりすの聲こゑ『ケラ ケラ ケラ ケラ』。

(大正一二・三・二五 舊二・九 於皆生温泉濱屋 北村隆光録)

第一五章 絲瓜へちま(一四六五)

テルモン山の夜嵐よあらしに 染黒しぐろい顔かほを煽あふられて

スタスタ来る二人連ふたりづれ 鳩はとの岩窟いはやの入口いりぐちに

少時しばしたず佇たずみ息凝いきこらし 中なかの様やう子すを窺うかがへば

押籠おしこめられしケリナ姫ひめ 鈴すずの鳴なるやうな聲こゑをして

何か述懐なにしゆつくわじつた歌うたひ居ゐる エキス、ヘルマン兩人りやうにんは

胸むねををどらし入口いりぐちの

鐵門かなどに身みをばよせ乍ながら

叶かなはぬ戀こひと知らずして

訪たづね來きたるぞ可笑をかしけれ

岩窟いはやの外そとに人ひとありと

知しらぬが佛ほとけのケリナ姫ひめ

其身そのみの不運ふうんを歎かこちつつ

濕しめり勝がちなる歌うたひ聲こゑ

秋野あきのにすだく蟲むしの音ねか

但ただしは駒こまの鈴すずの音ねか

紛まがふべらなる憂音いっおんに

語かたり出いだすぞ可憐いぢらしき。

二人ふたりは聲こゑを祕ひそめ乍ながら、

エクス□オイ、ヘルマン、ワックスの奴やつ、テルモン山ざんの奥おくへ惡醉怪あくすみくわいの演說えんぜつが崇たつ

て逃にげ失うせたのを幸さいはひ、貴様きさまと俺おれと二人ふたりで探さがし出だし、姫ひめの歡心くわんしんを得えて戀こひの優勝者いっしょうしやと

ならうぢやないか、こんな機會きくわいは又またとあるものぢやない□

ヘルマン□ウン、それやさうだ。六百兩ろくひやくりやうの金かねはぼつたくり、又またテルモン山ざんの花はなと

謳うたはれた美人びじんを娶めとり樂たのしく嬉うれしく暮くらすのも亦また乙おつぢやないか。併しかしこれは借かりて來き

た知惠ちゑでは駄目だめかも知しれない。迂うつかり肱鐵ひぢてつをかまされては取返とりかへしがつかぬから

なア。何とかして知恵を絞り出して、甘くやらねばならぬ。餘り近くによつてケリナ姫さまの耳に入つては大變だ。四五間ここを離れて悠くり相談しようかい」  
エクス「ウン、それが上分別だ」  
と云ひ乍ら、四五間傍の雑草の中にドツカリと腰を下ろし、  
エクス「オイ、後の喧嘩を先にして置くのだが、甘く手に入つた時には貴様は何方を取るのだ」

ヘルマン「ウン、俺はデビス姫を申受ける積りだ」

エクス「ヘン、些と面と相談をして見よ。デビス姫の夫になれば、小國別様の御世繼だぞ。貴様のやうな野呂作がどうして左様な事が勤まらうかい」

ヘルマン「マア何方でもよいわ、取らぬ狸の皮算用して居た所で面白くない。それより姉妹のナイスに選ましたらよいではないか、それが一番公平だからなア」  
エクス「それも面白からう、併し先方に選ませるなら姉妹共、俺の方に秋波を送るに定つて居る。其時には一寸加減を見て貴様にお古を譲つてやらうか」

ヘルマン「馬鹿云ふな、貴様のやうな絲瓜に目鼻をつけたやうな細長い顔をしな

がら自惚れた事を云ふな」

エキス「俺が絲瓜なら貴様は南瓜だ」

ヘルマン「南瓜も絲瓜もあつたものかい。マア見て居れ、この南瓜がどんな事をするか、歌にも云ふだらう、

今年南瓜の當り年、

絲瓜の當り年とは開闢以來聞いた事はないわ、エへへへへ」

エキス「コリヤどて南瓜、何を【ごうたく】吐きやがるのだ。マア兔も角俺が年嵩だから長上を敬ふ禮儀に従つて俺に任して置いたらよからう。未だ先方の意向も分らぬのに喧嘩したつて仕方が無いからのう」

ヘルマン「ウンさうだ。こんな所で角目立つて喧嘩して居た所で面白くない。まづ第一ケリナ姫をチヨロまかし、先方の意志に任す事にしよう。サアこれから岩窟の前に立つて歌を歌ひ、ケリナさまに思ひつかすのだ」

と二人は足音を忍ばせ岩窟の傍に躡寄り、

エキス「悪者に誘拐されて岩窟に  
押し込められし君ぞいとしき」

ヘルマン「天照す皇大神よ岩窟を  
一日も早く立ち出でませよ」

エキス「手力男神の命の現はれて  
ケリナの姫が岩戸を開かむ」

ヘルマン□あなさやけあな面白おもしろの御姿みすがたを  
拜をがむ吾われこそ樂たのしかりけり□

エクス□テルモンの神かみの館やかたにあれましし  
ケリナの姫ひめの姿すがたやさしき□

ヘルマン□此君このきみは天下てんか無雙むさうのナイスなり  
如何いかでかエクスに靡なびき給たまはむ□

エクス□ヘルマンの醜しこの司つかさが偉えらさうに  
ケリナの姫ひめを慕したひ來くるかな□



ヘルマン「こらエキス餘り口が過ぎるぞや  
如意の寶珠は誰が盗んだ」

エキス「如意寶珠盗んだ奴はワックスよ  
エキスの爲に館に納まる」

ヘルマン「馬鹿云ふな寶珠の玉は三五の  
三千彦司の手柄ならずや」

エキス「そんな事、こんな所で云ふ馬鹿が  
又と世界に一人あらうか」

ヘルマンこは是これはしたりケリナの姫ひめの隠かくれます  
岩窟いはやまへの前まへをうかと忘わすれて

エクスをこそれだからトンマ男をとこの南かほ瓜ちやづら面

譯わけも絲へちま瓜まもないと云いふのだ

ヘルマンをこ絲へちま瓜ま野郎やらう青あをい顔かほして何なんと云いふ

播よこのやうな頭かぶかかへて

エクスをこ斯かうなれば義理ぎりも絲へちま瓜まもあるものか  
サア來こい勝負しやうぶ力ちから比くらべだ

ヘルマン 『言論の尊ばれつる世の中に  
直接行動は野蠻の骨頂』

エクス 『馬鹿云ふな最後の勝利は實力だ  
見事ケリナを取つて見せうぞ』

ヘルマン 『絲瓜野郎、何程姫に惚れたとて  
先方がきかねば馬鹿を見るのみ』

エクス 『此上は南瓜頭をかち割つて  
鬱憤晴らさにや男が立たぬ』

ヘルマン「こりや絲瓜南瓜の腕を知つて居るか」

エクス……「知つて居れやこそ喧嘩するのだ」

たうとう終には大喧嘩となり、ケリナ姫の事はそつちのけにして長い男と短い男とが組んず組まれつ、ウンウンキヤーキヤーと喚きながら毛を「むし」つたり睾丸を搦んだり、一生懸命に格闘をして居る。ケリナ姫は二人の問答を聞いて自分の苦しき岩窟内にあるのもうち忘れ、思はず知らずホホホと笑ふ。ケリナ姫は静に歌ふ。

ケリナ姫「人里離れしテルモンの深山の奥の岩窟に

情なき男に攫はれて不運を歎つ吾身にも

心の慰む時は來ぬ悪に長けたる二人連れ

神の館の御寶を盗み出して父母を

苦しめまつりワツクスの 悪魔と共に怖ろしき

企みを致す馬鹿男 妾の色香に目が眩み

岩窟の前に塞がりて 互に心の黒幕を

捲り上げたる浅はかさ 如何に曇りし世の中の

盲聾と云ふとても 此程馬鹿が世にあるか

自分の企みを吾前に 一つも残らず曝け出し

あた汚らはしき色戀と 絲瓜や南瓜のお化等が

囁く聲ぞ憐れなり 馬鹿に與ふる薬はないと

世の諺も目の當り 眺めし妾の可笑さよ

旭は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも 吾身の命は失するとも

神力無雙の求道さま 二世の夫と村肝の

心の中に定めてゆ 何程綺麗な男でも

妾の目には鬼瓦 顧みるだに嫌らしき

エクス、ヘルマン二人の馬鹿奴 互に命の奪り合を

始めて苦しむ可笑しさよ アア惟神々々

神の御靈の幸はひて 一日も早く吾身をば

救はせ給へ求道さま 教司の身の上を

守らせ給へと大神の 御前に畏み願ぎまつる

外には、エクス、ヘルマンの二人血塗になつて顔を掻き【むし】られ、息も絶え絶えに格闘して居る。其處へスマートを連れてやつてきたのは、三五教の三千彦であつた。スマートは矢場に岩窟の入口に近より、フンフンと鋭敏な嗅覺で嗅つけ乍ら、ケリナ姫の居る事を確めたものの如く、頻りに尾を掉つて、ウーウーと唸り出した。三千彦は岩窟の入口より聲をかけ、

三千彦「私は三五教の神司三千彦でムいます。先日よりお館にお世話になり貴女のお行衛を探して居りましたが、漸く此處にお隠れと判明し、お迎ひに参りました。暫くお待ち下さい。今此入口の戸を開けますから」

ケリナ姫は暫し無言の儘考へ込んで居た。

ケリナ姫「さしこもる岩窟の中の姫神は

如何でか靡かむ見知らぬ人に。

今の先も怪しき男が只二人

來りて吾を誘はむとせし。

身はたとへ岩窟の中に朽つるとも

仇し男に身をな任さじ」

三千彦「これはしたりケリナの姫の御言葉

神の使にかざり言なし。

村肝の心鎮めて出でませよ

神のまにまに吾は來りぬ」

ケリナ姫ひめ「情なさけある人ひとの言葉ことばに従したがひて

岩窟いはやを出いでむ早はや開ひらきませせ」

三千彦みちひこは四邊あたりの岩片がんぺんを手てに取とるより早はやく錠前びやうまへをへし折をり、漸やっやくにしてカツと開ひらひた。

ケリナ姫ひめ「ヤア三千彦みちひこ様とやら、好よくマア助たすけに來きて下くださいました。此この御恩ごおんは決けつ

して忘わすれませぬ」

三千彦みちひこ「サア早はやく歸かへりませう。御兩親ごりやうしんがお待まち兼かねでムいます。就ついてはお姉様あねさまも

助たすけ出ださねばなりませず、求道きうだう様も助たすけ出ださねばなりませぬから、サア早はやく出で

下ください」

ケリナ姫ひめ「ハイ、有難ありがたうムいますが、足あしがワナワナ致いたしまして些ちつとも立たちませぬ

ので、困こまつて居をります」

三千彦みちひこ「アアさうでせう。斯こんな處ところに閉とぢ籠こめられて居あてはお足あしも弱よわつたでせう。

サア私わたしの背せなに負おぶさつて下ください。此處ここに居をる犬いぬはスマートと申まをしまして、幾度いくども私わたし



を助けて呉れた義犬です。これさへ居れば大丈夫で△います」

と背を突き出す。ケリナ姫は大舟に乗ったやうに安心して素直に三千彦の背に背負はれ、漸くにして苦き岩窟を出た。星の光は金砂銀砂を鑲めた如く、満天に輝いて居る。

ケリナ姫「モシ三千彦様、此處に悪漢が二人斃れて居ますが、この儘見逃して置いてても宜敷いでせうか」

三千彦「成程餘り貴女の方に氣を取られて居ましたので悪漢の仕末を忘れて居ました。サア姫様、一寸下りて居て下さい。漸く貴女の舊宅に閉ぢ込めて置きませう、アハハハハハ」

ケリナ姫「オホホホホ、三千彦様、随分好からぬ奴ですから、改心する迄大事に放り込んで置いて下さいませ」

三千彦は「宜敷い」と云ひ乍ら二人の足を剛力に任せて左右の手に片足づつ握り、芝草の上を引ずり來り。猫でも引きずるやうにポイと放り込み、入口の戸を「カチリ」と閉め、丁寧に突張をかひ、

三千彦「オイ金剛不壞の玉の大盗人、エクス、ヘルマンの兩人暫く此處に樂隠居でもして居るがよからう。改心が出来たら又出してやらうまいものでもない。俺は悪酔怪員でないから、弱き女を助け、悪に強き奴を懲らしてやるのだ。斯うなるのも皆身から出た錆だと思つて觀念したがよからう」

エクス「モシモシ三千彦様、何卒吾等二人を助けて下さいませ。其代りワックスを此處へ捉まへて来て入れるやうに致しますから、實の所はワックスの命令によつて盗んだのでムいます。張本人はワックスでムいます」

三千彦「アハハハハ、マア氣の毒だけれど些と御休息なさいませ。サア姫様歸りませう」

と背に負ひ、スマートに道案内されて、デビス姫の閉ぢ籠められた岩窟を指して進み行く。二人は入口の戸を無性矢鱈に叩き、

兩人「助けて呉れエ助けて呉れエ、此世に神や佛は無いものか。エエ残念や口惜しやなア」

と身勝手な事許り愚癡つて居る。岩窟の奥の方から「ケラ ケラ ケラ ケラ」と嫌ら

しい、身の毛のよだつやうな笑ひ聲が聞えて来た。

(大正一二・三・二五 舊二・九 於皆生温泉濱屋 加藤明子録)

## 第一六章 犬勞(一四六六)

三千彦はテルモン山の中腹をケリナ姫を背に負ひ、スマートに道案内をさせ乍ら草茫茫たる歩き難き道を辿り辿つて、デビス姫を押し込めた岩窟の前に漸く着いた。

デビス姫はワックスの話によつて、如意寶珠の歸り來れる事及び父の存命なる事、並びに妹の安全なる事を略覺り、胸を撫で下し、稍心も弛みグツタリと岩に凭れて眠に就いた。漸くにして三千彦は岩窟の入口に着いた。

三千彦「もし、デビス姫様、私は三五教の神司三千彦でムいます」

ケリナ姫「お姉様、ケリナでムいます」

と二人が代る代る名を呼べども少しも答がない。ケリナ姫は、……姉は最早何者にか攫はれ玉ひしか……と心も心ならず、ケリナ姫「三千彦様、どう致しませう。姉上様は何者にか攫はれ遊ばしたと見えます。これ程呼んでもお答がないのは不思議では無いませぬか」  
三千彦「決して御心配なさいませぬ。鼾の聲が聞えて居ます。屹度お眠みになつて居るのでせう」

スマートは四邊の空気を震動させ、「ウワツ　ウワツ」と叫んだ。此聲に驚いてデビス姫は夢を破られ窓口を見て、……何か人聲がする様だ……と戸口に躡寄り、隙間より透かし見れば星月夜の事とて明瞭姿は分らねど、どうやら妹のスタイルによく似て居るので、

デビス姫「花の色はうつりに【けりな】姫の姿

竄れ玉ひしことの苦しき。

吾命助け玉ひし犬彦の

黒くろき姿すがたの慕したはしきかな  
」

ケリナは此この聲こゑに打うち悦よろこび、

ケリナ姫ひめ 』 三千彦みちひこの情なさけの御手みてに助たすけられ  
汝なを救すくはむと尋たづね來きたりぬ  
」

三千彦みちひこ 』 神館珍かむやかたうづの御子おんことあれませる

デビスの姫ひめよ安やすく出いでませ。

いざさらば此これの鐵門かなどを打破うちやぶり

救すくひまつらむ神かみのまにまに  
」

デビス姫ひめ「嬉うれしさは乙女をとめの胸むねに三千彦みちひこの

神かみの司つかさを伏ふし仰あふぐかな」

三千彦みちひこは強力がうりきに任まかせて錠前ぢやうまへを捻切ねぢきり、窟内くつないに入はいつてデビス姫ひめの手てを執とり、引抱ひっかかへ救すくひ出だした。ケリナは見みるよりデビスに抱だきつき、

ケリナ姫ひめ「姉上あねうへさま様さま」

と云いつたきり後あとは一言ひとことも發はつし得えず、悲かなしさと嬉うれしさに咽返むせかへつて居ゐる。デビス姫ひめも同おなじ思おもひの懷なつかしさに、妹いもうとの體からだを抱だきしめ熱淚ねつるみを流ながし、言ことば葉はさへ得え出ださず、嬉うれし泣なきに泣なきしやくつて居ゐる。

三千彦みちひこ「お二人ふたりさま様さま、斯かやう様な處ところに長居ながみは恐おそれでムごきいます。一時いちじも早はやく求道きうだう居士こじやへルを救すくひ出ださねばなりませぬ。サア参まゐりませう」

デビス姫ひめ「ハイ、御親切ごしんせつに有難ありがたうムごきいます。どうも妾わたしは斯かやう様な處ところに押込おしこめられて立ちもならず、坐すわりもならず居をりましたので歩あるく事ことが出來できませぬ。如何どうしたら宜よろしうムごきいませうかな」

三千彦「ア、さうでせうとも、お察し申します。失禮ながらお二人さま、私の背に負さつて下さい。どうなり、かうなりお館迄お届けしませう。再び出直してスマートに案内させて居士を救ひ出しに参りませう」

デビス姫「危急の場合でムいますからお言葉に甘へて、さう願ひませうかな。本當に濟まない事でムいます」

三千彦「決して御心配は要りませぬ。サア」

と云ひ乍ら少し蹲んで背を突き出す。二人は三千彦の背に負ぶさつた儘、星月夜の山坂をトボトボと下つて神館へ密かに歸り行く。スマートは後前を警護し乍ら人影なき所を案内し、夜明け前、ヤツトの事で館に着いた。

館の玄関口にはエルが依然として高軒をかいて當直を勤めて居る。受付の寝て居るのを幸ひ勝手覚えし家の中、小國別の病室をさして二人の娘を背負つた儘進み入つた。小國別は今や斷末魔の息を引き取りむとする所であつた。小國姫は最早や、これ迄と夫の側に附添ひ、首頸垂れて憂ひに沈んでゐる。それ故三千彦の歸つて來たのに氣がつかなくつた。三千彦は言葉靜かに、

三千彦みちひこ「奥様おくさま、お嬢さまぢやうをお伴ともして歸かへりました。御安心ごあんしんなさいませ」  
と云いふ聲こゑに小國姫をくにひめはフと此方こちらを向むいた。見みれば三千彦みちひこが二人ふたりの娘むすめを背せなに負おうて立たつて居ゐる。小國姫をくにひめは夢ゆめか、現うつか、幻まぼろしかと嬉うれしさ餘あまつてものをも得え云いはず、口くちを開あけ、目めを睜みはつた儘まま、石像せきざうの如ごとく突つつ立たつて居ゐる。三千彦みちひこは二人ふたりの娘むすめを勞いたはり、ソツと居ゐ間に下おろした。二人ふたりの乙女をとめは身しん體たい綿わたの如ごとく疲つかれ果はて一人ひとりで歩あゆむ事ことが出來できなくなつてゐた。

デビス姫ひめ「お父様とうさま、お母様かあさま、漸やうやく此方このかたに助たすけられ歸かへつて參まゐりました。誠まことに御心配ごしんぱいかけて濟すまぬ事ことでムいました」

ケリナ姫ひめ「御兩親様ごりやうしんさま、つひ惡魔あくまに誘さそはれて家出いへでを致いたし、種々いろいろと御心配ごしんぱいを掛かけてお詫わびの申まをし様やうもムいませぬ。何卒どうぞ御許おゆるし下くださいませ」

と涙なみだと共に詫わび入いる。

小國姫をくにひめ「ア、夢ゆめかと思おもつたら夢ゆめではなかつたかな。三千彦様みちひこさま、有難ありがたうムいます。旦那様だんなさまが貴方あなたの事ことを云いうて今いま迄いままで待まち兼ねかて居をられた様子やうすでしたが最早もはや絶命ことぎれた様やうです。アア何なんとかして貴方あなたのお顔かほや娘むすめの顔かほを、も一度いちど見みせ度たいものですが、



とても此世では叶ひますまいな」

とワツと泣き倒れる。二人の娘は父の枕邊にすり寄つて、

「お父様お父様」

と泣き叫ぶ。三千彦は此惨状を見るに忍びず、

「國治立大神様、豊國主大神様、神素盞鳴大神様、何卒々々、も一度病人の魂返

しをお許し下さいまして親娘の對面さして下さい」

と汗をタラタラ流し乍ら祈願を凝らし、天の數歌を唱へ出した。昏睡状態に陥つ

た小國別はパツと目を開き、二人の娘が枕許に居るのを見て打驚き、

小國別「ア、其方はデビス姫、ケリナ姫であつたか。臨終の際に一目會ひたかつ

た。ようまあ宜い處へ歸つて下さつた。嘸苦勞をしたであらうな」

と男泣きに泣く。二人の姉妹は聲を揃へて、

「お父様、お懐しうムいます。何卒確りして下さいませ。三千彦様が居らつしや

いますから大丈夫でムいます。さうお氣の弱い事を云はずに長生して下さいませ」

小國別「ア、娘、よう云うて呉れた。その言葉を聞くからは、父はもう、何時死

んでも心残りはない」

小國姫は漸うに顔をあげ、

「旦那様、嘸御満足でムいませうな。妾も斯んな有難い事はムいませぬ」

小國別は「ウン」と云つたきり、又もやスヤスヤ昏睡状態に入つた。三千彦は

小國姫に向ひ、

「ケリナ姫様、デビス姫様をお助け下さつた求道居士が、悪漢の爲に岩窟内に押

込められて居りますから、私は之から救うて参ります。さうして姫様がお歸りに

なつた事は私が歸る迄内密に願ひます。何卒、別の座敷に移してお忍ばせを願ひ

ます」

と裏口よりスマートと共に飛び出した。

受付のエルは奥の様子が無となく騒がしいのでフと目を覺まし、四這になつて

足音を忍ばせ乍ら親娘對面の様子を聞いて居た。今三千彦が飛び出したので自分

も裏口から眞跣足の儘、飛び出し、見え隠れにトントントンと後を追うて行く。

三千彦は一生懸命にスマートの後に従ひ、求道居士を救ふべく道を急いだ。岩窟

の一町ばかり手前迄来て見ると數多の荒男がワイワイと何事か喚いて居る。

三千彦は暫らく様子を窺はむと草の中に身を隠し、考へて居た。エルは道を轉じて草を分け大勢の前へ走り寄つて、

エル「今三五教の魔法使三千彦と云ふ奴、二人の姫様を連れ歸り、今又求道居士を救ひ出すべくやつて来て、其處の草原に隠れて居る」

と報告したので數十人の荒くれ男は二つに分れ、三十人許りは三千彦を召捕らむとエルが案内の下に詰めかけて来た。スマートは忽ち毛を逆立て縦横無盡に駆け

廻り、足を啣へて將棋倒しにバタバタと倒して了つた。此勢ひに辟易し、何れも四這となつて雑草の中に身を隠し慄うて居る。三千彦は、

三千彦「アハハハハハ」  
と高笑ひし乍ら岩窟に近付けば、求道居士、ヘルの兩人を雁字搦みにして數十人

の男が棒片を以て叩きつけて居る。  
求道居士、ヘルの兩人は半死半生の態にて顔面血潮を漲らし倒れて居た。三千

彦は其場に現はれ、

三千彦「罪なき修驗者を打擲するとは何事ぞ。理由を承はり度い」

と云はせも果てず、

群衆「其方は三五教の魔法使、サアよい所に來た。貴様も血祭にして呉れむ」

と棍棒、竹槍を持つて勢よく迫り來る。三千彦は右に左に體をすかし、一方求道

居士を庇ひながら、敵の刀をひつたくり、仁王立ちとなつて、寄らば斬らむと身

構へして居る。空を切つて驅け來るスマートは、又もや縦横無盡に驅け廻り足を

啣へ手を噛み一人も残さず草原の中へ投倒した。惡酔怪員の面々は何れも不意を

喰ひ、肝を潰し四這となつて草野を潛り乍ら各思ひ思ひに逃げて行く。

求道居士及へルは餘りの負傷に氣も遠くなり、呆けた様になつて首ばかり振つ

て居る。三千彦は聲を勵まし、

三千彦「求道居士殿、ヘル殿、確りなさいませ。私は三五教の宣傳使三千彦でム

いますぞ」

と耳許にて呼はつた。求道居士はハツと氣を取り直し、四邊をキヨロキヨロ見廻

し乍らヤツと安心の態にて、

求道居士「ア、危い所へよく助けに来て下さいました。二三日以前から此岩窟に投げ込まれ、夜中頃引張り出されて種々と打擲に合ひ、到底助かるまいと思ひました。貴方がおいでなさつて私の命をお助け下さつて、有難うムいます。そしてデビス様、ケリナ様は無事でムいませうか。どうも、それが氣にかかりましてなりませぬ」

三千彦「御心配なさいますな。姫様はお二人とも私が救ひ出し今お館へ送り届けました。そして親娘の對面をなさいました。兔も角貴方の事が氣にかかりお救ひに参りました。ムいます」

求道居士「ハイ、有難うムいます。併し乍ら如何したものが私は足が立たない様でムいます」

三千彦「私は御存じの通り獨活の大木と云はれた位ですから、お二人さまとも私の背に負さつて下さい。兔も角お館までお届け致します」

求道居士「實に腑甲斐ない事でムいますが、そんなら助けて頂きませう。ヘルさま、貴方は如何ですか」

ヘル「ハイ、私はどうなりと歩けるだらうと思ひます」

三千彦「もし歩けなかつたら、スマートさまの首にでも喰いついてお歸りなさい」

ヘル「ハイ、有難うムいます、命の親様」

と感謝の涙を流し乍らエチエチと神館を指して歸り行く。

三五教の魔法使、竝に狂犬が現はれたと云ふので、悪酔怪員や宮町の老若男女

は戦々恟々として魔法使及び狂犬撲殺の相談會を彼方此方に開いて居た。

惟神神のまにまに述べて行く

テルモン館にありし次第を。

(大正一二・三・二五 舊二・九 於皆生温泉濱屋 北村隆光録)

第三篇 天上天下てんじやうてんか

第一七章 涼窓りやうそう（一四六七）

色いろと欲よくとに囚とらはれし 家令かれいの倅せがれワツクスは  
日頃ひしほの野望やぼうを達たつせむと 惡友あくいう二人ふたりを唆そそのかし  
神かみの館やかたに納をさまりし 如意にょいの寶珠ほうしゆを盜ぬすみだし  
其その監督かんとくを任まかされし 小國をくに別のわけを陷おとしれ  
無理むり往生わうじやうに最愛さいあいの デビスの姫ひめを手てに入れて  
神かみの館やかたを占領せんりやうし 榮耀えいえう榮華えいぐわに暮くらさむと  
惡逆あくぎやく無道ぶだうの企たくみをば 今いまや遂とげむとする時ときに  
三五あななひけう教せんの宣傳でん使し 神かみの教をしへの三千みちひこ彦こが

旭あさひの如ごとくに下くだり來きて

舊きう惡あく忽たちち暴ばく露ろされ

身みのおき處とこなきまに

種いろ々いろ雜ざ多たの奸かん計けいを

巡めぐらし遂つひに三み千ち彦ひこを

魔ま法は使つかと云いひ觸ふらし

姫ひめの危き急きふを救すくひたる

求きう道だう居こ士しを初はめとし

憐あはれや二ふ人たりの姉おと妹といを

白びやく狐この化け身しんと強きやう辨べんし

數あまた多たの町まち人びと詐いつりて

雁がん字じ搦がみに縛しばり上あげ

テとルとモとンと山ざんの奥おく深ふかく

醜しこの岩いは窟やに叩たたき込こみ

時ときを窺うかがひ夜よな夜よなに

岩いは窟やの前まへに忍しのび行ゆき

戀こひの炎ほのほを燃もやしつ

口く説とき立たつれど魂たまの

据すわりきつたる姉おと妹といは

何なんの容よう赦しやもあら涙なみだ

怒いかりて手てもなく撥はねつ

戀こひの奴ど隸れいとなり果はてし

頓とん馬ま息むすこ子のワツクスも

手てを下くだすべき餘よ地ちもなく

遂つひには自じ暴ばう自じ棄きとなり

鋭えい利りな竹たけ槍やり引ひき扱しこき

デデビビススの姫ひめを一ひと突とつきと

構かまふる折をりしも草くさを分わけ



飛鳥の如く飛び来る

神の使のスマートに

右の利腕一啣ぶり

アツと悲鳴を上げながら

少時其場に倒れしが

痛さを耐へて起き上り

戀の恨を晴らさむと

悪酔怪の荒武者を

煽動なして引き来り

求道居士を閉ぢ込めし

岩窟の前に押し寄せて

鐵門を手もなく打破り

二人を外へ引き出し

各自に槍や刀をば

携へ二人を責つける

身に數十の創を受け

露の命の落ちなむと

する時もあれ三千彦が

猛犬スマート引き連れて

求道居士を救はむと

來りて見れば案の定

數十人の荒男

三千彦目蒐けて攻め来る

少しも騒がぬ三千彦は

天津祝詞を奏上し

生言靈の數歌を

唱へ居たりし眞最中

猛犬スマートは右左

獅子奮迅の勢で

大活動を始め出し

何の容赦も荒男

バタバタバタと小口から

将棋倒しに苛めば

遠無謀の若者も

これや敵はぬと吾先に

草生茂る野の中を

のたのたのたと四這ひに

思ひ思ひに逃げて行く

其光景ぞ可笑しけれ

三千彦思はず吹き出し

アハハハハと笑ふ間も

容赦嵐に吹かれつつ

求道居士の傍により

言葉優しく慰めつ

手負を背に負ひながら

ヘル諸共に神館

人目を忍び歸り行く

アア惟神々々

神の助けぞ有難き。

デビス、ケリナの姉妹は

小國の姫を初とし

スマート、ヘルを従へて

求道居士を背に負ひ

悠々歸り來りたる

神の館の裏口に

悠々歸り來りたる

三千彦司を待ち迎へ

小國姫 神の柱の宣傳使

其神徳も三千彦の

誠一つの救主

いかいお世話になりました

サアサア早く奥の間に

お進みなさつて一休み

醍醐味なりときこし召し

疲れを休め下さんせ

數多の手創を負ひ給ふ

求道居士やヘルさまは

ケリナの姫が付添うて

厚く看護を致します

先づ先づ安心なさいませ

娘二人が大變な

厚いお世話になりました

貴方は二人の助け神

三千彦さまと相並び

經と緯との神柱

その神徳の高きをば

尊び敬ひ奉る

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも

誠の神の在す限り

テルモン山の此館

如何なる曲の攻め來とも

如何いかでか畏おそれむ敷しき島の

誠まこと心を振ふり起おこし

破は邪じやの劍つるぎを振ふり翳かし

快くわ刀いた亂らん麻まを斷たつ如ごとき

無む限げんの神しん徳とく現あらはして

迷まよへる百ももの人ひと々びとを

誠まことの神かみの御み教をしへに

救すくはにや置おかぬ吾わが心こころ

守まもらせたまへ惟かむ神ながら

國く治には立るのたち大おほ御み神かみ

其その外ほか百ももの大おほ御み神かみ

救すくひの司つかさと現あれませる

三さん千ぜん世せ界かいの救きう世せい主しゆ

三み千ち彦ひこ司つかさや求きう道だう居こ士し

守まもらせたまへ吾われ々われが

親おや子この者ものの運うん命めいを

アあ惟かむ神ながら々かむ々ながら

清きよき心こころを現あらはして

神かみに誓ちかひて願ねぎ奉まつる

と歌うたひ、雙もろ手を拍うつて三み千ち彦ひこの無ぶ事じ歸き館わんを祝しゆし且かつ將しやう來らいの覺かく悟ごを述のべた。三み千ち彦ひこ

は小を國くに姫ひめの案あん内ないにつれて奥おくの一ひと室まに通とほりデビひめスよ姫めと四よ方も八も方ものはなし話はなしに時ときを移うつした。

求きう道だう居こ士し、へルりやうの兩にん人にんは見み晴はらしのよき一ひと室まに擔かつぎ込こまれ窓まどを開あけ放はなち、涼すずしき夜よか

風を浴びながら創所の痛みも打ち忘れ、親切なケリナ姫の介抱のもとにソファの上に横はつた。ヘルも亦枕を並べて横はり、ケリナ姫の親切な介抱を受くる事となつた。

(大正一二・三・二六 舊二・一〇 於皆生温泉濱屋 加藤明子録)

## 第一八章 翼琴(一四六八)

小國別の重病は、二人の姉妹の無事に歸り來りしに力づきしものと見え、時々刻々に元氣を増し、最早憂慮を要せざる容態となつて來た。小國姫初め家族一同の喜びは譬ふるに物なき程であつた。又求道居士、ヘルの負傷も比較的淺かりしため、ケリナ姫の注意周到なる看護によつて日に日に快方に向ひ、ケリナ姫に手を引かれ、裏の庭園を散歩し得る迄に到つた。

扨てデビス姫は三千彦と共に離れの間に入つて、大神を念じ、館の無事を祈願

し終り、睦じく四方八方の話に耽つた。デビスは久し振りにクラヴィコード（翼琴）を取り出し、三千彦の勞を犒はむため、微妙なる聲音を張り上げて指先巧にコードを弾じながら、心の丈を絲に托して述べ初めた。

デビス姫 久方の天津御國の皇神の 清き尊き麗しき

外に例もあら尊 珍の御教を四方の國

開かせ給ひて天地の 中に生とし生ける者

蒼生は云ふも更 鳥獸や蟲けらや

草の片葉に至る迄 惠の露を與へむと

國治立の大御神 豊國姫の大御神

埴安彦や埴安姫の 珍の御言を畏みて

神の都のエルサレム 黄金山下に現まして

教を開き四方の國 島の八十島八十國を

黄金世界に作り上げ 天國淨土を地の上に

移さむものと瑞御靈

神素盞鳴の大神は

嚴の雄健び踏み健び

嚴の嘖讓を起しつつ

此世を亂す曲津神

八岐大蛇や醜狐

曲鬼共を言向けて

仁慈無限の御心を

普く天下に照らさむと

雪の晨や霜の宵

嵐に髪を梳づり

雨に御身をば曝しつつ

彼方此方と漂浪の

長き旅路を續けまし

黄金山を初めとし

齋苑の館やコーカス山

靈鷲山や萬壽山

自轉倒島の中心地

四尾の峰に下りまし

種々雑多と御心を

配らせ給ひ世の中の

遍く罪を清めむと

千座の置戸を負ひ給ひ

心正しくいと清く

優しき數多の神司

四方に使はし給ひつつ

世人を救ふ宣傳使

中にも別けて三千彦の

神かみの司つかさの雄を々をしさよ  
バラモン教けうの敵城てきじやうに

怯おめず恐おそれず唯ただ一人ひとり  
神かみの教をしへを力ちからとし

光輝ひかりかがやき下くだりまし  
妾等われら親子おやこの惱なやみをば

救すくはせ給たまひし有あり難がたさ  
假令たとへ天地てんちはかへるとも

月落つきおち星ほしは失うするとも  
大海原おほうなばらは涸かるとも

此御惠このみめぐみはいつの世よか  
忘わすれまつらむ惟神かむながら

神かみの御おん爲ため道みちの爲ため  
賤いやしき吾身わがみを奉たてまつり

三千彦みちひ司こつかさと諸もろとも共もに  
八岐大蛇やまたをろちに魂たましひを

拔ぬかれ給たまひしバラモンの  
教をしへの柱はしら大黒主おほくろぬしの

司つかさの君きみに赤心まごころを  
捧ささげて救すくひ奉たてまつり

バラモン教けうや三五あななひの  
教をしへの道みちの隔へだてをば

隈くまなく取とりて相共あひともに  
此世このよを造つくり給たまひたる

祖神様おやがみさまの御教みをしへに  
力ちからを合あはせ村肝むらきもの

心こころを一つひとつに結むすびつつ  
曇くもりきつたる現世うつしよを



ブラバ―サの世界とし 天地の神の御前に

功を立てて山海の 恵に酬い奉るべし

神の教の靈幸はふ 道の司の三千彦さまよ

妾が小さき胸の中 燃ゆる炎を瑞靈

注がせ給ひて片時も 早く休ませ給へかし

如何に世界は廣くとも 吾背の君と打ち仰ぎ

仕へまつらむ武士は 汝が身をおきて外になし

さはさりながら三千彦司 汝は彦知にまませば

打ち見る島の先々や かき見る磯の隈々おちず

若草の妻持たせらめ 吾こそは女にしあれば

汝をおきては男子なし 汝の外には夫はなし

綾垣の浮はやが下に蒸衾 さやぐが下に淡雪の

若やる胸を素抱きて 白き腕取り交し

たたきまながり眞玉手玉手 いやさしまきてもも長に

寝をしなせませ豊神酒きこしめせ なつかしの君よ戀しき男子よ

青山に日が隠くらは 烏羽玉の夜は出でなむ

旭の笑み榮えまして 妾が厚き願ひをば

完全に委曲にきこし召せ 神に誓ひて願ぎ奉る

金勝要の大御神 イドムの神のおとりなし

偏に幸を願ぎ奉る アア惟神々々

御靈幸倍ましましてよ

と歌ひ終り、クラヴィコードを傍に直し、顔を赤らめ乍ら、いと恥づかしげに三千彦に向つて玉の杯をさし出した。三千彦は聊か有難迷惑の體にて、胸を轟かせながら黙つて姫のさし出す杯を取り醍醐味を浪々と注がれて押し頂き、感謝と共にグツと飲み乾し、決心の臍を固めて聲も涼しく返歌を歌ふ。

三千彦 仰げば高し久方の 天津空より下りまし

天あめの下したなる諸もろもろ々々を

神かみの館やかたに永とこ久しへに

神かむ素す盞さ鳴のを大神おほかみの

八やし島しまの主ぬしの御み言こともて

眞ます純すみの彦ひこや伊いた太た彦ひこを

伏ふし拜をがみつ々た旅たび枕まくら

河か鹿しか峠たうげの急きふ坂はんを

難なやみに遇あひて漸やうくくに

荒あらの野のを涉わたり四よ人にん連づれ

來きたる折をりしもバラモンの

師して弟い四よ人にんは散ちり々ぢりに

吾わが師しの君きみは今いま何いづ處こ

心こころにかかる夏なつの空そら

芽めを吹ふき【いとど】

救すくひ守まもらす産うぶ土すなの

鎮しづまり居ゐます瑞みづ靈みたま

教をしへの館やかたを統すべたまふ

玉たま國くに別わけの師しの君きみと

伴ともひ目め出で度たく神かむ館やかた

輕かるき身み装なりの扮いで装たちに

登のぼりつ下くだりつ種いろ々いろの

虎と狼おほの吠ほえ猛たける

ハルナの都みやこに進すすまむと

醜しこの司つかさに襲おそはれて

行ゆく方へも知しれず分わかれけり

教をしへの友ともは如いか何かにせしと

山さん野やは笑わらひ新しん緑りよくの

嬉うれしげに 風かぜに梢こずえを翻ひるがへし

舞踏を演じ勇ましく 笑ひ榮ゆれど三千彦の

心の空は五月暗 青葉に姿隠しつつ

鳴く時鳥も只ならず 八千八度の聲涸れて

尋ぬるよしも泣逆吃 淋しき旅を續けつつ

青野ヶ原をトボトボと 烈しき風に煽られて

神の化身のスマートに 危ふき命を救けられ

アンブラック川を打ち渡り テルモン山の聖場に

向つて進む折りもあれ 小國姫の御姿

道の傍に廻り會ひ 請はるるままに神館

深く忍びて三五の 教の道を宣べ傳へ

これの館を包みたる 八重黒雲を科戸邊の

神の御息に吹き拂ひ 月日も空にテルモンの

目出度き館となりける 時しもあれや曲津神

伊猛り狂ひて凄じく 此の館に仇をなし

狂くるひ廻まはるぞうたてけれ 身みの不ふ覺かくより三千彦みちひこは

曲まが神かみ共どもに捉とらへられ 情なさけ容よう赦しやも荒あら繩なはに

縛しばりつけられ免まぬれむ 道みちも手て段だても荒あら川かはに

投なげ捨すてられて玉たまの緒をの 露つゆの命いのちを失うしひつ

神しん靈れい界かいの八やち衢またに 彷徨さまよひ進すすむ折をりもあれ

神かみの惠めぐみの彌いや深ふかく 猛まう犬けんスマート遣つかはして

吾われの靈みたま魂たまを現うつ世しよに 迎むかへ還かへさせ給たまひけり

呼あ々かむ惟ながら神かみ々むながら 神かみの惠めぐみの尊たふとさよ

朝あさ日ひは照てるとも曇くもるとも 月つきは盈みつとも虧かくるとも

星ほしは空そらより落おつるとも 大おほ海うな原ばらは涸かるとも

道みちに捧ささげし三千彦みちひこの 露つゆの命いのちを惜をしまむや

館やかたの難なやみを見るみにつけ 見み捨すて兼かねてぞ三千彦みちひこが

心こころの駒こまの進すすむまに 命いのちを的まとにテルモンの

深みやま山の奥おくの岩がん窟くつに 人ひと目を忍しのび尋たづねより

心も姿も麗しき 二人の姫を救ひ出し

ようよう此處に歸りける 心にかかりし父君の

病もおひおひ癒え給ひ 求道居士やヘル司

二人の身魂も安らかに 元に復りて勇ましく

ケリナの姫に導かれ 花咲き匂ふ神苑を

心樂しげに逍遙し 恵の露を嬉しみて

樂しむ身とはなりにけり アア惟神々々

神の恵の尊さよ さはさりながらデビス姫

汝が命の御心は 吾赤心に通へども

吾は尊き大神の 一大使命を帯ぶる身よ

其神業の半途にて 思ひも寄らぬ妻定め

如何でか神の許さむや 此事許りは諦めて

吾の負ひたる使命をば 果させ給へ惟神

神に誓ひて汝が前に 誠を明し宣り奉る

アア惟神々々かむながらかむながら

御靈幸倍ましましてよみたまさちはへ

と歌うたひ終をはり、デビス姫ひめの御親切ごしんせつなる御志おこころざしは、實じつに感謝かんしゃに堪たへないが、神かみの使命しめいを帯おび、吾師わがしの君きみと共ともに神業しんげふに仕つかふる中途ちゅうとなれば折角せつかくのお志こころざしなれど断ことわり致いたすとの意味いみを、いと細こまやかに述のべ終をはつたのである。アア此このりやうにん兩人にんの戀愛れんあい關係くわんけいは如何いかにして落着おちつきするであらうか。

(大正一二・三・二六 舊二・一〇 於皆生温泉濱屋 加藤明子録)

### 第十九章 抱月だきつき（一四六九）

求道居士きうだうこじは月夜つきよの庭園ていえんをブラリブラリとケリナ姫ひめに導みちびかれ逍遙せうえうした。ケリナ姫ひめは遙はるかに西南方せいなんほうを指さし、ケリナ姫ひめ「求道さま遙向はるかむかふの方に霞かすみの如ごとく、鏡かがみの如ごとく白しろく光ひかつて居ゐる物ものが見みえま

せう。あれはテルモン湖水と申してアンブラック川の水の落ち込む東西百里、南  
北二百里と稱へらるる大湖水でムいます。深さは龍宮城迄届いて居ると昔から申  
しますが、どうかあの湖水の様に廣く、深く、清き者となり度いものでムいます  
なア。それに月の影が水面に浮んだ時には、得も云はれぬ絶景でムいます。常磐  
堅磐のパインの老木は湖水の周圍に環の如く取り巻き、白砂青松の得も云はれぬ  
風景でムいます。一度貴方が御全快遊ばしたら御案内申上たいものでムいますわ  
求道居士「ハイ有難うムいます。嘸景色のよい事でムいませうなア」  
ケリナ姫「求道様、貴方は妾を永遠に愛して下さいさるでせうなア」  
求道居士「これは又不思議な事を承はります。貴女に限らず、天下萬民は申すに  
及ばず、草の片葉に至る迄神様の愛を取りつくぐ私は比丘でムいますから、力限り  
愛善の徳を施したいと願つて居ります」  
ケリナ姫「貴方は廣い世界の中で特別に愛を注ぐものが一人ムいませう」  
求道居士「神の愛は平等愛です、つまり博愛ですから愛に依怙鼻肩はムいませぬ。  
老若男女禽獸蟲魚に至る迄力一杯愛する考へでムいます。愛に偏頗があれば愛自



體いは既すでに不ふく完わん全ぜんの物ものでムごきいますからなアア」

ケリナ姫ひめ「ハイ、それは分わかつて居をります。併しかし乍ながら貴あなた方は、ラブ イズ ベスト  
を何なんとお心こころ得えでムごきいますか」

求道居士きうだうこじ「今迄いままでのバラモン軍ぐんのカーネルならば盛さかんにラブ イズ ベストを唱となへ  
ました。併しかし御覽ごらんの通とほり圓頂緇衣えんちやうしえの修驗者しゆげんじやとなり、忍辱にんにくの衣ころもを身みにつけた上うへから  
は、ラブなどは夢ゆめにも思おもつた事ことはムごきいませぬ」

ケリナ姫ひめ「思おもひきやラブせし人ひとは隼はやぶさの

羽はばたき強つよしパインの林はやしに。

常磐木とこきはぎの松まつの心こころのさきくあれと

祈いのりし君きみを恨うらめしくぞ思おもふ」

求道居士きうだうこじ「皇神すめかみの道みちを畏かしこみ進すすむ身みは

如何で女に心うつさむ」

ケリナ姫「求道様、どうしても妾の願は聞いて下さいませぬか。貴方は三千彦様とは違つて宣傳使ではムいますまい。又大切な使命を帯びて征途に上らるる御身でもありますまいに、この憐な女を見殺しに遊ばす御所存でムいますか。貴方の  
お考へ一つで妾は天國に遊び、又は地獄の底に陥るのでムいます。可憐な乙女を地獄に墮しても比丘のお役目が勤まりますか、それから承はりたうムいます。妾のラブは九寸五分式、岩をも射貫く大決心でムいます」  
求道居士「アハハハハ八八八八姫様冗談云つてはいけませぬよ。好い加減に擲擲つて置いて下さいませ」

ケリナ姫「動くこそ人の赤心動かずと云ひて誇らふ人は石木か」

と云ふ歌がムいませう、夫を何と考へなさいますか。人間の身體はよもや石木ではムいますまい。愛情の炎が心中に燃えて居らねば衆生濟度も出來ますまい。理論のみに走つて冷やかな態度のみを保つのが決して貴方の御本心ではムいますまい。」

求道居士「アア、迷惑な事が出來たものだなア。又一つ煩悶の種が殖へて來たワ  
イ」

ケリナ姫「卑ない愚な女にラブされて嘸御迷惑でムいませう。貴方に愛の無いのを妾はたつてとは申しませぬ」  
求道居士「姫様さう悪取をして貰つては求道も本當に困ります。貴方のやうな才媛をどうして嫌ひませうか。私だつて未だ年若い有情の男子でムいますよ。併し乍ら一旦神様にお任せした身でムいますから、さう勝手に戀愛味を吸収する譯には參りませぬ」

ケリナ姫「モシ求道様、貴方はまだ或物に捉はれて居られますなア。それでは解脱なされたとは申されませぬ。況て比丘は宣傳使ではなく、半俗半聖の御身の

上で△いませぬか。神様のお道は總て解放的では△いませぬか。何物にも捉へらるる事なく、坦々たる大道を自由自在に進み得るのが仁慈無限の神様のお道でせう。情を知らぬは決して男子とは申されますまい」

求道居士「さう短兵急に大手搦手から追撃されてはこの圓坊主も逃げ道が△いませぬワイ、今日は何卒大目に見て許して下さいませ」

ケリナ姫「ホホホホ、貴方は比較的卑怯なお方で△いますなア。そんな事でどうして衆生濟度が出来ますか。貴方は平和の女神を一人墮落さす考へですか。比丘と云ふ雅號を取り除けば普通の人間ぢや△いませぬか。大神様は變化の術を用ひて衆生を濟度遊ばすでせう、貴方も暫く觀自在天の境地になつて憐れな女を救ふお考へは△いませぬか。女に關係して行力が落ちるなぞと頑迷固陋の思想に、失禮ながら囚はれてお出なさるのでは△いますまいか」

求道居士「何分私の兩親が一夜の間に粗製濫造してくれた代物で△いますから、今時の新しい婦人方のお考へは、容易に頭に滲みませぬ。實に時代後れの骨董品で△います。何れ徵古館に陳列される代物ですからなア、アハハハハ」

ケリナ姫「工工辛氣臭い、ジレツたい、何と仰有つても妾は初心を貫徹せなくて  
は現代婦人に對しても妾の顔が立ちませぬ。婦人の面貌に泥を塗つては濟みませ  
ぬ。妾が貴方に擯斥せられたのは決して妾一人ではございませぬ、現代婦人の代  
表的侮辱を受けたやうなものでムいますから、そのお覺悟で居て下さい」  
と自棄氣味になり、猛烈な氣焰を吐きかけた。

求道居士「アア夢では無からうかなア。バラモン軍に居つた時には、干瓢に目鼻  
をつけたやうな女にさへ嫌はれたものだが、修驗者の身になつて女を斷念したと  
思へば、生れてから無いやうな、婦人の方からラブされるとは、世の中も變つた  
ものだ、否私の境遇も地異天變が起つたやうなものだ。工工仕方がない、假令神  
罰を蒙つて根の國底の國へ墮ちるとも貴方の熱愛に酬いませう」

ケリナ姫「求道様、決して根底の國へは妾が墮しませぬ。夜なく冬なき天國の樂  
しみを此世乍らに樂しみ、大神の御用に夫婦和合して仕へませう、御安心下さい  
ませ。夫について男の心と秋の空とか云ひますから、此處で一つ誓つて下さいま  
せ」

求道居士きうだうこじ「然しからば大空おほぞらに澄すみ渡わたる麗うるはしき月つきに向むかつて誓ちかひませう」  
ケリナ姫ひめ「月つきには盈みつると虧かくるの變へん化くわがムごきいます。途とちう中に變かはられては困こまります  
から、何卒どうぞこの庭先にはさきの千引岩ちびきいはに誓ちかつて下くださいませ」

求道居士きうだうこじ「千代八千代千引ちよやちよちびきの岩いはの動うごきなく

君きみを愛めでむと誓ちかふ今日けふかな」

ケリナ姫ひめ「千引岩ちびきいは押おせども引ひけども動うごきなき

吾背わがせの君きみと千代ちよを契ちぎらむ」

と歌うたひ終をはり、求道きうだうの手てを固かたく握にぎり二ふたつ三みつ上じやう下うげ左さい右いうに強つよく揺ゆつた。求道きうだうも亦また姫ひめの  
手てを取とり、頬ほほと頬ほほとをピタリと合あし、千代ちよの固かためとした。暫しばらく兩りやう人にんはパインの蔭かげ  
に直立ちよくりつし手てを握にぎり合あつて無言むごんの儘ままハートに浪なみを打うたせて居ゐる。ヘルは退屈たいくつ紛まぎれに

月を眺めながらブラリブラリと此場に現はれ來り、

ヘル「イヤ、御兩所様、お祝ひ申します」

ケリナ姫「ヤア貴方はヘルさまでムいましたか。月の景色がよいので求道様とブラついて居ましたのですよ」

ヘル「何卒毎晩月夜でムいますからお楽しみ遊ばしませ。私は氣を利かして控へて居ましたのですよ、アハハハハ」

求道居士「……………」

ケリナ姫「ホホホホ、お月様が可笑しさにニコニコと笑つてゐらつしやいますわ」

ヘル「貴女も嬉しさに笑つてゐらつしやいましたね」

（大正一二・三・二六 舊二・一〇 於皆生温泉濱屋 加藤明子録）

空はドンヨリと曇り、濃淡の雲片雲塊は所斑に満天を包み、少し許りの雲の破れから青雲の肌をチラチラと七八箇所許り見せて居る。風もなく木の葉のそよぎも止まり、體一面に汗が滲り出る。濕っぽい空氣が天地を充塞して居る。惡酔怪員は彼方に三人、此方に五人と集り犬に噛まれた無念話の花を咲かし、目を釣り上げ額に青筋を立て、中には齒ぎしり噛んで怒り狂ふ者もあつた。餘り腹立たしさに何れも酒をあふり苦痛を紛らす爲とて銅羅の様な蠻聲を張り上げ、自暴自棄的にさざめいて居る。そこへ白き繃帶を腕に巻きつけ驢馬に跨りオークス、ビルマを従へてやつて來たのはワックスであつた。ワックスは十字街頭に立ち、薄つぺらな豆太鼓を誓願寺の遍歴者が叩く様に、「ドンドン、ドンドン、ドン、ドン、ドン、ドン、ドン、ドン、ドン、ドン」と、擦鉦と共に囃し立て乍ら現はれ來り、馬上にツツと立ち乍ら、ワックス「一大事突發せり。惡酔怪員は申すに及ばず脛腰の立つ者は何れも鐘路に集まれ」

と大喝するや、怒り立つたる老若男女は瞬く間に數百人集まり來り、「ワイイ



ワイイ」と鬨の聲を擧げ、ワックスの演説を聞かむと噓し立ててゐる。オークスは太鼓の手をやめて馬上に衝ツ立ち乍ら、大手を左右に振り、鰐口をあけて大道演説を始め出した。

オークス「皆さま、神館の門番頭、未來の家令職オークスでゐる、今ここへ現はれ玉うたワックス先生は、御覽の如く三五教の魔法使が使役する狂犬に腕を咬まれ、又吾々は此通り足を噛み切られ、散々の目に合はされました。否や吾々のみならず悪酔怪員の大部分は皆彼の狂犬に傷つけられたではゐらぬか。吾々テルモン山の靈地に住居致す神の選民が、どうして之を不問に附する事が出来ませうか。悪酔怪員は申すに及ばず、水平會員竝に本町の老若男女は此靈地を守るべく身を挺して館につめよせ、魔法使の三千彦、求道居士を召捕り彼の狂犬を撲殺し、靈地を清むる御所存はゞいませぬか。誠に残念至極でゐます。これが何ともない様な人間なら、それは木石に等しきものでゐませう。人は感情の動物です。どうか皆さま、バラモン魂を發揮し、吾々の後に跟いて此壯擧に賛同あらむ事を希望致します」

悪酔怪員の中より、へべれけに酔うた男、繃帯し乍ら現はれ来り、

男「ヤア門番、オークス、御苦勞御苦勞、お前がそんな事云はずとも此トクさまが一人でも敵を討たなくちや悪酔怪員の顔が立たねーだ。然し乍ら暫く足の癒る迄此攻撃は待つて呉れ。此トク一人の力でも美ん事、やつつけて見せる。本當に怪體の悪い、これが黙つて居られやうかい」

群衆の中より、

「尤もだ尤もだ。猶豫はならぬ。やつつけよ やつつけよ」

と口々に叫び罵る。ワックスは潮時を見すまし繃帯を解き傷所を現はし乍ら、

ワックス「皆さま、私は魔法使の爲めに此通り惨い目に會ひました。私が舍身的活動を致し、斯様な負傷をしたのも皆さまを思ふ爲でムいますぞ。苟くも悪酔怪の統率者たるもの、假令貴重なる生命を捨つるとも諸君の爲め犠牲となつて弱きを挫き、強きを助けねばなりませんまい、サア時遅れては却つて敵に逃げられるかも知れませぬから、皆さまは此ワックスに従ひ脛腰の立つ方は館に押し寄せ敵を捕縛して下さい。さうして負傷した方は是非に及ばぬとしてお休みになつても宜

しい。然し乍ら人間は心の持ち方が肝腎です、此通り腕を噛まれ足を咬まれて激痛を忍び乍ら、漸く驢馬に跨り活動を致して居る私の苦心をお察し下さらば、少々  
の怪我位は憂ふるに及びますまい。千騎一騎の此場合、協心戮力的大活動を祈り  
ます」

と言葉巧に述べ終るや、慌者の彌次馬は各自に棍棒を携へ、或は竹槍、長剣を揮  
つてワックスが指揮の下に潮の如く館の門前さして、列を正し旗を押し立て、太  
鼓を叩き擦鉦を鳴らし乍ら進み行く。ワックスは先に立ち進軍歌を歌ひ初めた。

ドーン ドーン ドーン チヤンチキチヤンチキ チヤンチキチン  
ワックス「皆さま皆さま確りと 鉢巻締め帯締め

草鞋の紐をよく結び 手に手に柄物を携へて

テルモン山の聖場を 覆へさむと企む奴

ドーン ドーン ドーン チヤンチキ チヤンチキ チヤンチキチン

三五教の魔法使 みち三千彦や求道居士

それしたがに従こぬすびとふ小盗人

狂犬きやうけんSMART 諸共もろともに

只ただ一匹いっぴきも残のこさずに

命いのちをまと的にたちむか立向ひひ

往生わうじやうさしてやりませう

ドーン ドーン ドーン

チャンチキ チャンチキ

チャンチキチン

人は心ひとこころが第一だいいちだ

弱よわき奴やつにはドツと行ゆけ

強つよい奴やつにはドツと逃にげ

もしも先方むかふが強つよければ

暫しばしく豫定よていの退却たいきやくし

再ふたたび戦備せんびを整ととのへて

捲土けんどち重來ゆうらい進すすみ行ゆく

ドーン ドーン ドーン チャンチキ チャンチキ チャンチキチン

凡すべて軍いくさの驅引かけひきは

潮しほの満干さしひきある様やうに

千變萬化せんべんばんくわの秘術ひじゆつをば

盡つくして敵てきに向むかふのが

誠まことの兵法へいはふと云いふものだ

假令たとへ三年さんねんかかるとも

此殘念このざんねんを晴はらさねば

惡醉怪あくすゐくわいや水平會すいへいくわい

靈地れいちに住すまへる人々ひとびとの

男をとこの顔かほは丸潰まるつぶれ

女をんなの顔かほも臺たいなしに

なつて天地てんちに恥曝はぢさらし



處よりともなく現はれ來りしスマートは、ここを先途と唸り出し、山嶽も揺るぐ許りの聲を發した。流石の群衆もワックスも此唸り聲に辟易し、進み兼ねたる折もあれ、スマートは群衆の中に矢の如く飛び入り、縦横無盡に駆け廻り、惡酔怪員のみを目蒐けてバタリバタリと咬み倒した。群集は驚き慌てて色を失ひ、各思ひ思ひに生命から逃げ散つた。ワックスはオークス、ビルマ、エルを従へ己が館をさして一目散に驢馬に鞭打ち歸り行く。

(大正一二・三・二六 舊二・一〇 於皆生温泉濱屋 北村隆光録)

## 第二章 言觸(一四七一)

ワックスは驚き吾家に馳歸り見れば父のオールスチンは病益々重く、殆ど蟲の息になつて居た。流石のワックスも驚いて父の病床に駆け寄り、涙の聲を絞り乍ら、

ワックス「お父様、如何でムいます。お苦しうムいますか」  
とツヒになく優しく尋ねる。オールスチンはクワツと目を瞠き、ニタリと笑つた  
儘瞑目して了つた。

ワックス「アア到頭大切の大切のお父さまはなくなつて了つた。アアどうしよ  
うかな。おい、オークス、ビルマ、も一度どうかして甦つて貰ふ道はあるまいか  
な。コラ看護婦、貴様達二人も附いて居つて何して居た。親爺が死ぬやうな看護  
を頼みはせぬぞ、病氣が癒る爲、高い金を出して雇うて居たのだ。俺の不在の間  
に何か悪い事したのだらう。トツトと出て行け」

とソロソロ地金を出しワヤな事を云ひ出した。看護婦は呆れて返す言葉もなく、  
面を膨らし乍ら自分の持物を取りまつべて逃げ歸らうとする。

ワックス「コリヤ一寸待て、その荷物を税関で調べてやらう。親爺の小判をソ  
ファアの下から引張り出して詰めて居るのだらう」

看護婦「ホホホそんな安い人間と思つて貰ひますと片腹痛うムいます。然し此ト  
ランクは私の物ですから指一本觸へるなら觸へて御覽なさい」

ワックス「ヨシ、みんな事調べてやろう。大泥棒奴が」  
と云ひ乍ら二人の看護婦のトランクを無理に捻開けた。忽ち白き煙シューシュー  
と音を立てて立あがり、中よりデビス姫、ケリナ姫の二人がニコニコしながら立  
ち現はれた。ワックスはアツと驚き腰を抜かし「バ……化物」と呼んだきり、喉  
がつまり口をワナワナさせ慄うて居る。オークス、ビルマは其間にソファアを取  
り除け、疊をめぐり、オールスチンの隠して置いた金銀の小玉を引張出し、看護  
婦のトランクに詰め込み、倒れて居るワックスの前に見せびらかし、  
オークス「もし、ワックス様、これ丈の戦利品がムいましたよ。後にはもう一つ  
も残つて居りませぬ。ビルマと兩人が有難く頂戴致します。お前さまはお化の姫  
様と仲良う暮しなさい。お前さまの腰は三日や四日にや立ちますまいから、これ  
から兩人が聖地を逐電致し、ハルナの都に行つて榮耀榮華に暮します、アバよ、  
ウツフフフフフ」  
と腮をしゃくり嘲笑しながらスタスタと表へ駆け出す。二人の看護婦の姿は何處  
へ行つたか皆目見えなかつた。ワックスは無念をこらへ齒切りを嚙んで逃げ行く



二人の後を怨めしげに見送つて居た。狼狽者のエルはトランクの中から美人が出たのと、オールスチンの絶命れたのを見て逸早く飛び出し、再び十字街頭に立ち現はれ、大音聲を張り上げて言觸を始め出した。

エル「ドンドコ ドンドコ ドンドコドン ヤア大變ぢやア大變ぢやア

天が地となり地が天となる ドンドコ ドンドコ ドンドコドン

ワックスさまの親爺さま 神の館の家老職

オールスチンが命盡きて 極樂參りを致したぞ

ドンドコ ドンドコ ドンドコドン 皆さま早う駆けつけて

葬式萬端手傳うて 野邊の送りをするが宜い

悪酔怪の會長さま ワックスさまは腰抜かし

アフンとばかり口開けて 【もの】をも言はず倒れてる

ドンドコ ドンドコ ドンドコドン それにまだまだ不思議なは

二人の看護婦忽ちに 雲を霞と消え失せた

不思議と思ふ最中に　ワックスさまがパツと開けた

トランクの中からシューシューと　白い煙が立ち昇り

ドンドコ　ドンドコ　ドンドコドン　あらマア不思議摩訶不思議

神の館にあらませる　デビスの姫やケリナ姫

ニコニコし乍ら現はれた　ドンドコ　ドンドコ　ドンドコドン

これもヤツパリ三五の　魔法使の仕業だと

思へば俄に怖くなり　家令の死んだ報告や

ワックスさまの腰抜かし　お化女の出現を

報告がてらにやつて来た　ドンドコ　ドンドコ　ドンドコドン

今度は嘘では無い程に　本眞に本眞に死んだのだ

ソファアの下にドツサリと　金と銀との小玉奴が

目玉を剥いて唸つてる　手に入れるなら今だぞや

凡て此世の財産は　人一代と云ふ事だ

親爺が悴に渡さずに　残して死んだ寶なら

誰たれが拾ひろうても同じ事こと

これは天てん下かの所しよ有いう品ひん

お金かねの欲ほしい代物しろものは

一時いちじも早はやく飛とんで出でて

思おもふ存ぞんぶん分ひつつか引ひ摺つかみ

榮えい耀えう榮えい華くわに暮くらさんせ

ドンドコ ドンドコ ドンドコ

執しふ念ねんかかつた金きん銀ぎんを

俺おれは拾ひろはうと思おもはない

さはさり乍ながら黄わう金こんが

【もの】云いふ時じ節せつだ皆みなさまよ ドンドコ ドンドコ ドンドコ

強がう欲よく爺ぢぢの葬さうれい禮れいを 表おもてにかこつけドシドシと

遠ゑん慮りよ會えい釋しやくも要いらぬ故ゆゑ 押おしかけ行ゆきて寶たからをば

各めん自めにせしめた方ほうがよい ワツクスさまの腰こし拔ぬけが

もとへ戻もどらぬ其その先さきに 早はやく行いつたら行ゆき得とくぢや

一ひと歩あし先さきへ行ゆく者ものが どうしてもお神か德げが多おほいぞや

ドンドコ ドンドコ ドンドコドン ア、エーエエエ エーエエエ

扱さても果は敢かない人にん間げんの命いのち 欲よくの皮かはをば引ひ張つつて

小をく國にの別わけのお館やかたの 家か令れいの勤つとめチヨコ チヨコと

上前うはまへはねて貯め置いた 罪つみと穢けがれの凝固かたまつた

金きんと銀ぎんとを澤山たくさんに 残のこして死しんだ氣味きみの良よさ

悪あくはどうしても長ながつづき 致いたさぬものだと今更いまさらに

此このエルさまは悟さとりました オールスチンの親爺おやぢめ奴めが

何時いつも偉えらさうに俺様おれさまを エルよエルよと呼よび棄すてに

こき使つかひやがつた其酬そのむくい 今目いままのあたり面白おもしろや

ドンドコ ドンドコ ドンドコ ドン 人ひとはどうしても生前せいぜんに

善ぜんを行おこなひ施ほどこしを やつて置おかねば詰つまらない

今度こんどの家令かれいが好よい手本てほん 皆みなさま確しつりなさいませ

ドンドコ ドンドコ ドンドコ ドン サアサア私わたしが御案内ごあんない

皆みなさま跟ついてムこいませ ドンドコ ドンドコ ドンドコ ドン

と豆太鼓まめだいこを叩たたき乍ながら驅かけ出した。欲よくに目めの無ない群衆ぐんしゅうは先まづ第一だいいちに金銀きんぎんの小玉こだまを一ひとつなりとも拾得しふとくし、其葬式そのさうしきに加くはり、故人こじんの靈れいを慰なぐさめむものと、蒸むし暑あつい夏なつの日ひ

を欲よくの皮かはを引張ひっぱつて、汗あせをタラタラ絞しぼり乍ながら走はしり行ゆく。

(大正一二・三・二六 舊二・一〇 於皆生温泉濱屋 北村隆光録)

## 第二章 天葬てんざう (一四七二)

エルは先頭せんとうに立たちワツクスワツクスの家いへに驅かけつけた。オールスチンのコルブスはソファソファの上に静しづかに眠ねむつて居ゐる。其傍そのたはらにワツクスは田螺たにしのやうな目を剥むき口くちあんぐりさせ乍ながら、天井てんじやうの棧さんを睨にらみつけたやうなスタイルで、手てを疊たたみにつき、足あしを投げ出して中腰ちうちしに倒たふれて居ゐる。そして目玉めだまばかりクリクリと回轉くわいてんさせて居ゐた。其その嫌いやらしさ、到底たうてい化物ばけものとより見みえなかつた。日ひはソロソロ暮くれかかる。何なんともなしに嫌いやらしさが四邊しへんから襲おそうて來くる。數多あまたの欲惚よくぼうけの連中れんちゆうは直ただちに奥おくの間にドカドカと先さきを争あらしうて押入おしいり、ソファソファの下したを見みれば一文いちもんも残のこつて居ゐない……こりや大方かたから倉くらの中なかだらう……と鍵かぎを探さがし出だし倉くらの中なかに押入おしいつて、其處邊そこらの什器じふきを引繰ひつくりかへ、

金の所在を探して居る。

エルはワックスの前に丁寧に両手をつき、

エル「もし、ワックス様、存じもよらぬ、お父様にはお氣の毒な事が出来まして、嘸御心配でムいませう。併し乍ら斯うして置く譯にも行きませぬので、此エルは直様町内へ報告致し、此通り大勢の者を連れて参りました。何卒安心下さいませ。それに就いてお父上様が生前に貯へ置かれた金銀のお寶、町民一般に遺物の爲、競争的に取らせるのが此町内の習慣でムいますから、それは御異存ムいますまいな。當家の財産は全部オールスチンの物、其所有主が歸幽された以上は、これは公有物でムいますから、町民の自由に任せ什器一切を持ち去る事にするでせうから、そのお考へをして居なさるが宜しからう。其代り葬式の費用は諸道具を賣拂つて其一部で當てませう。お前も一つ働いて財産を残して置くが宜からう。何故お前は生前財産の一部分を譲つて貰つて置かないのです。本當に智慧のない事でしたね」

ワックスは漸く口を開き、残念さうに白眼勝の目玉から涙を垂らし乍ら、

ワックス「アーア、おい、エル、残念な事をしたワイ。一步歸るが遅かつたので  
到頭財産を譲り受ける事が出来なかつた。そこへ化物が出て來やがつたので腰を  
抜かし身動きのならぬ處に、オークス、ビルマの奴、大トランクに金銀を詰め込  
みエチエチと逃げ出しよつた。まだ遠くは行くまいから誰か行つて彼奴を取つ捉  
まへて分配をし、其中から三千兩ばかり俺に返して呉れまいかな」

エル「ソリヤ、もう仕方が無いぢやないか。先取權があるのだからな」

ワックス「エー残念な事をした。此怨みを如何しても晴らさにやおかぬのだ」

エル「男らしくもない。そんな執着心を持つな。それよりも早く腰を上げて神館  
に參り親の歸幽を報告し、厚く葬る手続きをした上、御養子になつたら如何だ」

ワックス「三五教の魔法使が滅びぬ間は駄目だ。何とかして彼奴を平げる工夫は  
あるまいかな」

エル「あらいでかい。何も彼も俺がスツカリ呑み込んで居るのだ」

と利口らしく云つて居る。そこへ澤山の爺、婆が水鼻汁を垂らし乍らやつて來て、  
目を擦り手鼻汁をかみつつ、

一同（泣聲）『ワーンワーンワーンワーン、オーンオーンオーン、これワックスさま。確りしなされや。悲しい事ぢやないかいな。ワーンワーンワーン、オーンオーンオーン』

と義理一遍の作り泣きを始め出した。家の外にも内にも目に唾をつけて義理泣きが始まった。此處の習慣として何程憎らしい敵が死んでも、義理泣きをせなくば町外れをされる規則がある。倉の中の財産に目をつけた連中も各自に自分の名札を記け終り、ヤツト安心してワックスの前に來り、

一同（泣聲）『ワーンワーンワーンワーン、オーンオーンオーンオーン、ワーンワーン、ウーンウーンウーン、ワックスさま、誠にお氣の毒でございます。もう諦めなさいませ、私も諦めます。澤山な遺物を頂戴して有難涙が出ます。ワーンワーンワーンワーン、オーンオーンオーンオーン』

暫らくすると町内の葬式係がやつて來た。さうして比丘が鈴を恭しく左手に持ち、右の手に數珠を巻き乍ら、コルブスの前に端坐し、怪しき經文を唱へ初めた。比丘『チーン、チンチンチン、諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅爲樂、南無



波羅門尊天子、自在天子、大國彦命、歸妙頂來、靈寶加持。惟るに現世に生存する事、八十有餘年、その間に於てテルモン山の神館に仕へ、家令の職となり上り、館の會計は云ふに及ばず、一切の事務を處理し、其功空しからずと雖、元來貪、瞋、癡の罪惡深きを以つて、バラモン天より賜りし一子ワックスは無賴の惡漢となり、且癡愚迷妄の徒と蔑まれ、糟糠の妻には早く別れ、淋しき浮世を送りたるは全く天命の然らしむる所、然り乍ら神は至仁至愛に在ますが故に、今回の歸幽と共に、外部的状態を除去して、八衢に於て凡ての罪惡を削除し清淨無垢の精靈となし、天國に救ひ玉ふ事必定なり。汝オールスチンの精靈、現世に執着心を残さず、速に幽冥界の法則に従つて不老不死の靈界へ旅立ちせよ。必ず迷ふ事勿れ。迷ひは地獄の種なるぞ。歸妙頂禮、南無波羅門尊天、守り玉へ惠ませ玉へ、チーン、チンチンチンチンチン」

比丘「サアサ、これでスツカリ引導を渡して置いた。皆さま土葬に致しますか、水葬にしますか、但は天葬に致すか、どちらが宜しいか。それは御勝手、定めて下さいませ」

ワックス「私は喪主だから私の望み通りにして貰ひませう。何卒天葬に願ひませう。さすれば天國へ参るでせうから」

比丘「皆様、ワックス様の意見に従ひ、これから天葬に致しますから、御苦勞乍ら其用意をして下さい」

一同は「承知致しました」と總ての準備を整へ、オールスチンのコルブスを戸板に載せて、テルモン山の墓地を指して送り行く。

天葬と云へばコルブス（死骸）を墓地に運び石刀や丸石を以て體を細々にきざみ、骨も残らず粉にして了ひ、麥の煎粉をまぶして團子をつくり、澤山な禿鷲に喰はして了ふ儀式である。又水葬と云へばコルブスを其の儘川へ投げ込んで了ふ儀式である。數多の老若男女は石刀や石片や種々の木刀を以てコルブスを一寸刻み五分試しとなし、潔き歌を唄ひながら汗をタラタラ出して天葬の準備に着手した。禿鷲は中空に羽ばたきしながら幾百ともなく翱翔して待つてゐる。比丘は歌を歌ふ。一同は拍子をとつてコルブスを挫く。

## 比丘の歌

諸行無常、是生滅法  
生滅々已、寂滅爲樂は世の習ひ

兔角此世は假の世だ  
鷲の腹へと葬られ

翼なき身に中空を  
翔りて尊き天國に

難なく上る目出度さよ  
チンチンチンチン、チンチンチン

皆さま確り頼みます  
オールスチンのコルブスは

チツトは骨が折れるぞや  
皮と骨とが澤山で

チツトも肉がない故に  
秃鷲どもの喜んで

喰つて呉れるか知らないが  
そこは、それぞれ焦し麥

粉をドツサリ塗りつけて  
うまく味をば付けるのだ

只一片も地の上に  
残しちやならぬ天葬式

秃鷲どのも骨折つて  
一つも残らず喰つて呉れ

チンチンチンチンチンチン  
諸行無常、是生滅法

生滅々已、寂滅爲樂  
假の浮世を後にして

執着心を脱却し  
身も魂も天國に

黄金こがねの翼つばさに乗のつて行ゆけ  
こんな芽出度めでたい事ことあるか

ワックスさまも幸福しあわせだ  
土葬水葬火葬どさうすいさうくわさうとて

賤いやしき民たみの葬式さうしきに  
比くらべて見みれば最善さいぜんの

此この法はふ式しきで天國てんごくへ  
救すくはれて行ゆく父上ちちうへは

誠まことに結構けつこうな身魂みたまぞや  
喜よろこび祝いはへ皆みなさまよ

チンチンチンチンチンチンチンチンチン  
天國淨土てんごくじやうどで永久とこしへに

百味ひやくみの飲食おんじき與あたへられ  
華はなの臺うてなに坐ざを占しめて

下界げかいを遙はるかに見み下おろしつ  
テルモン山ざんは云いふも更さら

神かみの館やかたを始はじめとし  
此この町内ちやうないの人々ひとびとの

惱なやみを拂はらひ身みの幸さちを  
守まもりて誠まことの生神いきがみと

ならせ玉たまへよ、チンチンチンチンチンチンチンチンチンチン  
チンチンチンチンチンチンチンチンチン

皆みなさま之これで有あり難がたい  
バラモン教けうの讀經どくきやうが

目出度めでたく終結しうけつ致いたしました  
さらばお先さきへ歸かへります

第一番だいいちばんの天葬式てんさうしき  
營いとなみなさつた事ことならば

お布施もドツサリ張り込んで  
後から持つて来てお呉れ

遺産が澤山ある故に  
何程お金を使ったとて

皆さま腹が痛むでも  
頭が悩むでもない程に

同じ風呂屋の湯の水を  
汲んで隣のお客さまに

與へてやるも同じ事  
比丘を大切になさいませ

歸依佛歸依法歸依比丘だ  
此大法を謬らば

皆さま死んで地獄道へ  
忽ち墮ちると覺悟して

お布施を惜しまず出しなされ  
アア左様なれば左様なれば

これからお先へ歸ります  
チンチンチンチン

と鈴を打ち乍ら二人の従者を引率れ自分の庵に歸り行く。

一同は漸く天葬式を濟ませ、再びワックスの館に歸り、種々の馳走を惜氣もな  
く拵へて暴飲暴食にうつつを抜かした。ここに又一場の大活劇が演ぜられた。そ

れはスマートが酒宴の最中に跳び込んで来た事である。

第二三章 藥罐(やくわん)〔一四七三〕

オールスチンの天葬式も無事終了し、新主人ワツクスの館には町人が數百人集まり來り、家の外に蓆を敷いて坐つたり、草の上に腰をおろして握り飯を嚙じつたり、醍醐味をあふつて盛んにメートルを上げてゐる。其處へ何處とも無く飛んで來た一頭の猛犬、矢場に座敷に驅け上り、前後左右に荒れ廻る。されど不思議にも誰一人創つけられたものは無かつた。ワツクスは、ワツクス「それスマートの狂犬が來た。此奴が俺の肱を噛り、戀の邪魔をした畜生だ。思ひ知れ」

と立ち上り、長押の槍を取るより早くスマート目蒐けて突いてかかる。スマートは前後左右に身をかはし巧に逃げて居る。老若男女は右往左往に逃げ廻り、石を

拾うて投げつけるものあり、ウウウー、ワンワンワンの犬の聲と共に、阿鼻叫喚の地獄と忽ち化して仕舞った。エルは矢場にワックスの腕を握り、

エル「これこれワックスさま、今日はお父さまの御命日なり、假令畜生なりとて殺生をしてはなりません。マアお鎮まりなされ。お父さまの天國の邪魔なさつ

ては不孝の上の不孝です」

ワックス「何、あの爺、俺を恨んで居たのだ。臨終の隙まで金銀を床の下に隠し、

遺言もせず死んで仕舞った。夫故オクス、ビルマの奴に旨くしてやられ、こ

んな残念な事があらうかい。この犬に腕を咬まれてさへ居なかつたら、滅多に彼

奴に取られるのぢやなかつたに、思へば思へば此犬が恨めしい、放つて置いて呉

れ」

と無理に振り放さうとする。スマートはいつの間にか鐵瓶に化けて仕舞ひ、チン

チンと湯氣を立て、厚い鐵蓋を動かして唸つてゐる。

エル「ア、何だ、犬だと思へば忽ち鐵瓶に化けやがった。これや犬鐵、貴様は何

恨みがあつて當館へ亂入致したのだ。返答次第によつて容赦はせぬぞ」

と詰めかける。鐵瓶の口からは熱い湯を何斗となく吐き出す怪しさ。一同は、

「アツツツ」

と叫びつつ逃げ出し、遠目から不思議さうに見て居る。暫くすると鐵瓶は俄藥罐に變つて仕舞つた。忽ち目が出来、鼻が出来、耳がつき、手足が生へて踊り出した。一同は夢か現か化物かと眞青な顔をして見詰めて居る。藥罐は忽ちオールスチンの姿となり、藥罐頭に湯氣を立てて、ソロソロ演説を始め出した。

藥罐の化物「皆さま、當家の主人オールスチンの歸幽につきまして、大變な御苦勞をかけました。私はオールスチンの精靈でムいます。初めに犬となつて吾家へ歸り漸く鐵瓶から藥罐に變化し、茲に精靈完成してお暇乞ひの演説を致す事になりました。決して妖怪でも何でもムいませぬから近よつて下さいませ」

エル「もし藥罐さま近よらぬ事はありますませぬが熱湯を口から噴き出して、吾々一同を悩ます積りぢやムいませぬか」

藥罐の化物「決して左様な事は致しませぬ。私は現世に生れてから八十有餘年。その間に人の秘密を探り、犬の役を勤め、たうとう此の神館の御主小國別様に見



出され、家令の職にまで拔擢されました。夫より日々館の番犬を勤め、臭い物を嗅出して手柄と致して居りました。その罪障が現はれて吾精靈は犬と變化し、御存じの通りの暴虐をやつて來た罪の映象が現はれたのでムいます。それから皆さまに面の皮の厚い奴だ鐵面皮だと罵られ、其名の如く一時は厚顔無恥の鐵瓶となり、皆さまに熱茶を浴びせた惡黨でムいます。然し私の尻には彼の鐵瓶の如くあのやうに烈火が燃え立ち、實に苦しうて耐へられなかつたのでムいます。漸く罪が取れると共に面の皮が少しく薄くなり、欲の皮は少し削られた爲にあの通り薄い藥罐となり、頭の毛迄が脱けて倅のワツクスの奴に藥罐爺と云はれて居りました。貴方方からも矢張り藥罐々と罵られて居りました。其言靈が凝り固まつてこんな藥罐となり、無念の熱湯を噴いたのでムいます。最早私は三五教の宣傳使の教訓によりて罪から救はれ、靈界に參りますから、どうか私の財産は此國の規則通り皆さまで分配して下さい。倅のワツクスは私の惡を企んで居た時に出來た者でムいますから、身魂が汚れて居ますから、一苦勞させねばなりませんから、私の財産は一物も與へないやう願ひます。何卒皆さま御勝手に御處分を願ひます」

と云ひ終り、俄に麗しき若き天人の姿となつて、地上七八尺の空中を歩んでテルモン山の山奥さして姿を隠した。

エル「此奴は怪しからぬ。「どてらい」化物が現はれたものだな。オイ皆さまあれを本當のオールスチンの精霊だと思ひますか。全く三五教の魔法使が、吾々一同を三五教に引ひ張り込まうと思つてあんな事をやつたのに違ひありません。屹度信じてはいけませぬ」

群衆の中から毛だらけの顔した男が又ツと立ち上り、

男「おい、エルの大將、それや何を云ふのだ。化物があんな事理整然たる事を云ふかい。あれやきつとオールスチンの精霊に間違ひ無いわ。貴様も些と改心したがよいわ。このタンクさまの眼力で睨んだらちつとも間違ひはないわ。本物が間違ひか鑑定がつかないやうでお館の受付が出来るか、馬鹿だなア」

エル「おい、ワックスさま、お前何と思ふか、タンクの云ふ事が本當か、エルの云ふ事が本當か、一つ考へて貰ひ度いものだなア」

ワックス「子の可愛うない親は世間にない筈だ。極道の子程可愛なのが親の情だ。」

それに親一人子一人の俺を残して置いて、財産を一つも遣つて呉れるなど云ふ奴は、テツキリ化物に定つて居るわ。是はきつと三五教の悪魔が化けて来よつたに違ひない。オイ悪酔怪の御一同、親父の弔合戦だと思つて、小國別の館へ押し寄せ、魔法使をふん縛らうではないか。さうしなければ吾々町民が枕を高うして眠む事も出来ない。況て悪酔怪の務めが勤まらぬぢやないか」

エル「それでもスマートと云ふ畜生が門に目を剥いて居やがるから駄目ぢやないか。なああタンク、お前どう思ふ」

タンク「何構うものか、酒のタンクと呼ばれたタンクさまが、酒の勢で表門に立ち向ひ、スマートの腮に両手をかけ、メリメリメリと二つに引き裂いてお目にかけよう。日頃の手練を表はすのは今此時だ。高が畜生の一匹位何でもない。貴様は腰拔だから、一匹の犬に數百人が押し寄せてウスイ目に遇つたぢやないか。こんな引合はぬ事があるか。犬に咬れた位のものだと云ふが、世間に此位引合ぬものは無からう。サアこれからタンクが先頭に立つて征伐に出かけるから、誰奴も此奴も酒の酔ひの醒めない中に跟いて来い」

と云ひ乍ら大手を振つて歩み出した。ワックス、エルの兩人は後に従ひ千鳥の行列宜敷く、酒で作つた空元氣を發揮しながら、口々に歌を歌つて攻めて行く。

オークス、ビルマの兩人は大トランクに金銀の小玉を詰め込み、坂道を下つて行く途端、二人一度に足を交らせ谷川に眞逆様に轉落し、トランクの口は缺伸をして、金銀の小玉は谷川にキラキラと目を剥いて落ちて居る。タンクは早くも此様を見て小躍りし、

タンク「ヤア、此谷底に澤山の小玉が落ちて居る」

と云ひながら、身を躍らして谷底に飛び下りた。續いてエル、ワックス其他數十人折重なつて忽ち谷底に人の山を築いた。オークス、ビルマの兩人は頭に【ひび】を入れて苦し氣に唸つて居る。二つのトランクをタンクは引抱へ、水の底に光つて居る金銀の小玉を砂ぐち掴んで放り込む欲深さ。次から次へやつて来て、茲に忽ち寶の取合が初まり一悶錯が起つた。

タンクは手早く二三千兩の金を拾ひ、一つのトランクの底に捻込み、肩に引つけかけ谷川に沿うて何處ともなく逃げて行く。

第二四章 空縛(一四七四)

小國別の神館には家令のオールスチンが歸幽せし事を、トンクの報告によりて知り、直に大神殿に進んで山野河海の供物を獻じ、三千彦を祭主となし求道居士、小國姫、デビス姫、ケリナ姫、ヘルその他の下男、下女、參列して、オールスチンの歸幽報告祭を行ひ、且つ其冥福を祈るべく、盛大なる祭典を行つて居た。斯かる所へハルナの都の大黒主が使者として、ニコラス宣傳使はポリト、バット、リーベナ、ハンナ、マリス、ルイキンの六人の從者に數十人の兵卒を引き率れ、此の館に慌しく入り來り、應接室に陣取つて祭典の濟むのを待つて居た。三千彦その他の一同は、ニコラスが數十人の兵を引き率れ此館に來りし事を夢にも知らず、一心不亂に祈願を凝らし悠々として奥の間に引き返し休息せむとする時しも、

ニコラスは長劍を腰に吊つたまま入り來り、

ニコラス「拙者はハルナの都の大黒主の神様より、重大なる使命を帯びて出張致

した者でゐる。長途の旅にて引率せる兵卒も疲れ居りますれば相當の休養所をお

與へ下さい。して、小國別殿は如何致されたか、速に此處にお出ましを願ひ度い

小國姫「これはこれは遙々と御上使のお出、夫小國別お出迎へ仕るが本意でゐ

ますれど、生命に關する位の大病を煩ひ、今漸く命を取り留めたる所でゐますれ

ば、不本意ながら失禮致して居ります。何卒々々お赦し下さいませ」

ニコラス「小國姫殿、それは嘸御心配でゐらう。御病氣とあればたつてお目にか

からうとは申さぬ。併し乍ら、當館には外道の宣傳使三千彦とやら申す魔法使が

圍ひあるよし聞き及ぶが、如何でゐるか。其方も大切なるバラモン教の靈場、殊

に大黒主様發祥の館を預らるる身の上なれば、よもや左様な取違ひはあるまいな。

速に御返答承はりませう」

小國姫「ハイ、此期に及んで何を隠しませう。お察しの通り三五教の宣傳使三千

彦様初め求道様と云ふ眞人が參つて居られます」

ニコラス「かかる尊き聖場へ、誰人の許しを受けてお入なされたか、其理由を承はらう」

小國姫はハツと胸をつきなながら、叶はぬ處と覺悟を定め、涙を片手に拭ひ、  
「誠に申譯のない次第で△いますが、是には深い仔細が△います。何卒一應お聞き取を願ひます。此お館には悪人蔓り、大黒主様より吾々が預りし御神寶を盗み取られ途方に呉れ、吾々二人は腹かつさばいて申譯をせむかと思ふ所へ、飄然として三五教の三千彦宣傳使がお越しになり、玉の所在を教へて下さいました。又妾が娘二人迄悪漢に誘拐され、憂愁の涙に暮て居る所をお救ひ下さつて漸く親子の對面致した所で△います。それ故この二人のお方は此館の救ひ主と思ひまして、早く歸り度いと仰有るのを無理に引き留めて居ります。決して三千彦様や求道様に罪は△いませぬ。皆妾が引き入れたのですから、如何やうとも御成敗を願ひます」

ニコラス「其方の成敗は一先づ大黒主様の御意見を聞かねば處置する事が出来ぬ。夫迄神妙に控へて居られたがよからう。併し乍ら、外道の宣傳使は一刻も猶豫は

ならぬ、サ一刻も早く此方の前に引き出しめされ』

小國姫「ハイ」

と云ひ乍ら顔色を變へてモジモジして居る。

三千彦「拙者がお尋ねの三千彦でムる。今日は三五教の宣傳使とは云ひ乍ら此館

の養子デビス姫の夫でムれば貴方の自由にはなりますまい。御意見あらば承はり

ませう」

求道居士「拙者は三五教の修驗者求道居士と申すもの、當家の娘ケリナ姫の夫で

ムる。不都合がムれば如何やうともなさつたがよからう」

デビス姫「お上使様、妾は三五教の宣傳使の妻でムいます。どうか夫の代りに妾

を御處刑下さるやうにお願い致します」

ケリナ姫「妾も夫の身替りに御處刑を受けます」

三千彦「アハハハハ、ニコラス殿、サア早く吾々をお縛りなされ」

ニコラスは謝るかと思ひの外、度胸の据つた四人の勢に辟易しながらも、六人

の従者に目くばせした。六人は懐より捕縄を取り出し、四人に繩をかけた。四人



は従容として縛されたまま表門に引かれ行く。ニコラスは天下の懲戒と門前の廣場に杭を打ち、四人を雁字搦みに繋ぎ置き、數十人の兵卒に固く守らせ置き、六人を従へ、肱を張り再び奥の間に歸り来る。

小國姫は唯一人脇息に凭れ憂ひに沈んで居る。

ニコラス「アイヤ、小國姫殿、斯の如き弱蟲を何と思つて御館へお入れなさつたか、貴女にも似合ぬやり方、二人の娘迄咎人となさるとは早まつたやり方だ。氣の毒ながらもはや助ける譯にはゆきませぬ。覺悟をなされたがよろしからう」

小國姫「何處迄も付け狙ふ禍の神、もはや覺悟は致して居ります。皆様、オサラバ」

と云ふより早く懐の懐劍を取り出し突き立てんとする一刹那、スマートは宙を飛んで駆け來り、ワンと一聲懐劍に咬り付き、もぎ取り表をさして韋駄天走りに走り行く。隣室より三千彦の聲として、

「千早ふる神の恵に抱かれし

わがらたま 吾體を縛るよしなし。

あななひ 三五の神の教の宣傳使

いまここ 今此處にありニコラスの君

ニコラスは、此聲を聞いて不審晴れやらす、

「イヤ小國姫殿、其方は三五教の魔法を習つたと見える。ますますもつて怪し

らぬ代物だ。もうかうなる上は大黒主様の御命令を待つ迄もなく、ふん縛つて成

敗を致すでムらう。ハンナ、マリス、其外の四人速に此女を縛せ

「ハイ」と答へて六人は小國姫を無雜作に縛り上げむとす。此時隣の室より涼

しき聲にて、

「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、百、千、萬」

と天の數歌が聞えて來た。小國姫の肉體より、忽ち金色の光放射し、ニコラス初

め六人の者は忽ち眼眩み、タチタチと後しざりしながらバタリと座敷の眞中に倒

れける。

三千彦、求道、デビス、ケリナの四人は莞爾しながら、次の間から悠々として現はれ來り、小國姫の前に座を占めた。小國姫は見るより二度吃驚、

「ア、貴方は宣傳使様、ヤ、娘、どうしてあの縛を解いて歸られたか」  
三千彦「誠一つの肉體には、刃は立ちませぬ。縛つても縛る事は出来ませぬ。御

安心なさいませ」

小國姫「有難うムいます。三五教の大神様、ようお助け下さいました。只今限りバラモンは思ひ切り神殿は取り除けますれば、何卒お許し下さいませ。アア惟神

靈幸倍坐世」

と合掌して居る。

ニコラス以下六人は又もやムクムクと起き上り、

ニコラス「ヤア其方はどうして縛を解き歸つてうせたか、不届者奴。サア早く手

を廻せ」

四人は一度に、

「アハハハハ、ホホホホ」

と哄笑し乍ら手を廻した。六人は念入りに四人を縛り上げ、今度は最早大丈夫と、細き針金をもつて其上を縛り乍ら、又もや門前に引いて行く。數十人の兵士は何れも長途の旅に勞れ「グタリ」となつて他愛もなく眠つて居る。ニコラスは大音聲にて、

ニコラス「汝等兵士の奴輩、大切な咎人を取り逃し眠つて居ると云ふ事があるか。左様な事で大切な御用が勤まるか」

と呶鳴りつけた。此聲に兵士は一同驚き立ち上り、「氣をつけ」の姿勢で直立し、行儀よく竝んだ。ニコラスは又もや四人を同じく縛りつけて置き、兵士に嚴重に監督警護すべく命じ、オホンと呶拂ひしながら大手を振つて六人を従へ、奥の間に進み入る。奥の間には小國姫、ヘルが心配さうに火鉢を中に置いて何事か囁いて居る。ニコラスは威猛高になり、

ニコラス「如何に小國姫、千變萬化の妖術を使ふとも、斯の如く針金をもつて縛りつけ數多の兵士に守らせたれば最早逃れる道はない。サア是から其方の番だ。速に手を廻せ」

小國姫をくにひめ「ホホホホ、どうせ命いのちを捨てようと決心けっしんした妾めかけでムいます。そんな難むづかしい顔をかほせずに縛しばり上げて、突つきなと、斬きるなと御勝手ごかつてになさいませ」

ヘル「オイ、ニコラス、貴様きさまは俺おれの顔かほを知しつて居ゐるか、俺おれは軍曹ぐんさうのヘルさまだぞ。今日は押おしも押おされもせぬ天下てんかの泥坊どろぼう様だ。サア縛しばつて行ゆけ。貴様きさまの今いま縛しばつて行いつた求道居士きうだうこじは、鬼春別將軍おにはるわけしやうぐんの祕書官ひしよくわんエミシのカーネルさまだ。下級かきふの者ものが上官じやうくわんを縛しばり上げると云いふ事ことがあるか、反あへこへ對たいに俺おれの方ほうからハルナの都みやこへ注進ちゆうしんしようか」

ニコラス「エエ、カーネルでもヘルでも容赦ようしやがあらうか。大黒主様おほくろぬしさまに反はん抗かう致いたした大罪人だいがいにん、サア早はやくハルナ、マリヌ、容赦ようしやは要いらぬ、直ただちに縛しばり上げよ」

「ハイ」と答こたへて六人ろくにんは又またもや二人ふたりを嚴きびしく縛しばり上げ、門前もんぜんの廣場ひろばへ引ひきつれ行く。

(大正一二・三・二六 舊二・一〇 於皆生温泉濱屋 加藤明子録)

ニコラスのキャプテンはハンナ、マリス外四人と共に小國姫、ヘルの二人を高  
手小手に縛め、門前の馬場に来て見れば警固させ置いた兵士は何れも一蓮托生、  
立つた儘白河夜船を漕いで居る。大杭に縛りつけて置いた三千彦以下四人の姿は  
影もなく、又今縛つてきた二人も何時の間にか繩ばかりになつて居る。ニコラス  
は不審に堪へず雙手を組んで首を垂れ思案に暮れて居る。俄に秃鷲がパツと空か  
ら飛つて来て軍帽の上から頭をカンカンとコツいた。アツと叫んでニコラスは芝  
原に蹲み頭を抱へて慄うて居る。秃鷲は五十人の兵士の居眠つて居る頭の上から  
一、二、三、四と萬遍なく、コツき廻つた。さうして最後の一人をグツと掴んで  
中空に翼を擴げ、誇り顔に舞うて居る。兵士は一時に兇靈の襲來を受け各刀を引  
き抜き、ニコラス外六人の士官に向つて、無性矢鱈に斬り込んで來た。ニコラス  
も頭の痛さをこらへハンナ、マリス以下四人を指圖し、兵士にむかつて應戦した。  
忽ち十數人の重輕傷者を出し、草を紅に染めてしまつた。此時空中に音樂ひびき、  
淑かな宣傳歌が聞えて來た。

其歌、

隆光彦たかてるひこ 天津御神あまつみかみの御言みこともて バラモン教けうの神館かむやかた  
 テルモン山ざんの靈場れいちやうを 救すくはむ爲ために三五あななひの  
 珍つづの司つかさの三千彦みちひこを バラモン神がみの乞こひを容いれ  
 神素盞かむすさのを鳴をの大おほかみ神は 此處ここに遣つかはし玉たまひけり  
 その御心みこころも露つゆ知らず バラモン軍ぐんのキャプテンが  
 數十すうじふの兵士へいしを引率ひきつれて これの館やかたに出陣しゅつぢんし  
 神かみの御前みまへに拜禮はいれいも なさず忽たちまち奥おくの間まに  
 闖入ちんにふなして神館かむやかた 主人あるじの妻つまを初はじめとし  
 誠まことの道みちの神柱かむばしら 一人ひとりも残のこらずフン縛しばり  
 無慙むざんの仕打しうちをなせしより 仁慈じんじ無限むげんの天地あめつちの  
 神かみは怒いからせ玉たまひつつ 旭あさひ、高倉たかくら二柱ふたはしら  
 神かみの使つかひを遣つかはして 勝かち誇ほこりたるニコラスの  
 軍いくさを悉目こじつこめを覺さまし 尊たふとき神かみの御教みをしへに  
 言向和ことむけやはす御仕組おんしぐみ ニコラス如何いかに勇ゆうあるも

神かみの力ちからに及およばむや 悔くい改あらためよ省かへりみよ

あななひけう 三五教あななひけうやバラモンの 教をしへと御名みなは變かはれども

その源みなもとを尋たづぬれば 大國おほくに治立はるたち大神おほかみの

珍うづの御裔みすゑと知しらざるか アア惟かむながら神かみ々々

神かみの教をしへにいと暗くらき 色盲患者しきまうくわんじやの武士つはものよ

一日ひとひも早はやく眞心まごころに かへりて天地てんちの大道だいだうを

辨わきまへ悟さとれ惟かむながら神かみは汝なんぢと俱ともにあり

人ひとは神かみの子こ神かみの宮みや 心こころの魂たまの清きよければ

如何いかなる曲まがの襲おそふとも 如何いかで恐おそる事ことあらむ

汝なれが力ちからに相任あひまかせ 縛しばり上あげたる宣傳使せんでんし

其外そのほか五人ごにんの眞人まさびとは 誠まこと一つの勇士ゆうしぞや

悔くい改あらためて大神おほかみの 御旨みむねに叶かなひ奉まつりたる

尊たふとき神かみの太柱ふとばしら 如何いかでか汝等なんぢら曲神まががみの

繩なはに縛しばられ怯ひるむべき 朝日あさひは照てるとも曇くもるとも



月は盈つとも虧くるとも  
假令天地は覆るとも

誠一つを盡しなば  
現幽神の三界は

思ふがままになるものぞ  
眼を覺ませ早覺ませ

吾は隆光彦の神  
天津御空の天國の

神の使命を蒙りて  
汝等一同の曲神を

誠の道に救はむと  
天の八重雲掻き分けて

降り來れるものなるぞ  
此世を造りし神直日

心も廣き大直日  
只何事も人の世は

直日に見直し宣り直し  
吾身の罪を悔い覺り

人の過ち悉く  
直日に見直せ聞直せ

それが誠の神心  
神の心に曇りなし

誠の道にさやりなし  
誠は天地の寶ぞや

そもそもこれの神館  
バラモン教の大神を

齋き奉りしものなれど  
天津國より降りたる

如意の寶珠のある限り 瑞の御靈の靈場ぞ

大黒主は靈寶の 威徳に恐れて逃げ出し

千里の山野を打渡り 今は漸く月の國

ハルナの都に居を定め 大雲山の岩窟に

彌永遠に棲まひたる 八岐大蛇に操られ

偽り事を眞とし 惡をば善と信じつつ

脱線だらけの宣傳を 始めたるこそ嘆てけれ

汝ニコラス、キャプテンよ 吾エンゼルの言の葉を

只一言も洩らさず 胸の奥にと疊み込み

深く省みよく悟り 尊き神の御心を

麻柱奉れ惟神 神のまにまに諭し置く

吾はこれより久方の 高天原の靈國に

大宮柱太知りて 鎮まり居ます月の神

貴の館に舞ひ上り 此有様を詳細に

いとこまごまと復命し  
汝等一同神の子の

罪をば許し玉ふべく  
願ひ奉らむいざさらば

心の底より改めて  
神の御爲世の爲に

眞心捧げて盡せかし  
アア惟神々々

神のまにまに宣り傳ふ

と歌ひ終り、淡き煙となつて何處ともなく中空に消え玉うた。今まで居眠つて居

て禿鷲に片身怨みなく額をコツかれ、苦痛に悩んで居た兵士の傷は忽ち癒え、眠

氣も頓に覺め、精神爽快を覺え、何んとなく顔色まで生々して來た。ニコラスは

合點行かず、ハンナ、マリス外四人の士官を引率れ、再び館の奥の間に進み入り

見れば豈圖らむや、小國姫、三千彦を初め縛り上げた人々は嬉しげに手を拍つて

酒宴の最中であつた。ニコラスは翻然として悟り、神徳の廣大なるに感じ、涙を

流して三千彦に無禮の罪を謝した。此時館の外にはワイワイと山嶽も揺ぐばかり

の喊聲が聞えて來た。一同は何事ならむと耳を敬て暫し様子を窺つて居る。スマー

トの聲こゑは耳みみを劈つんざく様やうに『ウワツウワツ』と四邊あたりの木靈こだまを響ひびかして居ゐる。  
（大正一二・三・二六 舊二・一〇 於皆生温泉濱屋 北村隆光録）  
（昭和一〇・六・一五 王仁校正）

）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）

靈界物語 第五七卷 眞善美愛 申の卷

終り